

少子化時代の結婚観に関する研究

研究体制

企画推進： 長谷川文雄 東北芸術工科大学大学院長

研究協力： 犬田 充 東海大学名誉教授

三上俊治 東洋大学教授

松村 茂 東北芸術工科大学デザイン工学部助教授

小山田裕彦 東北芸術工科大学研究員

目 次

第 1 章	研究目的	1
第 2 章	結婚観の変遷	2
第 3 章	次世代は結婚をどう見るか	17
第 4 章	少子化時代の結婚観から見た新たなライフスタイル	56
第 5 章	少子化時代のネオ結婚観に伴う新しいサービス産業	69
第 6 章	座談会 ― 結婚観の今後の展望	74

第1章 研究目的

1-1 研究の背景

(財)ハイレライフ研究所では、1999年6月に「少子化に伴う家族のライフスタイル」と題する研究報告書を取りまとめている。そこでは現在急速に進行している少子化現象に注目し、それが家族を中心としたライフスタイルにどのような影響を及ぼすのかに関して包括的な研究を行った。

研究の過程でさらに検討すべき課題も数多く現れてきたが、当時はそこまで言及するまでに至らなかった。なかでも、少子化が進むにつれ、若者を中心とした男女がどのような結婚形態を選択するようになるのか、については重要な課題ではありながら掘り下げた研究を進められなかった。

本研究レポートはこの点にスポットを当て、いわゆる長男長女の時代になったときにどのような結婚を望むのか、を中心に分析が進められている。結婚は、単に男女が同居して法的にも認知されながら生活を営んでいくという行為にとどまらず、それぞれの家族、親類、友人をはじめ、勤務する組織体にまでさまざまな影響をもたらすことになる。

一方、わが国の人口変化の中でいまひとつ特筆すべき点は、高齢化が同時並行して進行する点である。親の財産の相続や、両親の介護、扶養など結婚を考えたときに、彼らの頭によぎる問題も多くなっている。

こうした観点から、少子化時代の結婚観を考えることは、将来人々が選択するライフスタイルにも深く関係してくるだろう。以上のような背景のもとに、本調査研究が進められた。

1-2 研究目的

具体的な、研究目的は以下のとおりである。

- 1) 文献調査による結婚観の変遷を明らかにする
- 2) 文献調査により最近の結婚動向について把握する
- 3) ヒアリング調査による結婚観の動向を調査する
- 4) ネオ結婚観に基づく新たな社会サービスの可能性に関する分析を行う
- 5) 以上の調査分析を踏まえた総括的な検討をする

第2章 結婚観の変遷

2-1 結婚観の変遷

結婚という形態は時代とともに絶えず変化している。結婚は単に当事者同士の恋愛関係だけでなく、多くの社会的な状況のなかで考えなければならない。たとえば、生まれてきた子供の嫡出性の認知、それぞれの親戚関係のつきあい、新たな親戚関係の形成、法的な権利と義務など、数多くの要因がある。

このため古代より、婚姻の社会的承認には種々の条件を満たされなければならなかった。例えば、血縁や地縁の了解、了承を得るために婚姻儀礼、法的届出などがあげられる。結婚は、時代の社会体制、男女の社会的地位関係などの影響を受け、それが結果として結婚観を形成している。

近代に入り、婚姻の法的整備が進んだ。たとえば、1871年に身分を超えた結婚が自由になり、また1873年には妻からの離婚請求権が認められるようになった。しかし一方では、明治民法では法律婚主義、すなわち戸籍届出により婚姻が成立し、法的な行使もそれに基づいて行われるようになった。裏を返せば戸籍届出が出されてない限り、内縁関係という位置づけになり、妻や生まれてきた子供（非嫡出子）に対する法的な権利・保障は弱い立場になる。

また、両家ということばに代表されるように、それぞれの「家」が重視され、一般的には嫁入婚となり夫の姓を妻が名乗る（婿入婚は妻の姓）夫婦同姓が規定されていた。

戦後は、新たに制定された憲法に則って民法が改正され、当事者の合意による婚姻制度と夫婦家族制が基本になった。男性は満18歳、女性は満16歳をもって婚姻が成立する。ただし、女性に限って妊娠との問題もあって離婚後6ヶ月間は再婚できない規定が設けられている。戦前の「家」重視、嫁入婚などの考え方が法的に変化し、それが戦前からある結婚観を変えていく下支えになったといえる。その結果、結婚に対する考え方も多様化し、従来にないライフスタイルが数多く現れてきた。平均結婚年齢が上昇し、また離婚率も高くなっている。女性の高学歴化にともない、社会進出も顕著になり、結婚の有無によらず生涯、職を持ち続けたいという女性も増えている。

2-2 少子化傾向と将来の人口動向

2-2-1 少子化と結婚の関係

少子化はいうまでもなく、生まれてくる子供の数が減ってくることである。99年のレポートでも分析したように、少子化現象は3つの段階から起きている。第一段階は、人口が多産多死から多産少死を経て少産少死に移る大きな転換による少子化である。いわば、ボディーブローのようにじっくりと効き目が現れてくる効果である。第二段階は、70年代半ばから、また第三は80年代半ばに起ってくるが、その大きな要因は「晩婚化」によるものとされる。

晩婚化を示す指標は、「平均初婚年齢」と「未婚率」である。平均初婚年齢は、1950年には男女それぞれ、26歳、23歳であったのが、97年にはそれぞれ28.5歳、26.6歳というように高く推移している。また、結婚をしない未婚の割合は年齢層により異なるが、20代後半と30代前半での上昇が著しい。特に、20代後半の女性の未婚率の上昇は激しく、1975年に20%であったのが95年には実に50%に達している。2000年10月の国勢調査によると、全平均未婚率は男性31.0%、女性23.0%となっている。特に女性の25-29歳は54%と半分以上になっている。

晩婚化が続くから子供の数が減ってくる。やがてその子供達が適齢期を迎えても晩婚化で結婚をしない。こうした連鎖が、少子化に拍車を掛けていくことになる。

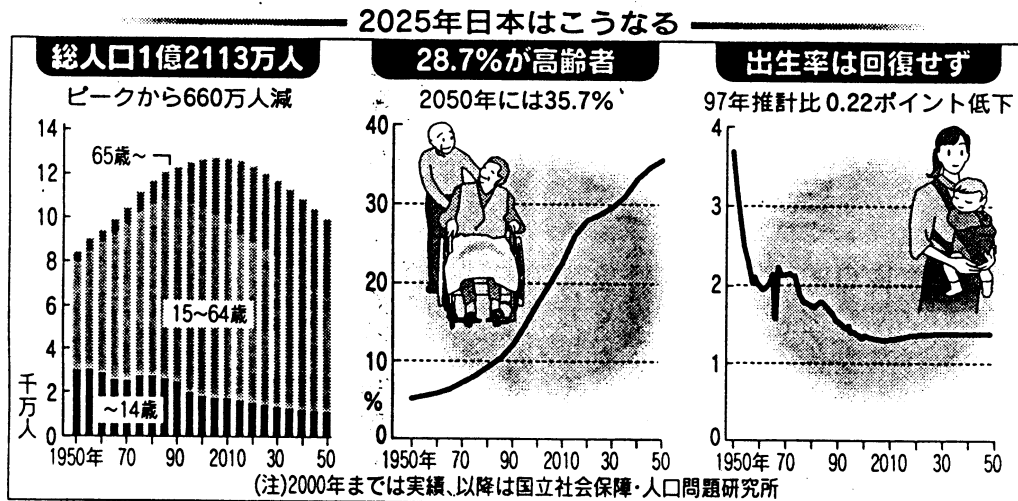
2-2-2 予想を上回る少子化・高齢化傾向

国立社会保障・人口問題研究所は将来の人口推計を次のように予測している。女性1人が生涯に産む子供の数いわゆる出生率は今後1.39止まりになるとしている。もう少し細かく見てみると、出生率は2000年で1.36となり、晩婚化による影響を大きく受けている。これまでの推計では出生率は長期的に見て1.61まで上昇するとしていたが、今回の推計では1.4を割る結果になっている。その要因として、第一は、結婚しても子供を持たない夫婦が増加していること。第二は、上述した女性の非婚化傾向である。

子供の数も現在の年間120万人から2050年には67万人程度になり、現在のほぼ半分となる。

高齢化の度合い（65歳以上の占める割合）は、2000年に2200万人だったの

が、2025 年には 3473 万人にのぼると予測され、57%程度増加することになる。さらに、医療の進歩とあいまって平均寿命も増加し、2000 年時点で男性 77.64



(図 2-1 2025 年の日本 出典：日経新聞 2002 年 1 月 26 日)

歳、女性 84.62 歳であったのが、2050 年にはそれぞれ 80.95 歳、89.22 歳になると予測されている。

2-3 多様化する結婚にまつわるライフスタイル

少子・高齢化が進む中、結婚を巡って近年に見られなかった新たな社会現象が生じている。ここではその現象と背景について垣間見てみよう。

2-3-1 できちゃった結婚

これまでの社会通念では、結婚した後に子供を産むというのが一般的だった。

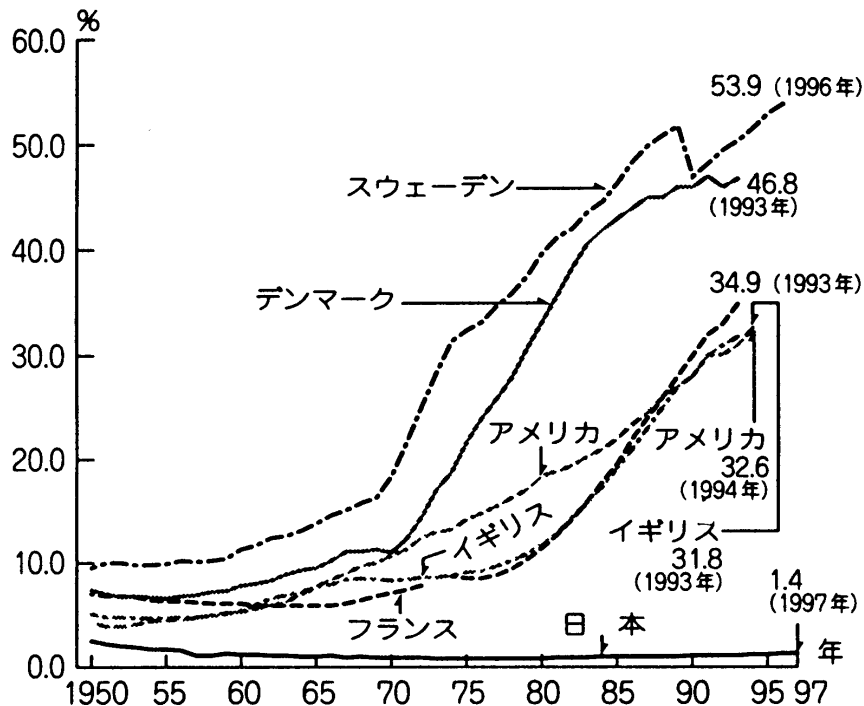
最近はその事情が変わり始めている。流行語にもなっている「できちゃった結婚」ということばに代表されるように、子供ができたために結婚せざるを得ない、という考え方である。その背景には、戦前からある非嫡子といった法的に不利な問題、また社会的な価値観などによって、結婚をしないで子供を持つことへの抵抗感があったからであり、生まれてきた子供の幸せのためにという考え方である。

因みに 2002 年 3 月に発表された「人口動態統計特殊報告」によれば、2000 年ではできちゃった婚が 26.3%で、実に 4 人に 1 人が該当し、20 年前の 2 倍に昇

っている。15-19 歳では出産の 81.7%が、また 20-24 歳では 58.3%ができちゃった婚となっている。当然若い世代ほどその傾向が高いことが分かる。

2-3-2 結婚と出産の分離

子供は欲しいけれど、結婚という形態をとりたくないという考え方である。いわゆるシングルマザーは、女性に経済的な余裕ないしは時間的な余裕がある場合が想定されるが、一般的にはそれほど容易ではない。



(図2-2 諸外国の婚外子出生率 出典：女性のデータブック 1999)

前述の「できちゃった婚」も必ずしも、結婚という形態を持たなくてもパートナーとなる男性と役割分担をしつつ責任を持って子供を育てる状況であればよしとする考え方も台頭しつつある。

図2-2からも明らかなように、諸外国では婚外子の割合が高くスウェーデン、デンマーク、イギリスで高くなっている。その背景には、結婚という形態以外で出産しても、さまざまな社会制度の充実、社会が婚外子を許容する規範が形成されている理由が考えられる。

2-3-3 国際結婚

厚生労働省の人口動態統計によると、2000 年における婚姻届数のうち 4.5% が国際結婚になっている。数にして 3 万 6,263 件となっている。このうち、妻が外国人で夫が日本人の組み合わせが全体のほぼ 8 割を占めている。これを国籍別にみると、妻は中国、フィリピン、韓国・朝鮮の順となっている。逆に、夫が外国人の場合は、韓国・朝鮮、米国人となっている。

1970 年の国際結婚は 0.5% にすぎなかったが、この 30 年間で 6.5 倍に増加している。80 年代後半に急速に増えたが、中には偽装結婚などの形態が目立った。その後審査が厳しくなり、しばらく横ばいの傾向が続いていたが、ここ数年再び急激に増えている。

地域別にみると、いくつかの顕著な傾向がみられる。東京や大阪などの都市部では 8? 10% に達している。中山間地域で高いのは花嫁を見つけるのが難しいとされて、東南アジアを中心にして花嫁が斡旋されてきた経緯のためである。

例えば山形県では、朝日町や大蔵村など行政が中心になってフィリピンから花嫁を求めてきた。現在は必ずしも行政が中心に動いているわけではないが、依然として韓国などから花嫁が迎えられている。山形県のほかにも、山梨県、北海道、宮城、岐阜などで増加する傾向がみられる。

2-4 結婚しない若者達

前述したように、未婚率は上昇の一途を辿っている。結婚したくない若者達、そしてそれを社会的に是認しようとする傾向が高まっている。パートナーに子供ができてしまったので仕方がないから結婚をするという羽目を回避すれば、自由気ままに振る舞える独身貴族でありたいとする気持ちも理解できるだろう。その典型が、パラサイトシングルである。

2-4-1 パラサイトシングル

本来、成人期に移行するプロセスで親の家から離れることは、その後の独立した生活を形成する上で重要な時期だといえる。だが、「就業構造基本調査」によれば、この親元を離れる時期が年々遅くなっている。20-24 歳の若者が親と同居する率は、1971 年で男性 62%、女性で 63% であったのが、1992 年ではそれぞれ 69%、76% と著しい増加になっている。こうした傾向を反映して、この世代の単身世帯が 1992 年以降減少している。

なぜ、親との同居が高まってきたのかを、社会的に考察するといくつかの理由が考えられる。

- a 地方に高等教育機関が充実してきたこと
- b 単身生活をするには経済的負担が掛かりすぎること
- c 地場での就業機会が増加してきたこと
- d 少子化により親元を離れる理由が低くなってきたこと
- e 居住環境が充実してきたこと

などの理由を指摘できる。マクロ的には若者の地域間移動が減少してきた点が大きい。

こうした世代は次第に「独身貴族」と呼ばれるようになってきたが、ここでいうパラサイトシングルは少し意味合いが違う。自分で働いて収入があるのに、親と同居して実家を離れず優雅な生活を送っている独身を指す。さながら寄生しているような状態から、パラサイトと呼ばれている。20? 30 歳までの若者で男女合わせて全国で約 1 千万人ほど存在するという試算結果もある。

日常的な世話は親が見てくれ、家賃や光熱費の心配もない。働いて得た収入はほとんど自分の好きなように使えるため、一人で暮らす場合と比べて、経済的にも時間的にもかなりのゆとりがもてる。いわば居心地のいい、リスクの少ない生活をエンジョイできる。

国立社会保障・人口問題研究所が 2000 年 6 月全国の学生を除く 18 歳以上の未婚男女 4,604 人と未婚男女が同居する 3,552 世帯を対象にパラサイトシングルに関する調査を行った。

親と同居する若者を年齢別に見ると、20 代が 63.1%、30 代全般が 14.4%に達している。就労状況は、87.8%が何らかの仕事をしており、そのうち 70%以上がフルタイムの仕事に従事している。そのなかで、同居している親に食費代など払っているのは 66.3%で、その額は平均して 28,500 円になっている。20 代のほぼ 3 割は完全なるパラサイトになっている。

彼らのすみかとなる居住は比較的裕福な家庭であることがわかる。親の持ち家比率は 80%に達し、このうち 70%以上が 5 部屋以上の家になっている。その結果、個室を持つパラサイトは 87.5%になり、快適な生活を送っている様子が想像できる。同居しているにもかかわらず、男性の 60%、女性の 30%程度は休

日といえども家事などの手伝いを一切していないと答えている。それどころか、20代の世代では、休日や休暇を利用して50%以上が年に数回国内外の旅行を楽しんでいる。さらに、高い可処分所得を反映して貯蓄にも関心が高い。20代では百万円未満だが30代では240万円程度に達している。

直接的な因果関係は明らかでないが、こうした親もとに寄宿する居心地の良さが、晩婚化に拍車をかけているとみられる。一方親も、必ずしも迷惑がっているわけではなく、世話をやかなければならない半面、いつまでも子供と一緒に暮らせる楽しさ、安心を感じていることも確かである。

2-4-2 ピーターパン症候群

1983年に米国の臨床心理学者ダン・カイリーが『ピーターパン・シンドローム』を出版してから注目されるようになった。何時までも子供でいたいという社会現象である。著者によれば、以下の状況を説明している。

- a 決して大人にならない子供たちのマンチャイルド（おとな子供）願望。
- b おとなの男性が、おとなの社会への仲間入りができず、「おとなこども」の状態でいること。

一般に社会には通過儀礼があり、それを済ませることによって人生の局面を変えることになる。成人式は社会的に「おとな」として認められる一つの通過儀礼だが、それを済ませたから直ちに精神的に大人になったわけではない。むしろ子供でいることで、大人として果たさなければならない責任を回避しようとする若者も増えている。こうした状況をピーターパン症候群とよんでいる。

2-4-3 高学歴化も一因か

晩婚化の理由の一つに高学歴化を挙げることができる。就学中は親から面倒を見てもらうのが一般的で、経済的自立が遅れ気味になる。1994年には、短大・大学への進学率は男子40.9%、女子45.9%と高く、現在はほぼ横ばい状態にある。前述したように、地場に高等教育機関が充実し、しかも長引く経済状況の悪化から、自宅通学が増加していることも、子供が家に居着く傾向を促している。

2-4-4 若年化が進む性交渉

厚生労働省は1999年に、無作為抽出による18歳から59歳の男女5,000人(有効回答70%)を対象にした性行動に関する調査を行った。いくつかの興味深い結果を記述してみる。

初体験はいつかという問いに対し、24歳以下の層は男女とも16?19歳の間ではほぼ80%に達している。さらに細かく見ると、このうち男性の18%、女性の13%が中学生時に経験したと答えている。この調査では彼らの親に相当する45?54歳の層にも同様の調査を行っているが、それと比較してみると初体験の質問では、16?19歳の間を経験したのは男性44%、女性16%と子供たちの世代と大きな隔たりがあることがわかる。着実に性交渉の若年化傾向が進んでいる。

さらに、これまでに持った性交渉の相手が「5人以上」答えたのが、女性では若くなるほど高いことがわかる。55歳以上では1.9%、45?54歳で4.6%なのに対し24歳以下では37.9%に達している。調査の結果からわかることは、若い年齢層ほど性の自由化が進み、それまでの社会的倫理観・規範から逸脱していることがわかる。

図2-4からもわかるように、結婚前の性交渉に関しては寛容な傾向にある。結婚しなければ性交渉がもてないという状況から、それぞれに愛があれば性交渉がもてる傾向にあり、それがまた晩婚化、非婚化の一因にもなっている。

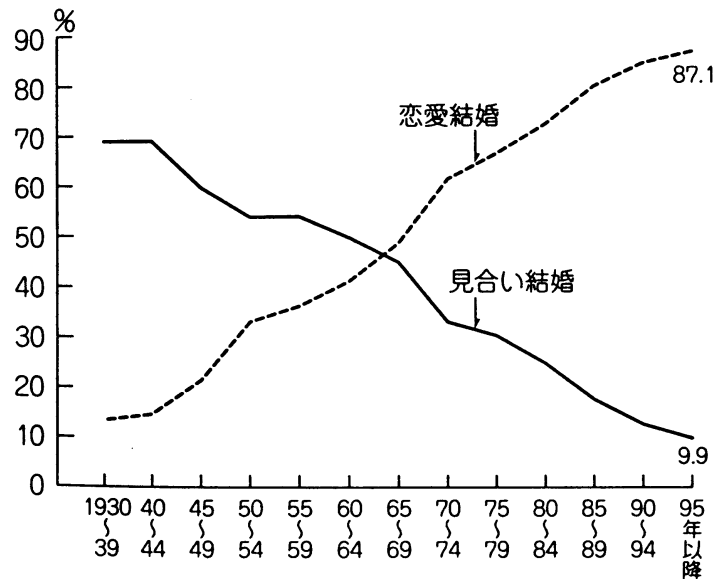
2-5 いざ結婚を選択するとき

2-5-1 結婚観、家庭観

結婚するためには、双方が何らかの形態で出会わなければならない。最近流行の「合コン」は、恋人探しの意味だがその延長には結婚を願望しているケースが少なくない。かつては、身近なところに縁談を持ちかけ、お見合いによる結婚が主流であった時期がある。これには2つの背景がある。第一は、戦前の「家」制度に見られるように、本人の意志よりも「家」が優先され、配偶者の家との釣り合いや、世間体が重視されていた状況である。第二は、結婚をしたいけれど相手が見つけれず、誰かに結婚の相手を見つけてもらうような場合である。

図 2-3 から明らかなように、1960 年代半ばを境にして、見合い結婚と恋愛結婚が反転し、現在では圧倒的に恋愛結婚が支持されている。

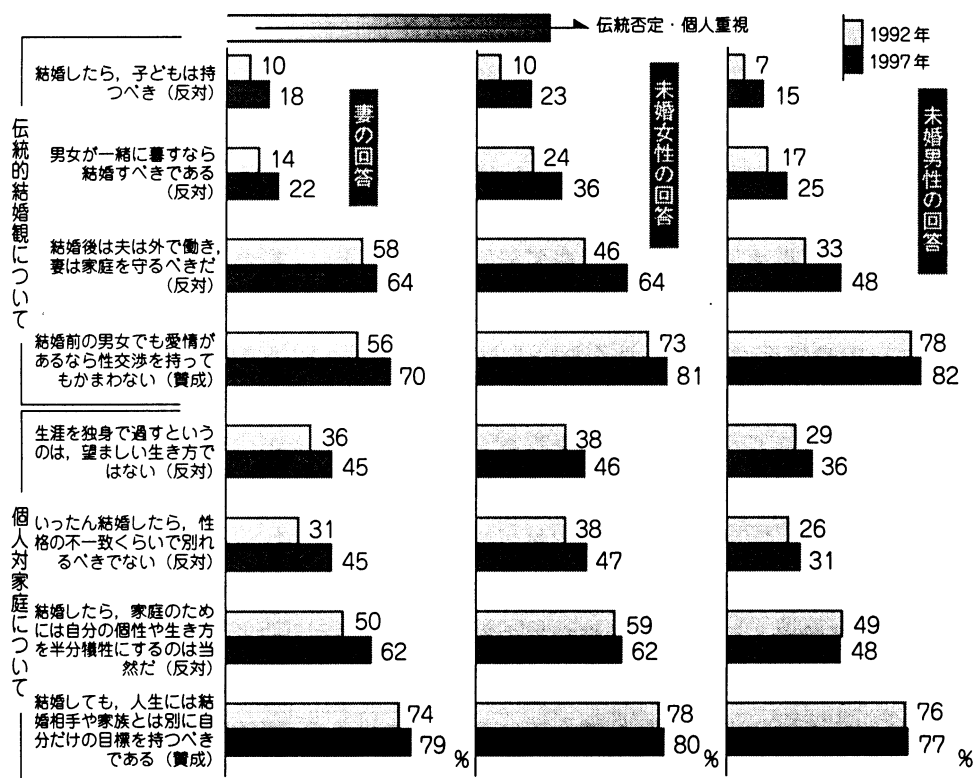
また、1992 年と 97 年に行われた、結婚と家族に関する意識調査の結果は興味深い（図 2-4 参照）。伝統的な結婚観として、「結婚したら子供を持つべきだ」、
（図 2-3 恋愛結婚・見合い結婚の時代による推移 出典：女性のデータブック 1999）



「男女が一緒に暮らすなら結婚すべきである」、「結婚後は夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」に対して、その考え方に反対する割合が、未婚の男女、既婚の女性ともにこの 5 年間で高まっている。特に、「夫は外、妻は家庭」に関しては女性から強い反発を買っている。また、結婚前でも愛情があれば性交渉をもっても構わないとする意見に、男女とも高い支持を示している。

さらに個人対家庭に対する回答も興味深い。たとえば、結婚をしないで生涯独身でよいとする考えにも支持の傾向が高まっている。結婚後も性格が合わなければ離婚してもよしとする考えに、女性が賛同を示す傾向が強くなっている。

また、結婚後に家庭のために自分の生き方や個性を犠牲にするという考えにも、女性は強く反発している。男女ともに高い支持をしているのは、「結婚しても、自分なりの目標をもつ」という意見である。この延長には、結婚によって、一人の人間としての生き方まで影響を受けたくないとする意識が見え隠れする。



(注) 回答者は、初婚同士の夫婦の妻と18～34歳の未婚者。設問によって、賛成者の割合(賛成)または反対者の割合(反対)の割合が示されている。割合(%)が高いほど、伝統的結婚観を否定する傾向が強いことを示す。

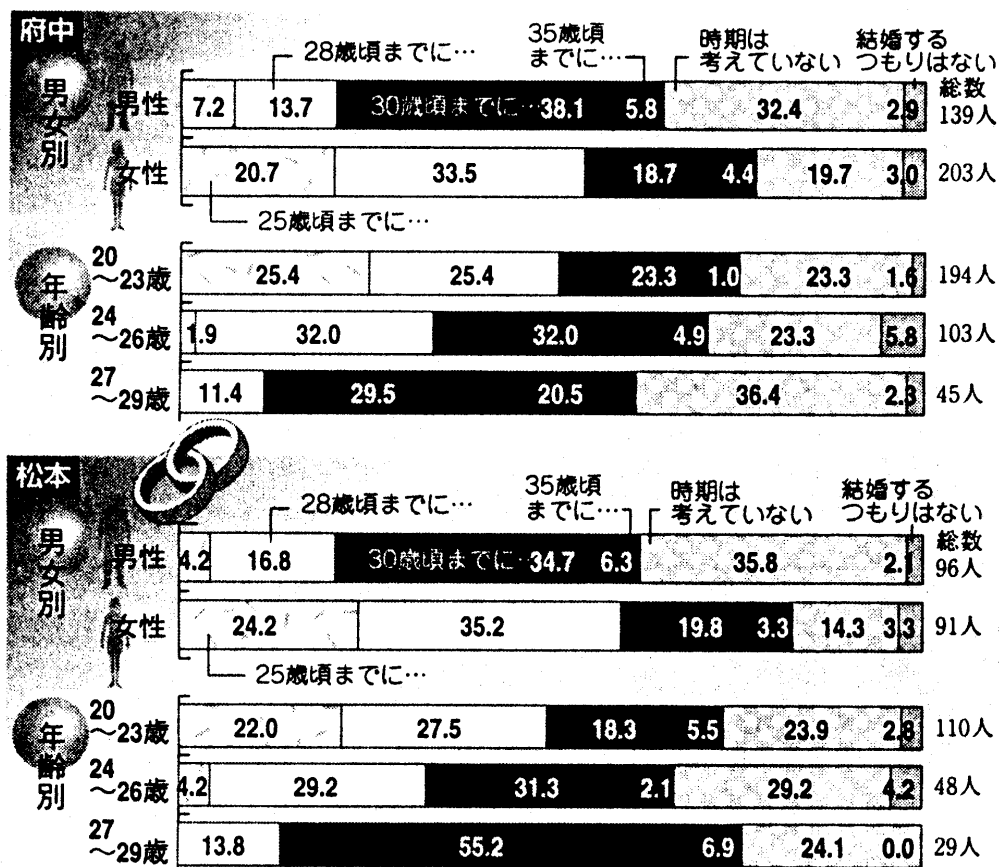
(図 2-4 結婚観、家庭観に関する意識 出典：女性のデータブック 1999)

2-5-2 結婚予定

晩婚化の傾向は現在も続いているが、その状況がいつまで続くか明らかではない。将来の結婚の予定について20代を対象にして行った調査結果によると、「結婚するつもりはない」と答えた割合はそう高くない。

図 2-5 から明らかなように、一生独身であり続けるという考え方が根付いているわけではない。若年層の結婚観は、現在付き合っている相手をそのまま将来の相手とするという一直線の思考ではない。なによりも自由な交際をしたいという考え方が見え隠れする。また、結婚の適齢期は30歳をひとつの節目ととらえている意識は根強かった。

しかし、最近の調査結果では都市部を中心に男性の平均初婚年齢が30歳を超えるようになってきた。ひとつの歯止めだった30歳が必ずしもその役割を果たさなくなっている。

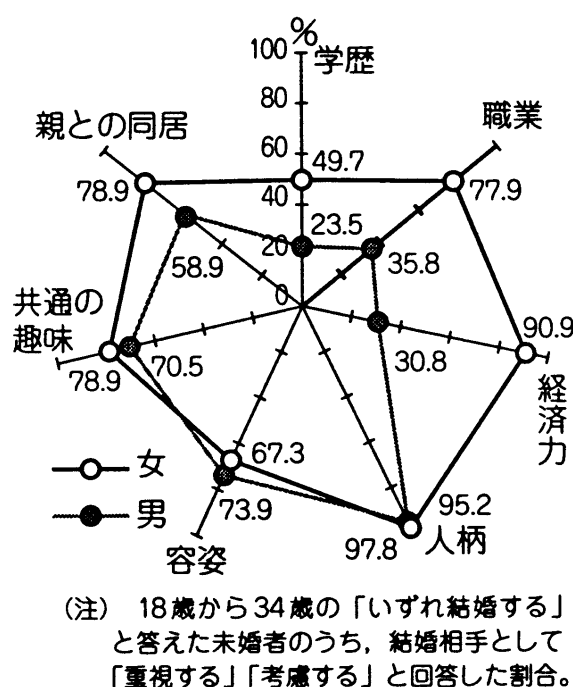


(図 2-5 20代の結婚予定調査 出典：女性のデータブック 1999)

2-5-3 結婚時の打算

それでは、いざ結婚しようとしたときにはどのような条件が前提になるのだろうか。かつて女性から見て男性を選ぶときの条件として「三高」すなわち、高学歴、高収入、高身長がもてはやされたときがある。

図 2-6 は 1997 年に行われた結婚相手を選ぶときの条件について意識調査が行われた結果である。図からも明らかなように、男性では女性を選ぶとき「容姿」(73.9%)、「人柄」(95.2%)、「共通の趣味」(70.5%)が高いスコアなのに対し、女性は「人柄」(97.8%)、「経済力」(90.9%)、「共通の趣味」(78.9%)、「親との同居」(78.9%)、「職業」(77.9%)となり、経済力、共通の趣味、親との同居など、一緒に生活していくうえで避けられそうにない項目に対し、現実的な評価をしていることがわかる。



(図 2-6 結婚相手の条件 出典：未婚社会の親子関係 有斐閣選書 1998)

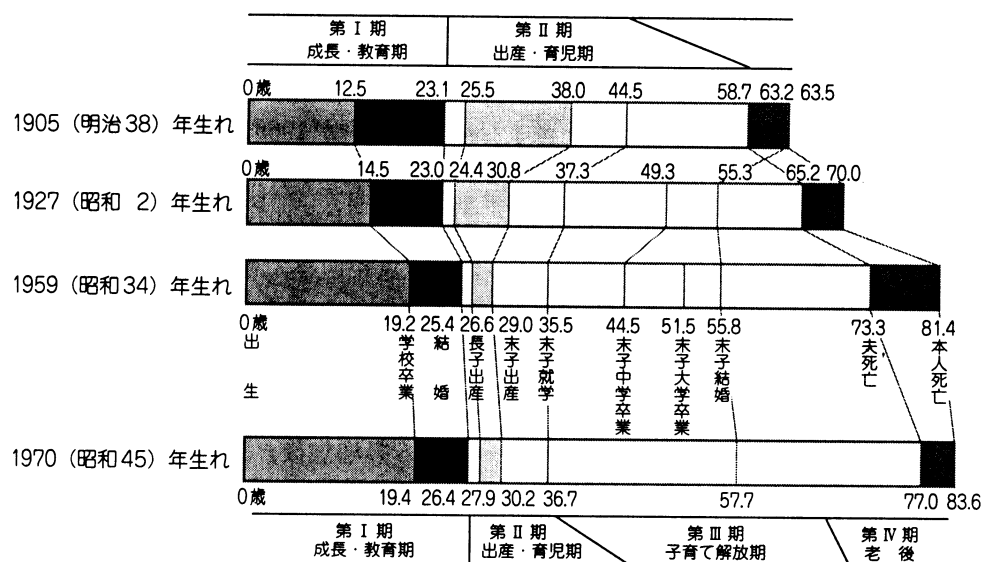
2-6 少子化を巡る結婚後の課題

2-6-1 既婚女性のライフサイクル

結婚後、女性にはどのようなライフサイクルが待ち受けているのであろうか。図 2-7 は 1905 年（明治 38 年）から 1970 年（昭和 45 年）までの変遷を、その年に誕生した女性ということで平均的なライフサイクルを描いている。

まず明治 38 年に生まれた女性は 23.1 歳で結婚し、長子を 25.5 歳で設けている。38 歳で末子を産み、44.5 歳で末子が就学することになる。58.7 歳で夫と死別する。末子が結婚するのが 63.2 歳で、その数ヶ月後には本人の寿命も尽きる。女性の平均寿命が 63.5 歳の時代である。

一方、昭和 45 年生まれ的女性では、結婚が 26.4 歳で既に明治と比べ 3.3 歳の差が生じている。長子の出産は 27.9 歳で、末子を産みあげるのは 30.2 歳となり、明治期と比べ実に 7.8 歳の開きがある。末子の結婚は 57.7 歳、夫の死亡は 77 歳で、その後本人が死亡するまで 6.6 年ある。明治期と比べて顕著な点は、



(注) このモデルの出生年は、1928年、1950年、1984年、1996年の平均初婚年齢から逆算して設定した。学校卒業時は初婚年齢の人が実際に進学する年の進学率をもちいた。他のライフステージは婚姻時における平均値。

(図 2-7 既婚女性のライフサイクルの変遷 出典：女性のデータブック 1999)

平均寿命がおよそ 20 年近く延びたのに、末子を生みあげる年齢は逆に 8 年近く早まっている。その結果、末子が就学してから死ぬまで明治期では 19 年しかなかったのに、昭和のケースでは 47 年間となりおよそ 2.5 倍増えている。明治期より時代が進むにつれ、子供の手が離れ女性が主体的に生きられる時間が格段に増加している。

2-6-2 子供は持たたいが.....

結婚後、子供を持つか否かは、その後の女性の仕事、家庭状況によって左右されている。男女の役割変化が進んだとはいえ、女性は男性に経済力を求め、男性は女性に家事、まかないを任せるという考え方が年々低くなっているが、依然根強いことも確かだ。しかも、結婚後も共働きが一般化している現在では、女性の負担が増すばかりである。そのため子供を持つことに躊躇する女性も少なくない。

厚生労働省社会保障審議会人口部会で次のような議論がされている。お茶の水女子大学の永瀬伸子助教授によると、『30 代女性はだれひとりとして働きながら子育てできるとは思っていない。労働では長時間拘束され、子供を預ける

保育園は不足気味』、また上智大学の山崎泰彦教授は『社会保障の危機というよりも、結婚や子育てに夢を持てない社会になっていることが大きな問題だ』としている。さらに、東京学芸大学の山田昌弘助教授は『中高年のリストラが問題になり、若年層の失業率も高い。このため将来に明るい夢を持てないということも大きな問題である』などである。

2-6-3 母子家庭の実態

前述のシングルマザーは聞こえはよいが、現実の状況は必ずしも明るくない。厚生労働省の「母子家庭等実態調査」(1998 年調査)によると、母子世帯数は 95 万 4,000 世帯に達し、このうち離婚が 65 万 3,600 世帯、未婚の母子世帯は 6 万 9,300 世帯となって、5 年前の調査と比べそれぞれ 28%、85% 増になっている。この 5 年間に未婚のシングルマザーが急上昇していることがわかる。

また平均年収は 229 万円で、5 年前の調査より 14 万円ほど増加している。就労に関する調査では、85% が職に就いているが、その内、常勤は 38% で 5 年前の調査よりは微増している。依然として不安定な就労形態だといえる。養育費については 20.8% が受けているのに対し、依然 60% 以上が受けていないと答えている。居住形態では、持ち家の比率が 26.0% と低い。

離婚の増加と未婚の母の増加で、母子家庭は増加する傾向にある。現在の経済状況を反映して、就労形態および収入面で厳しさがうかがえる。

2-6-4 夫婦別姓

結婚しても夫婦がそれぞれ別な姓を持つことができるかどうか、いわゆる夫婦別姓に関心が寄せられている。問題は別姓夫婦が子供を持ったときに、いつの時点で子供の姓を決めるかである。現在議論されているのは、原則は婚姻時だが最初の子供が生まれたときでも変更ができるかどうかである。

法制審議会総会は 1996 年 2 月 26 日総会で決定し法務大臣に答申した。選択的夫婦別姓を導入した主な改正案は、

- a 婚姻時に同姓か別姓か選択
- b 子供の姓も婚姻時に決定
- c 子どもは全員一方の親の姓に統一

一方、離婚は、

- a 裁判上の離婚原因に五年以上別居を加える

- b 離婚が配偶者や子に耐え難い苦痛をもたらす時、あるいは離婚請求が信義に反する時、ないしは裁判所は離婚請求を棄却できる
 - c 現行離婚原因の精神病規定を削除
- この他に以下の項目も付け加えている
- a 婚姻最低年齢を男女とも 18 歳とする
 - b 女性の再婚禁止期間を現行 6 カ月から 100 日に短縮
 - c 相続の非嫡出子差別廃止
- などである。

2001 年 8 月に発表された内閣府の世論調査によると、夫婦別姓を容認する法改正に対して賛成する意見が 42.1%、反対が 29.9%になっている。5 年前の調査と反転している。

「改姓は自分の個性を失う、人格権を損ねる」、「仕事を続けるうえで不利」などの理由でフェミニストやキャリアウーマンから法改正に賛成する支持が強い。一方反対派は、長男長女が結婚する傾向が高まる中「改姓によって家名が絶えてしまう」、「別姓は家族共同体を崩壊させる」としている。とりわけ争点になっているのが、子供の姓をどうするかである。これについては戸籍法の改正によって旧姓使用を公的に承認すればよいかとする意見も出されている。

現在、夫婦別姓をめぐる各党派で議論が重ねられ、また各種任意団体からさまざまな意見が出されている。

第3章 次世代は結婚をどう見るか

3-1 次世代の定義

本章においては、結婚予備軍としての若者の結婚に関する意識および結婚後のライフスタイルイメージについて探っていきたい。

前章のデータからも顕著になってきているパラサイトシングル現象、晩婚化により、結婚予備軍の年齢層の幅は広がってきている。かつては、結婚適齢期 25 歳を意味した言葉として「クリスマスケーキ」と称していたが、最近は「除夜の鐘」「年越しそば」(31 歳をこえるを意味する)とも言われている。

現在結婚予備軍については、おそらくヤングアダルト(学校教育終了後から 30 歳なかばまでの若い成人)と呼ばれる層全体が対象となりつつあるが、本章で述べる「次世代」については、団塊ジュニア世代以降の未婚者、つまり 1977 年以降に生まれたポケベル、携帯電話世代で未婚の成人を指すこととする。

3-2 次世代が考える結婚観

次世代の結婚観については、「第 11 回出生動向基本調査」(国立社会保障・人口問題研究所 1997 年)を基礎データとし、次世代層 10 名のヒアリング調査(20 歳から 24 歳までの未婚の男女 有効サンプル数 10 名)の中からいくつかの特徴を抽出しながら概観していききたい。個々のヒアリング調査結果は 3-5 に詳細に記してある。

3-2-1 結婚への意欲

<次世代が意欲のピーク>

次世代(出生動向調査においては 20-24 歳の年齢階級)の生涯の結婚意思については、男子 86.7%、女子 90.7%がいずれ結婚するつもりと考えており、年齢階級別では男女とも一番高いポイントとなっている(全体では男子 85.9%、女子 89.1%)。逆に一番ポイントの低い世代は、男子が 30-34 歳、女子が 25-29 歳と世代がずれている(図 3-1)。

このことは希望する結婚年齢とも関係している。希望する結婚年齢は全体で男子 28.8 歳、女子 26.9 歳、次世代では男子 27.5 歳、女子 25.8 歳を希望するものが一番高い(図 3-2)。その年齢をすぎると結婚意欲も低下する傾向にある。

<女性の 30 代以降の意欲増>

しかし、特徴的なことは、女子が 25-29 歳で結婚意思が落ち込むが、30-34 歳で結婚意思が上昇していることである。結婚意思をもったまま 30 歳を越えてしまった層が増えたと考えられるが、同時に、20 代は一人で好きなように生きて、30 代に突入してから結婚を考える生き方を選択している傾向にも感じられる。

ヒアリングにおいても、女性は当面独身をエンジョイしたい、バリバリ仕事をしたいと考えている傾向が強く、希望する結婚年齢と、現実的な結婚年齢とのギャップが感じられる。

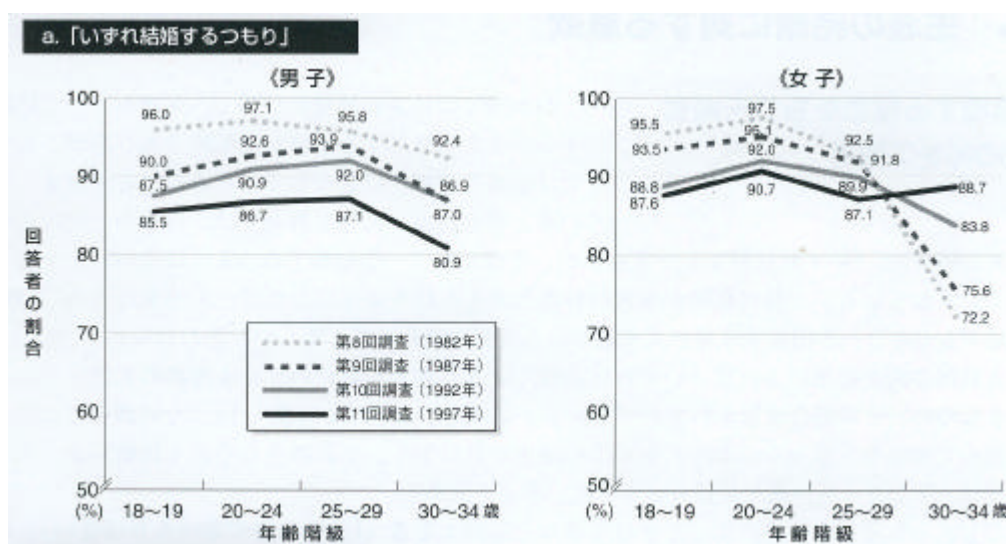


図 3-1 各回調査による年齢別にみた未婚者の生涯の結婚意思

(出典：「独身青年層の結婚観と子ども観」国立社会保障・人口問題研究所 1997 年)

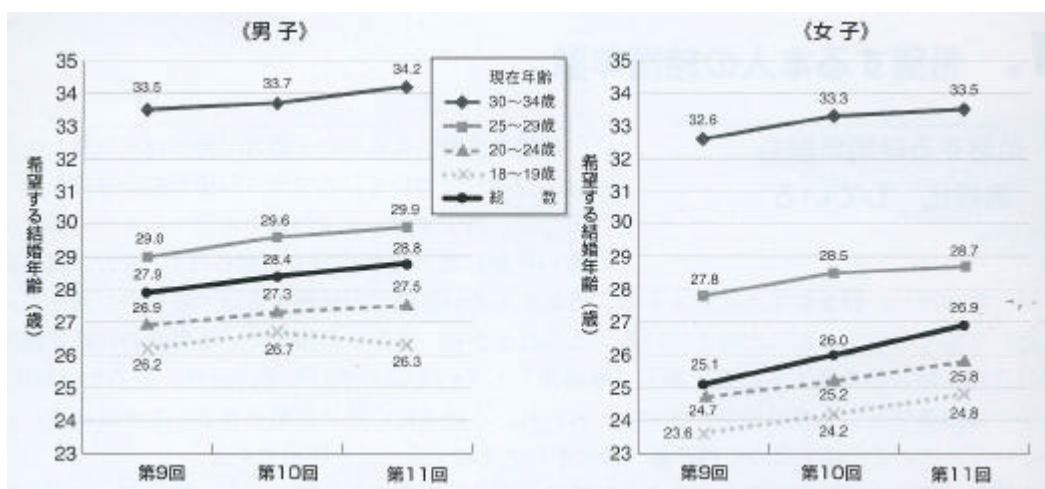


図 3-2 希望する結婚年齢

(出典：「独身青年層の結婚観と子ども観」国立社会保障・人口問題研究所 1997 年)

3-2-2 結婚のメリット意識

<次世代における結婚イメージ形成が左右>

「結婚に利点がない」とする未婚者が、全体では男女ともに 25 歳以上で増加傾向だが、次世代層では男女ともわずかに減少している。(図 3-3)。

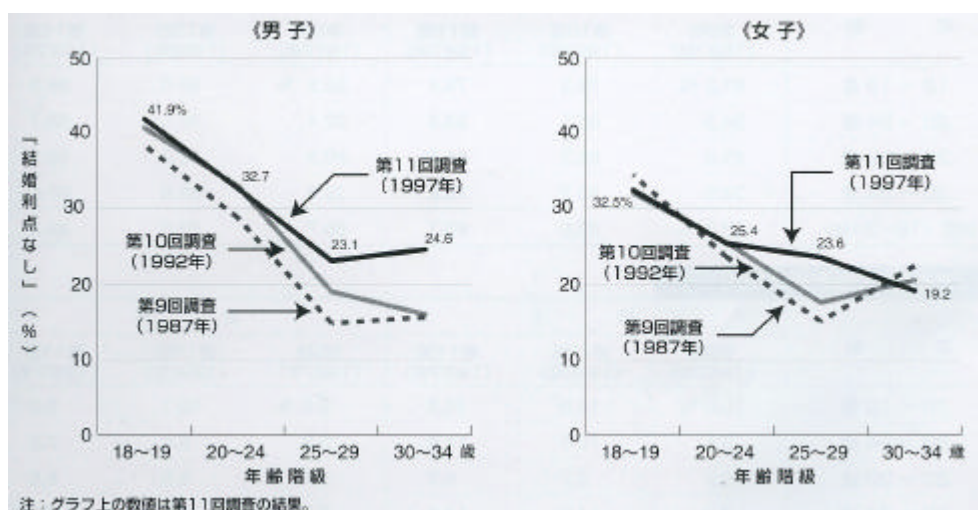


図 3-3 年齢別にみた今の自分にとって「結婚することは利点がない」と考える未婚者

(出典：「独身青年層の結婚観と子ども観」国立社会保障・人口問題研究所 1997 年)

さらに結婚の利点の有無と結婚からの意識距離の年齢変化を見ると、明らかに結婚の利点を感じているグループは結婚に近づいていることがわかる。特に次世代の年齢期間に急速に近づいている(図 3-4)。

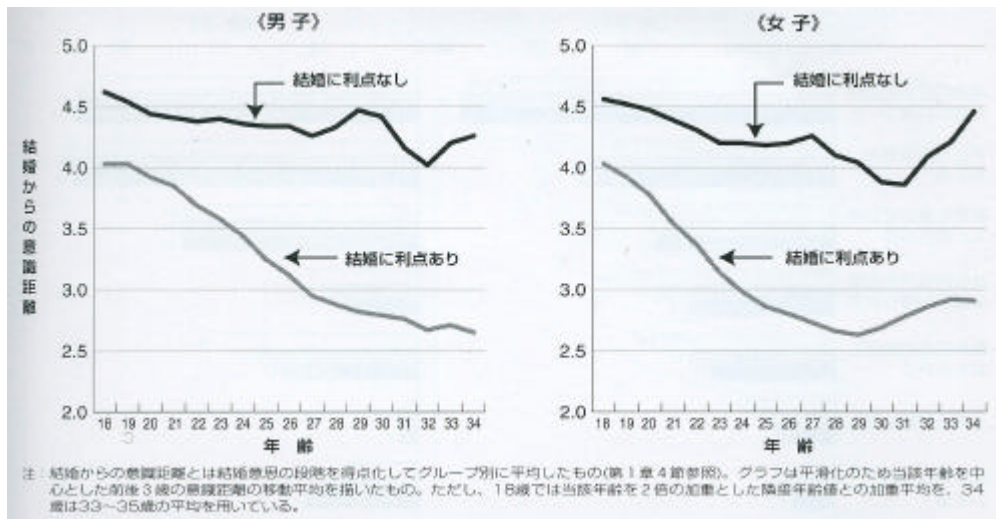


図 3-4 結婚の利点の有無別にみた未婚者の結婚からの意識距離の年齢変化

(出典：「独身青年層の結婚観と子ども観」国立社会保障・人口問題研究所 1997年)

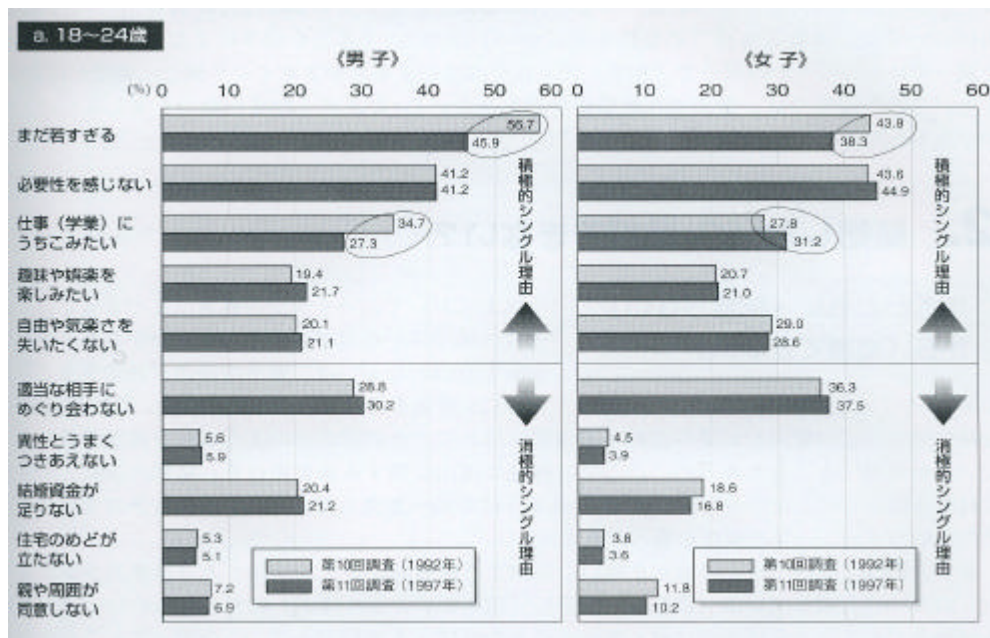


図 3-5 年齢階層別にみた独身にとどまっている理由

(出典：「独身青年層の結婚観と子ども観」国立社会保障・人口問題研究所 1997年)

逆に独身にとどまっている理由から見ると、次世代は男女とも「若すぎる」「必要性を感じない」「仕事にうちこみたい」「自由な気楽さを失いたくない」といった積極的シングル理由が多い。逆に25-26歳を境に、「適当な相手にめぐり会わない」という消極的シングル理由が圧倒的に増加する(図3-5)。

20-24歳の頃の結婚に対するイメージ形成がその後の大きな意識や行動の変化に影響することが予想される。

<求められる癒し系結婚>

結婚により得られるものに関しての上位は男女とも「精神的安らぎの場が得られる」と「子供や家族をもてる」であり、「社会的信用や対等な関係を得られる」、「親や周囲の期待に応えられる」、「生活上便利になる」は減少している。

ただ、女子に関しては「経済的に余裕がもてる」を利点とした者がやや増えている(図3-6)。

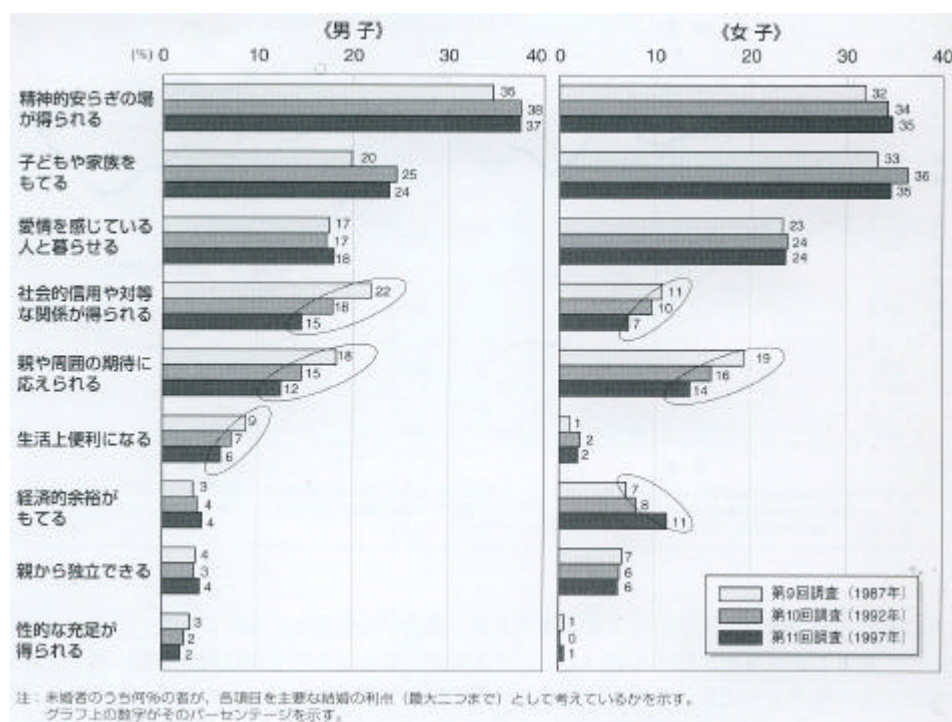


図3-6 各回調査別にみた結婚することの利点

(出典：「独身青年層の結婚観と子ども観」国立社会保障・人口問題研究所 1997年)

OLを中心としたインターネット上での以下の2つの意識調査でも同様の結果が出ている。LYCOS Girlsの結婚意識調査(2001年)では結婚したい理由の一位が「好きな人と一緒にいたいから」二位が「子供がほしいから」であり、オーエムエムジー(独身者を会員としたコミュニケーション・ネットワークサービスを提供する企業)調査(2000年)では女性が恋人に求めることとして、一位が「一緒にいると安心感を与えてくれること」二位が「自分のことを一番好きでいてくれること」三位が「自分とフィーリングがあうこと」四位が「自分を楽しませてくれること」と答えている。

結婚情報サービス協議会(<http://www.misc.gr.jp>)では、現代の女性が結婚に求めるものは「財政的に快適」「感情的に快適」「家事・育児に協力的」の「三的」とし、共に協力しながら安らかに暮らしていきたいといった「癒し系の結婚」を望んでいるとしている。

ヒアリングにおいても、「内面的支えのパートナー」は顕著であり、「一緒にいて楽しい人」「楽な人」「やさしい人」「家事や育児を喜んでやってくれる人」という結婚相手をイメージしている。

<同世代の結婚相手>

また学生時代の恋愛体験等の延長も影響しているかもしれないが、次世代においては、同世代のパートナーを希望している傾向が見られる。

年齢差で見ると、次世代が男子2.2歳、女子2.3歳とほぼ同世代を希望しているのに対して、30-34歳では男子5.7歳、女子1.5歳と大きな差がある(図3-7)。結婚形態は、圧倒的に「恋愛結婚」希望であり、次世代の男子で73%、女子が77.7%である。年齢とともに恋愛結婚願望は増えている。

年齢差から想定すると、男性は比較的20-30代の特定年齢階級に属する女性との結婚を希望する傾向が見られる。LYCOS Girlsの結婚意識調査(2001年)でも、女性の結婚適齢期に関して、男子23-26歳、女子27-29歳と答えており、同様の傾向が見られる。

現実を見ても、結婚して子どもを産んだ夫婦の年齢差は、10年前は父2歳年上が頂点であったが、平成12年度は同年齢をピークとしたカーブとなっている。

また母年上と父10歳以上年上も増加しているのも特徴である(図3-8)。

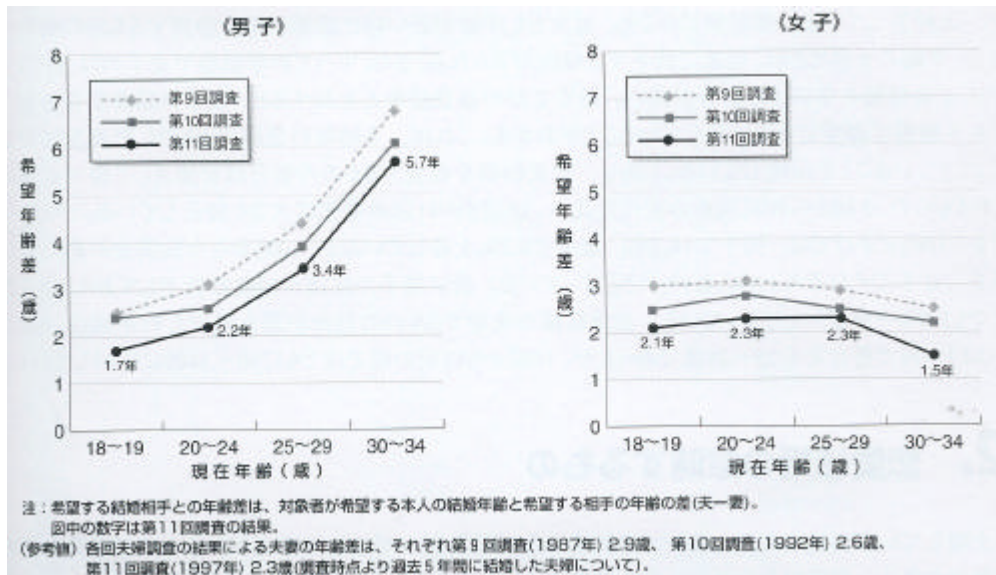


図 3-7 希望する結婚相手との年齢差

(出典：「独身青年層の結婚観と子ども観」国立社会保障・人口問題研究所 1997年)

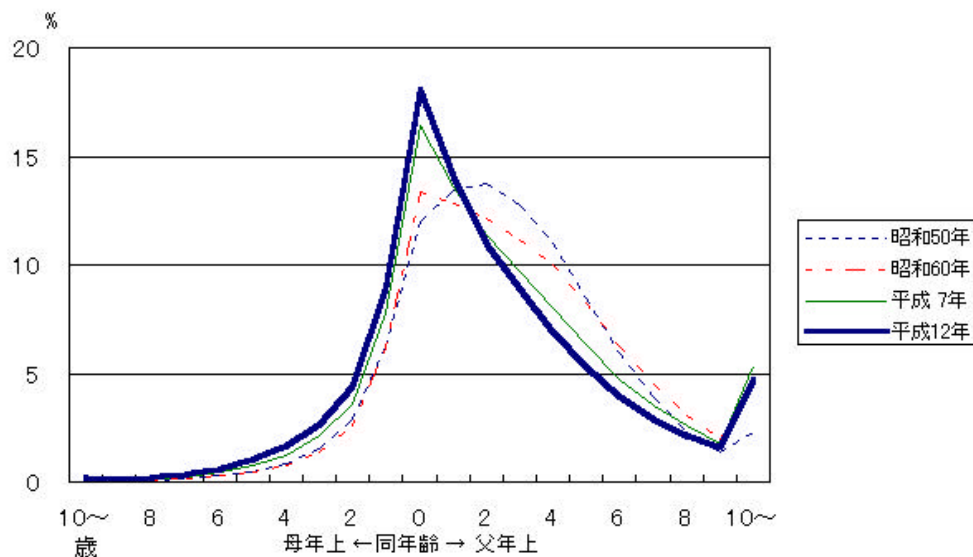


図 3-8 父母の年齢差別にみた嫡出第一子の出生構成割合 昭和50年から平成12年

(出典：「人口動態統計特殊報告・出生に関する統計」 2002年3月)

3-2-3 希望する結婚後のライフスタイル

<仕事と家庭の両立を希望する女子>

仕事と家庭の両立を理想とする未婚女子は 27.2%、再就職希望が 34.3%と結婚しても仕事を続けたい希望は大変高まっている。リクルート OL 総研の調査(1999 年)でも 8 割近くが仕事を続けたいと思っている。

逆に男子が女子に期待するのは一位が再就職の 43.4%で、二位が専業主婦の 20.7%、三位が両立の 17.0%となっている。これは女子の予定とほぼ一致しており、現実的なライフイメージはお互い近いものと考えられる。

また、女子が働き続けるために必要なこととして、一位が「夫の協力」、二位が「仕事上の実力」、三位が「体力」、四位が「要領のよさ」、五位が「スキル・資格」としている(図 3-9)。

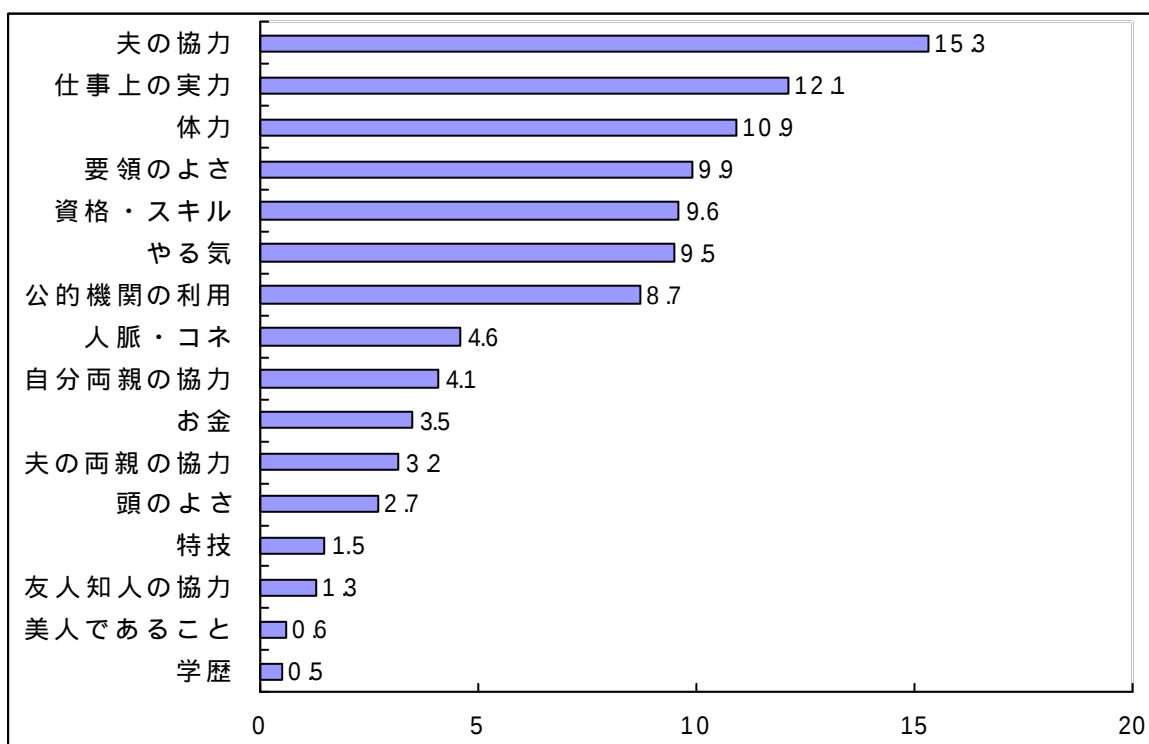


図 3-9 女性が結婚しても子どもができて働き続けられる条件

(出典:「OLの結婚白書」リクルート OL 総研 1999 年)

<常に一緒>

次世代のヒアリングで特徴的なことは、いつも一緒にいたいということである。買い物、料理、食事、映画、スポーツ観戦、旅行等はもちろんだが、何もしていない時間もなんとなくそばにいるという行動をとりたいとしている。つまり現在の恋人関係そのままを結婚生活にまで連続してイメージしている。

また、恋人相手の男性が、料理好きで、買い物、準備、片づけまで喜んでやってくれるタイプが多い。

いごちのいい、シンプルでセンスのいい空間を好み、インテリアや小物に興味があり、二人でよく雑貨、リビング関連ショップへ出かけている。

また、前章で述べたように未婚者の性交渉経験率は全体として増え続けており、次世代の男子が 60.0%、女子が 52.0%で男女とも未婚の半数以上が性交渉経験者である。ヒアリング対象者の半数は、一緒にいる時間としてセックスライフもスタイルの一部として位置づけられているようである。

さらに、ヒアリングでは、お墓についても「一緒」論が出た。気にいったパートナーとはあの世までもいっしょでいたい。日本の家系制度等は全く気にもせず、何らかの方法で自分たちの最終地であるお墓のスタイルと場を探したいとのことである。

<夫婦だけの生活を楽しんでから出産>

次世代における希望出産時期は、49.9%が「しばらくしてから」とし、約半数がじっくり派となっている(図 3-10)。一定時間は二人だけで一緒にいる時間を重視し、自分のやりたいことを結婚で犠牲にしたくはないと考えている。

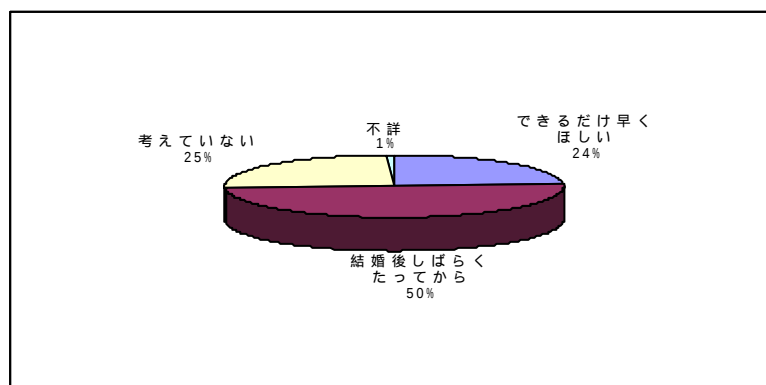


図 3-10 20-24 歳の独身女性の希望出産時期について

(出典：「独身青年層の結婚観と子ども観」国立社会保障・人口問題研究所 1997 年)

ヒアリングでは、「結婚しても若々しいカップルでいたい」し、「自分のやりたいことをやってから子供のことは考える」としている。また当面は「子供より、ペットがほしい」としており、結婚=出産・育児という公式は過去のものとなっている。

<第一子の生まれるまでの平均結婚期間の長期化>

実際、「人口動態統計特殊報告の出生に関する統計(2002年3月)」では、昭和50年から平成12年度の第一子が生まれるまでの平均結婚期間を比べて見ると、約4ヶ月長くなっており、第2子、第3子についてもそれぞれ約5ヶ月、約2ヶ月長くなっている。ここ10年の間で、子どもをもたない夫婦だけの時間は増えているのは事実である。

逆に第4子以上の平均結婚期間は、約8ヶ月短くなっている(図3-11)。

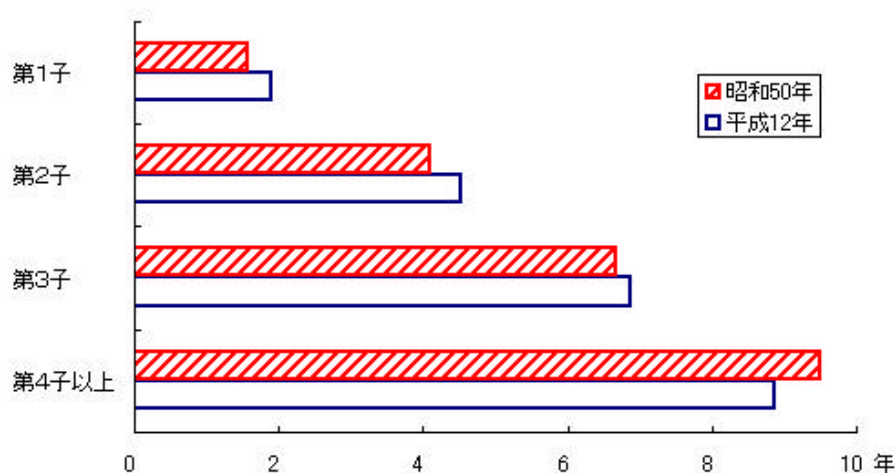


図3-11 出生順位別にみた平均結婚期間 昭和50年から平成12年

(出典:「人口動態統計特殊報告・出生に関する統計」 2002年3月)

しかし一方で、2-3-1で触れた「できちゃった婚」も増加しているのが事実である。結婚期間が妊娠期間より短いケースを結婚前に妊娠していた「できちゃった婚」としてしてみると、嫡出第一子に占める割合は、全体の26.3%で4人に一人が「できちゃった婚」の子どもである。また母親の年齢別に見ると、15～

19 歳で 8 割、20～24 歳で 6 割、25～29 歳で 2 割、30 歳以降で 1 割となっており、年齢層が若くなるほど多くなっている(表 3-1)。

表 3-1 母の年齢階級別にみた結婚期間が妊娠期間より短い出生数と第一子に占める割合 昭和 50 年から平成 12 年
(「人口動態統計特殊報告・出生に関する統計」 2002 年 3 月)

	結婚期間が妊娠期間より短い出生数(千人)						嫡出第1子に占める割合(%)					
	総数	15-19歳	20-24	25-29	30-34	35歳-	総数	15-19歳	20-24	25-29	30-34	35歳-
昭和55年	83	6	45	26	5	1	12.6	47.4	20.1	7.8	7.1	6.6
60	103	9	56	30	6	2	17.3	61.5	31.2	9.8	8.3	8.8
平成2	109	10	57	33	8	2	21.0	67.0	41.5	12.4	9.3	9.4
7	125	10	65	38	10	3	22.5	73.9	47.0	14.2	9.2	10.0
8	125	9	63	40	10	3	22.2	74.6	47.3	14.5	8.9	9.6
9	126	10	62	41	11	3	22.6	77.0	48.7	15.0	9.1	9.2
10	136	11	65	45	12	3	23.9	78.3	52.3	16.6	9.3	9.7
11	141	11	65	48	14	3	25.0	79.8	55.1	17.9	10.2	10.1
12	150	12	67	52	15	4	26.3	81.7	58.3	19.6	10.9	10.3

<日常重視で儉約生活>

次世代の女子については、食事やティータイム、リビングまわりやベランダの菜園、睡眠や読書空間へのこだわりなど、毎日のちょっとした生活シーンにおいても自分なりの楽しみ方をしようとする志向が強い。

特別な日やモノに対して大きな背伸びをするのではなく、日常の中で自分の手の届くところから自分なりの充実感をみつけようとする。

こうした世代はコストに対する意識が意外と繊細で、対効果のメリハリをつけた堅実な、厳しい選択眼をもっている。

情報源は、雑誌であり、その中で提案されるライフスタイルや商品を自分感覚で消化しようとする。

同時に家計の財布もごちゃまぜではなく、それぞれの個人の財布と共同の旅行や生活のための財布の区分を半数以上がイメージしている。

<共立夫婦の予備軍>

ハイレイフ研究所から 2001 年に「共立(ともだち)夫婦」が出版されたが、上記行動様式とほぼ共通した 90 年代から登場した子供のいない共働き DINKS 世帯

の夫婦をそう呼んでいる。

子供がいるいないは別にして、共立夫婦の予備軍としての次世代はすでに自然に形成されており、おそらく、雑誌やテレビ、インターネットといった多メディアと接する機会の多い次世代は、そうした情報源から共立夫婦的なライフスタイルを敏感にとらえ、自分スタイルの選択肢のひとつとして結婚観の形成に影響しているものと考えられる。

【コラム】

「スウェーデンにおけるパートナー形態」

今後の日本における結婚観の変化を捉える際に、ライフスタイルの中立性という理念を基本としたスウェーデンの家族政策の変遷は、「人権」という視点においての前向きな取り組み事例として参考となる。

スウェーデンにおけるパートナー形態の多様化のきっかけとなったのは、1960年代はじめの専業主婦論争である。労働・家庭・社会すべてにおいて男女平等をうたい、女性開放運動や学生運動が盛んな中、同棲カップルが増加。その後、そのカップルから生まれた婚外子の権利が問題となったが、1976年の親子法の改正により、嫡出子と同等の権利が与えられる。

スウェーデンでは、法律的に結婚していない男女の同居形態をサンボと称するが、1970年代から1980年代に一般化する。

さらに1987年には新婚姻法、サンボ法が成立し、サンボは社会的に承認されたものとなる。同時にサンボは同性カップルにも適用される。

こうした多様化するライフスタイルに対しての法的な社会的承認が、子供の結婚観にも大きく影響している。子供の頃から自立した個人を徹底的にしつけられるため、男子は平均20.2歳、女子は平均18.8歳で親元から独立する。その後、恋人と一緒に暮らし始めるケースがほとんどである。こうしてサンボ期間を経たあとお互いをよく確かめてから結婚に踏み切るのが一般的である。結果、初婚年齢は高く、男子が32.2歳、女子で29.6歳である(1997年)。

またサンボの一般化により婚外子の割合も増加し、婚外子出生率は1997年で53.6%に達している。そして、仕事と家事・育児の従来の性別役割分業の考え方を否定し、制度的にも性別にかかわらず平等な保障制度を確立していった。

しかし実際の家事労働においては、まだ完全な平等性は確保されていないのが現実ではある。

家族施策の重要なひとつにセクシャリティへの取り組みがあげられる。親や教育者から子供へは、性行為の真の純潔性(愛が伴うべき)と避妊の知識を積極的に与えている。フリーセックスは日本のような性の娯楽化・商品化を意味しない。

(参考出展:「結婚とパートナー関係」善積京子編 ミネルヴァ書房)

3-3 次世代と親の関係---「母性軸」の拡大

次世代の結婚観を考える際に、本人たちの育った環境、つまり親との関係性が重要な結婚観形成の要因となっていると考えられる。

特徴的な形態が「M&D(マザー&ドーター)」と「パラサイトパパ・ママ」の登場である。どちらのケースでも母親を中心とした行動様式がライフスタイルに大きく影響しているケースである。

3-3-1 マザー&ドーター市場の登場

2-4-1 で分析したパラサイトシングルの登場と平行して、結婚後も母と娘が一緒に行動する実体が注目される。少子化で一粒種の長女が嫁いでも娘の感覚が抜けきれないでいる。電通のトレンドボックスのモニター調査で、(参照 URL: トレンディボックス <http://www.dentsu.co.jp/trendbox/>) 59.7%が「母と娘で買い物や旅行に行く」とし、その頻度は「よく行く」が 27.3%、「たまに行く」が 44.7%と、日常的風景であることがわかる(図 3-12)。

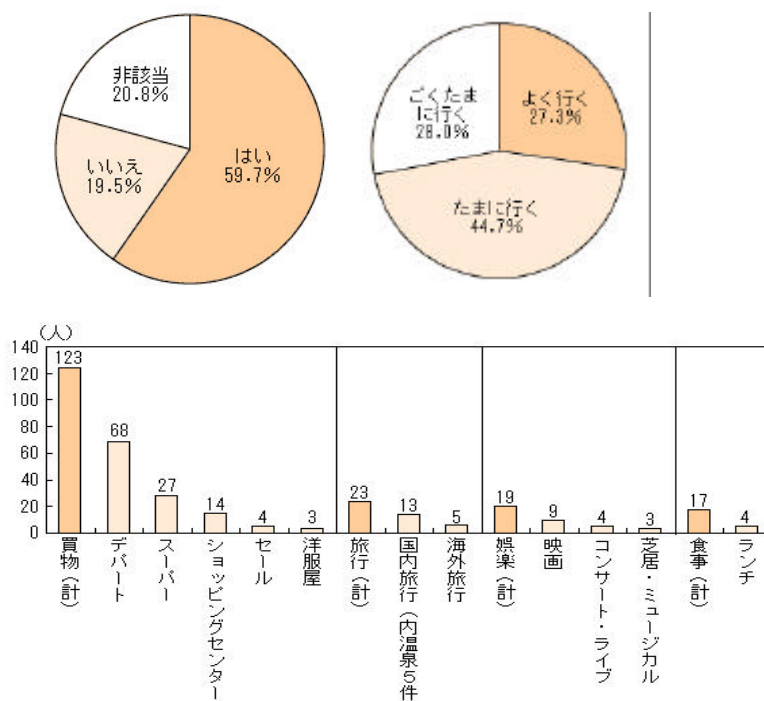


図 3-12 母と娘ででかける頻度と場所

(出典:「生活トレンドボックス」電通 2002 年)

出かける場所としては、デパートへの買い物、温泉などの旅行、映画やコンサート等の娯楽、食事であり、若いカップルと同様の仲よし同士の行動形態である。

母と娘で出かける魅力については第一位が「気楽、気兼ねがいない」、第二位が「買ってもらえる、おごってもらえる」、第三位が「アドバイスがもらえる・できる」、第四位が「話しができる」、第五位が「好みが似ている・わかっている」であり、友達以上の友達関係である。

こうした母親と娘の消費行動は、親と比較的近接住居もしくは同居しているファミリーが中心となるが、育児においても、子供を親に預けて娘夫婦がでかけたり、母と娘が共有して利用する洋服やバッグを購入するなど、今時の効率的な親子関係でもある。

このようなマザー&ドーター市場の登場は、現代の結婚後のライフスタイルの特徴でもあるが、離家の遅れ、経済的自立意識の遅れ等の要因でもある。

また、母娘の消費行動が、父親の意見とその判断が中心の父系軸から、母親の判断が中心となる母系軸の強いファミリー行動への変化を特徴づけていると考えられる。

3-3-2 パラサイトパパ・ママの登場

パラサイトシングルという存在とともに、晩婚化や未婚化の増加が指摘されてから、約 5 年が経過するが、パラサイトシングルを経験したあと結婚をして親となり、その子供達が就学しているファミリーも増えてきた。

公文こども研究所では、パラサイトシングルを経過して結婚した親と、パラサイトシングルを経験せずに結婚した一般的な親の価値観の違いについて、2000 年 3 月に調査を行っている。

(参照 URL: 公文こども研究所 <http://www.kumon.ne.jp/>)

調査では、25 歳以上で結婚し、それまで親と同居していた父親と母親を「パラサイトパパ・ママ」と称している。

「パラサイトパパ・ママ」は全体の 4 割で平均年齢では男子 46.2 歳、女子 44.4 歳である。調査結果では、パラサイトパパ・ママについて以下のような特徴をあげている。

(1) 長男が多く、高学歴のママ

パラサイトパパは62.8%が長男であり(一般は58%)、現在も親と同居している割合が20.7%である(一般は10.8%)。また、パラサイトママは四年制大学卒が41.3%(一般は29.9%)で、高学歴が多い。

(2) 子供への期待が薄いパパ

子供の将来の職業や身につけてほしい力や気持ちに対しての質問反応が一般の父親よりも期待感が薄い傾向にある。忍耐力については34%(一般は39.7%)、向上心は32.6%(一般は37.6%)、専門を生かした仕事についてほしいは35.1%(一般は36.0%)、子供の好きな仕事ならなんでもよいが47.0%(一般は49.3%)である。

(3) 「個」を大事にした生き方を期待するママ

身につけてほしい力や気持ちは根性や社交性よりも自尊心が23.8%(一般は19.8%)で期待する割合が際だっている。専門性を生かした仕事についてほしいが50.9%(一般は47.9%)、生き方では「楽しく人生を過ごしてほしい」が69.9%(一般は66.9%)でトップにあげている。

(4) 口うるさいパパと教育熱心でやさしいママ

パラサイトパパ・ママの子供が評価する親像として、パパに対しては口うるさく多少冷やかで、母親には教育熱心でやさしさを感じている。子供と接する時間が長い親と子供への関心度の高い母親像が、ここでも母系軸の強さをイメージづけている。

3 - 4 次世代の求める社会サービス

さて、次世代の結婚観、またその親という環境を探ってみたが、次世代やその親の特徴的な考え方、行動が今後の社会において、どのような消費やサービスを発生させるかいくつかアイデアを並べてみる。

(1) トータルなライフスタイルコーディネート業

結婚、出産、育児、インテリア、生活雑貨、キャリアアップ、ペット、健康、福祉、墓場、葬式、永代供養等、それぞれのステージに合わせた、情報サポート、ショップ、コンサルタント。

(2) 共立夫婦向け商品やサービス

旅行商品、生活用品、ライフスタイル雑誌、共立夫婦保険、老後や死後のサポートサービス、二人の財布や資産を預かる銀行、金融サービス等。
また、そうしたトレンドを集めたポータルサイトやテレビ番組の登場。

(3) M&D(マザー&ドーター)向けの商品やサービス

旅行商品、生活用品、ファッション、ライフスタイル雑誌、通販サービス、食材サービス等。親子の共有するブランドの登場等。

(4) 三世代消費向け商品やサービス

パラサイトパパ・ママの登場により、自分の両親への依存度が高いまま結婚し、子供を産むと、一世帯から三世代分の消費ニーズが生まれる。
M&D 消費や孫向け消費等のようにおねだり、ちゃっかり消費も増えるため、ファッションや育児、旅行や食事も三世代対応商品へ。
また、子供と両親を連れてショッピングと食事とちょっとした遊び(子供)が可能なワンストップ消費型のショップ集積。

(5) コンビニ機能の拡大

既に周到なマーケティングにより様々なライフスタイルに対応した生活支援サービス機能が拡大しているが、今後、ネットワークを利用した注文やご用聞きサービス等により、周辺世帯の構成ニーズがダイレクトに取り扱い商品アイテムとなる。
共立夫婦世帯の多い住宅地や駅前でのよりフィット感の高いマーチャンダイジング等。

(6) 実家のリニューアル

パラサイトシングルの増加や母娘市場の増加に伴い、実家を出るのではなく、実家を活用する方向へ。新規に住宅を購入するよりは、1.5 世帯的な住空間をリニューアル。また 1.5 世帯向け家電や食品の登場等。

(7)行政サービス

様々なライフスタイルに対応した生活施策の充実と夫婦別姓や婚外子等に関する法律改定等の必要性。

3-5 次世代の結婚観に関するヒアリング調査

3-5-1 調査概要

(1) ヒアリング期間

2002 年 1 月 21 日(月)～2002 年 1 月 25 日(金)

(2) ヒアリング対象者

20 歳から 24 歳までの未婚の男女 有効サンプル数 10 名

(3) ヒアリング方法

東京都渋谷区における街頭調査

(4) ヒアリング内容

- ・ 年齢
- ・ 性別
- ・ 職業
- ・ いつ頃結婚したいですか。
- ・ 結婚したい理由またはしたくない理由を教えてください。
- ・ 結婚したい場合はその条件を教えてください。
- ・ 子どもはほしいですか。
- ・ 子どもはいつ頃ほしいですか。
- ・ 現在、恋人はいますか。
- ・ 結婚しても仕事は続けたいですか(女性)。
- ・ 結婚後も妻が仕事を続けたいとしたらどう思いますか(男性)。
- ・ どのような結婚生活を望みますか。
- ・ 晩婚化や少子化の社会現象についてどう思いますか。
- ・ 性交渉経験はありますか。
- ・ 「できちゃった婚」についてどう思いますか。
- ・ その他結婚観に関してのご意見

3-5-2 ヒアリング記録

(1)対象者 A

- 年齢 21 歳
- 性別 男
- 職業 学生(4 年生大学、理学部)
- 恋人 いる
- 結婚希望時期

まだよくわからない。

でも、30 歳くらいまでは結婚したいと今は思っている。

- 結婚したい理由

たぶん、好きになった人と生活したいのが一番かな。

そのときにならないとわからないが、タイミングというものもあると思うけど。

- 結婚の条件

いやー、好きになったら条件もくそもないと思うけど。

見合いなら別だけど、好きで結婚するのであれば、逆に結婚の壁が「何か」の方が重要ではないですか。

(想定される結婚の壁として何かイメージありますか)

たとえば、家柄とか、仕事とか。

自分は、どっちかというとな彼女の母親が気になる

(細々とうるさい)。

- こどもの希望数

生まれたぶんだけ。

- 子どもの希望時期。

なりゆき。でも、若いうちに産んでほしい。年とってからは大変だと言われるので。

- 結婚後の仕事

妻も働くべき。

子どもが生まれたら、育児もあると思うが、基本的には専業主婦にはなってもらいたくない。

- 結婚後のライフスタイル

音楽活動は続けたいので、彼女もいっしょに音楽仲間でありたい。

自分は子育ても、料理づくりも好きなので、どっちが働いてもかまわない。適当にそのときそのときで分担協力していければいい。

ようは、何かいっしょにやれる目的がないとだめだろうな。

好きなだけじゃ続かないと思う。

結婚しているということだけで、しばられたくはない。彼女もそうだと思う。

- 晩婚化、少子化について

それぞれでいいんじゃないの。

子どもはできれば、産んで育てるべきじゃないの。こんなにじいさんばあさんばかりじゃ確かに困る。

ただ、子育てしやすい世の中にしてほしい。

(たとえば)

お受験とか、いじめとか、就職難とかは大変じゃないですか。

自分だけでは解決できないじゃないですか。

たくさん子どもが生まれたら、それはそれで至難だ。

- 性交渉経験

ありますよ。毎日やってますよ(笑い)。

- 「できちゃった婚」についてどう思いますか。

「まずいいんじゃないの」だが、現実しょうがない。

友人は、産ませて結婚した。

おれはまだセーフ？

- その他ご意見

結婚なんて正直まだ真剣に考えていない。

つきあってある時期がくれば、自然にそうなる(結婚)のではないですか。

無理はあかんと思う。無理に結婚する理由はあまりない。

(2)対象者 B

- 年齢 23 歳
- 性別 男
- 職業 会社員(建築設計会社)
- 恋人 いる
- 結婚希望時期
2-3 年したら(25-26 歳)。
遅くても 5 年以内(28 歳)
- 結婚したい理由
好きな人といっしょに生活したいから。
新しい充実感があると思っている。
(具体的には)
今は自分のことでせいいっぱいだか、二人なら何かもっと大きなことがやれそう。
- 結婚の条件
料理をつくってくれることと、子どもを産んでくれること。
自分一人ではできないが、子どもはほしい。
(子どもができなかったら)
結婚しても子どもができないのなら、それはそれであきらめもあるが、子どもを産む気もない人とは結婚しない。
- こどもの希望数
2 人くらい。
- 子どもの希望時期。
結婚してから 3-5 年程度の間に。
すぐにはいない。
妻になる人とだけの時間もほしい(先輩からよくそう言わる)。
- 結婚後の仕事
妻の希望があれば仕事を続けてもらってもかまわない。
でも、子どもが生まれたら、育児に専念してほしい。
(育児後は)
時期にもよるが、就学したら、再復帰してもらってもよいと

思う。ただ今のようなハードな仕事環境(徹夜、不規則)はできれば変えてほしい。

- 結婚後のライフスタイル

一人前になったら、独立して自分の建築事務所をもちたい。
妻にもデザインの仕事をいっしょにやってもらえればベスト。
古民家を再生した、庭のある戸建住宅に興味がある。
母親は病死して父親が実家(高知県)にいる。できれば、父親といっしょに建築事務所をやりたいと思っている。
なので、いずれは実家にもどって開業したいと思っている。
父親含めて3人+子どもの生活を望んでいる。

- 晩婚化、少子化について

あまり意識したことはない。
何か理由があってそうなっているのでしょうか、とめようもないのではないですか。
ただ、少子化は未来に対してあまり好ましいとは思わない。
人類の種が維持できないということですよね。
自分は最低限2人くらいは育てたいと思う。

- 性交渉経験

はずかしいですが、まだありません。

- 「できちゃった婚」についてどう思いますか。

結果はどうしようもない。
結婚して幸せなら何も言うことはないが、現実はきびしいのではないですか。
ただ、子どもが被害にあわないように、それぞれの責任が重要でしょうね。

- その他ご意見

結婚を考えると、長男なのでどうしても実家(父親)のことを考えてしまう。

(3)対象者 C

- 年齢 24 歳
- 性別 女
- 職業 会社員(デパート)
- 恋人 いる
- 結婚希望時期
すぐにでも
- 結婚したい理由
正直、あせっている。
もちろん恋人との甘い生活にあこがれるが。
現実はそうあまくない。
(結婚したいのにできない理由があるということですか)
彼氏がいるのに、結婚はまだと言っている。
仕事やご両親のことなど、すっきり整理できていない。
- 結婚の条件
自分をずっと愛し続けてくれることかしら。
細かいこと言わないで、ドーンと構えている人。楽な人。
本格的な浮気は絶対バツ。
(本格的でない浮気ってどの程度ですか)
エッチしてなければ許す。
あとは、仕事きっちりやれる人(職が安定している人)。
- こどもの希望数
2-3 人くらい。
- 子どもの希望時期
早く産まなきゃ。
双子がほしい。かわいいし、一度で済むから。
- 結婚後の仕事
パートぐらいはやっていくつもり。
専業主婦は、ちょっと感覚にぶりそうなので。
(感覚とは具体的に)
友達できなさそうだし。時代に遅れそう。

- 結婚後のライフスタイル

当面は、自分たちの家族だけで首都圏内暮らし。

できれば、カナダあたりに移住してみたい。

(外資系の彼氏ですか)

そうではないですが、海外勤務もあるメーカーです。

日本でのせこせこした生活ではなくて、もっとゆったりとした時間と生活の空間がほしい。

彼氏の仕事とは別に自分も何か職につきたいが、キャリアウーマンになる気はないし、できない。

今、お店の仕事をしているが、何か自宅でもやれるクラフト系の技術を身につけたい。子育てと趣味と仕事がいっしょにやれたらいいな。

雑誌を見ていると海外で暮らしている夫婦には、そういう生活スタイルの人が多いじゃないですか。

- 晩婚化、少子化について

うーん。私達ががんばらないとね。

- 性交渉経験

きゃー。

秘密ですけど、あります。

- 「できちゃった婚」についてどう思いますか。

チャンスよ。

避妊ミスか、わざとよ。

自分の好きな人とだったら、絶対結婚する。親がなんと言おうと。

(そうでない人との子なら)

ありえない。

あったとしたら、間に合えば処置します。みんな不幸だから。

- その他ご意見

女性同士って結婚の話を結構すると思うけど、男の人達ってあまりしないでしょ。

もっと真剣に考えてほしいわ。

(4)対象者 D

- 年齢 20 歳
- 性別 女
- 職業 学生(4 年生大学 文学部)
- 恋人 いる
- 結婚希望時期
25 歳くらい。
仕事に恋したらわからない。
- 結婚したい理由
よくわからないが、女性としてあこがれる。
好きな人のために、何かしてあげたい何か。
子どもきらいなわけではないが、自分のパートナーといっしょにいて、何かしてあげたい気持ちが出てきたら。
単に「好き」というだけではない何かが「結婚」でしょう。
- 結婚の条件
パートナーに対しての永遠の「思い」を感じられるかどうか。
やさしさ。
あとは、二人でがんばるのみ。
- こどもの希望数
1 人。
- 子どもの希望時期。
30 歳くらいまでには。
- 結婚後の仕事
映画やドラマのシナリオづくりの仕事をしたいので、結婚してもずっとやりたい。
夫の仕事にもよるが、お互い家事分担してもらえるような人がベターですが。
女性が仕事を続けることは今の社会では難しいように言われますが、女性しかできない仕事もあると思います。社会的役割として自分がやれることはチャレンジしたいと思います。
(すみません。就職面接のような返事で)

- 結婚後のライフスタイル

ヨーロッパでの生活にあこがれている。

個性的な二人の住みかをみつけて、子どもはむこうの文化で育ててみたい。

贅沢は言わないので、しっかりと自分たちだけで生活できるスタイルをもちたい。

親のことは、まだ元気なので、海外生活をしてから考えます。

先ほどの質問の結婚の条件には、海外での生活をいっしょにできる人が加わりますかね。

- 晩婚化、少子化について

しかたがない。

自然の摂理で、子どもが少なくなりすぎたら、また増える風潮になるのではないですか。

晩婚化は、それはそれで新しい夫婦関係があって素晴らしいことだと思いますが。

どちらも、行政や経済面で大変だと言っているのではないですか。

- 性交渉経験

お答えできません。

- 「できちゃった婚」についてどう思いますか。

二人の意思があってそうならば、祝福すべきでしょう。

ただ、望まれない妊娠ならば、不幸です。

「結婚」と「出産」は分けて考えたほうがよいと思います。

私は、結婚しなくても子どもをもってもよいと思っています。

- その他ご意見

あくまでも、希望でお答えしました。

友人や先輩の話から、現実はきびしいことも理解しています。

これから就職したら考え方も変わるかもしれませんが、希望はすてたくはないと今は思っていますよ。

(5)対象者 E

- 年齢 22 歳
- 性別 女
- 職業 フリーター(現在は花屋)
- 恋人 いる
- 結婚希望時期
27-28 歳くらい。
- 結婚したい理由
一緒にいたいと思う結果。
世間的に正式なカップル
- 結婚の条件
フィーリングがあっていること。
基本的には、一緒にいて楽しい人(ネクラはイヤ)、ホッと
できる人。きどっていない人。
何でも、気楽に楽しんでやってくれる人。
- こどもの希望数
1 人。
- 子どもの希望時期。
30 歳くらいまでには。
- 結婚後の仕事
基本的には続けたい。
花屋は一見女性らしい職業に見えるが、水仕事でもあり結構ハードな仕事。
でも何となく、ひかれる仕事。
今はフリーターだが、もっといろいろ経験して自分が魅力を感じられる仕事を見つけない。
結婚しても、育児、家事と両立できる何か仕事はもちたい
と思っている。

- 結婚後のライフスタイル

気がねなく、暮らせたらいい。

自分も、彼もそれぞれやりたい、またはやれる役目を分担していけたらいい。

ふたりでフリーターというのも悪くない。

何かいっしょの感覚というか、目標をもっていたい。

映画も、コンサートも、スケボーもファッションもいっしょに行きたい、やりたい。

- 晩婚化、少子化について

現実がそうだとのことですよね。

そのことが悪いことなのか良いことなのかは、わからない。

結婚していなくても、子どもがいなくても変な目で見られることなんてなくなったのだから、どうでもいい。

それよりも、離婚する夫婦や自分の子どもを殺す夫婦が増えているほうが不安だし問題だと思う。

- 性交渉経験

ある(「もちろんある」という言い方)。

- 「できちゃった婚」についてどう思いますか。

周りの子も、「婚」まではいなくても、「できちゃった」は一般的に多いと思う。

「婚」まで行ければよいが、そうでない場合は大変。

でも、みんなセックスはやめられない。

彼氏とは一緒にいれば、絶対にそうなる。

個人的には、セックスはしてもかまわないと思うが、避妊があまいと思う。

- その他ご意見

二人の関係性が一番大事で、世間的な「結婚」というかたちはどうしてもよい。

あまい結婚は、あまい結果となると思う。

(6)対象者 F

- 年齢 24 歳
- 性別 男
- 職業 会社員(ソフトウェア開発)
- 恋人 いる
- 結婚希望時期
26 歳くらいまでに。
- 結婚したい理由
彼女といっしょに生活したいから。
今は別々な生活だが、つきあって 4 年経つのでそろそろ同棲もしたい。
いっしょにいと精神的に安心できる。
もっと彼女といっしょにいれる時間を持ちたい。
- 結婚の条件
彼女の素直さとかわゆいさ。
自分の経済的自立。
- こどもの希望数
2 人。
- 子どもの希望時期。
30 歳くらいまでには。
- 結婚後の仕事
相談はしているが、彼女には、家事と育児をメインにやってもらいたい。
仕事をしてフルタイムではなく、パートか自宅でやれるもの。
(彼女も同業ですか)
同じソフトウェア開発者です。
彼女は別な業種(テーマパーク)も希望しています。いくつか違う業種で働いてみたいといっているの、それはそれでできるものならそうしてほしい。

しかし、結婚をして子どもができると現実には難しい。自分が SOHO 的な仕事環境で、自宅もしくは近接した職場で働ければ、育児も男がメインでやれるかもしれないが、なかなかそうもいかない。

どちらかが、仕事はかなりあきらめざるをえない。

- 結婚後のライフスタイル

子どもははやく育てて、子どもが独立したら、妻との生活スタイルを考えたい。

それまでは、お互い仕事と子育てに専念する。

子育て中は、仕事場に近い都心での賃貸生活、子どもが独立してからは、夫婦の小さい戸建てを近郊に考えたい。

妻との墓についても、いいところを探したいと思う。

子どもの独立後は、妻とずっといっしょにいたい。

二人で入る墓も、二人で気にいった場所を探す予定。子どもの面倒になったり家のしきたりによる墓はもう終わりにしたい。

- 晩婚化、少子化について

そのようですが、私はその仲間入りはしないように努力したいと思います。

でも、平均寿命が延びているのですから、多少晩婚化するのも自然な話ではないですか。

少子化については、たくさん産んでくれる人は、今の日本では生活が大変ですから、もっとたくさん補助ができるようにしてほしいですね。たくさん子育てしたい人はどんどんやってもらえるしくみを。全カップルにたくさん産めというのは無理ですよ。

- 性交渉経験

ありますよ。(彼女とだけですが)。

- 「できちゃった婚」についてどう思いますか。

結婚に至るまでの過程としてはもうおどろかなくなりました。明るく、がんばって若いうちに子育てするほうが、かえって

健全かもしれません。

少子化が進んでいる中、産んでくれるのだから、文句言わないほうがいいですよ。

- その他ご意見

会社では、25-26 歳くらいのカップルの結婚式と男 40 代と妻 20 代の犯罪的な(笑い)カップルのどちらかです。

20 代後半か 30 代の人たちの結婚式が少ないように思います。また、いわゆる披露宴ではなく、パーティだけの様式が多いです。

(7)対象者 G

- 年齢 23 歳
- 性別 女
- 職業 会社員(ソフトウェア開発)
- 恋人 いる
- 結婚希望時期
25 歳くらいまでに。
- 結婚したい理由
適齢期が間近。
彼氏もいるし、パートナーとして信じられるしいい人だと思うので結婚したいとは思っている。
父親がうるさい(早くしろという)ので、そろそろ結婚のタイミングかなと思っている。
- 結婚の条件
お互いのうそのない結婚観等の確認。
両親の理解
祝福される関係
- こどもの希望数
1 人。
- 子どもの希望時期。
28 歳くらいまでには。
- 結婚後の仕事
今の仕事を続けたいとは思っていない。
結構徹夜も多いし、単純作業が多いので。
もっと自分の趣味に合うような、雑貨や出版の仕事をしてみたい。
もしくは、直接夢を与えるようなテーマパークの仕事もしてみたい。
結婚後もできる範囲でそうした仕事をやっていきたいし、なんといっても仕事仲間がほしい。
子どもを通じた近所づきあいだけではものたりない。自分の

将来を考えると自分の感性とその仲間が重要のような気がする。

- 結婚後のライフスタイル

子育てもしながら、雑貨や出版の仕事をやっていきたい。

夫になる人とは、いつも恋人のように映画館やドライブのデートは続けたい。

ずっと家にいての専業主婦は考えたくない。

私は一人っ子なので、両親が面倒をみなければならない時期になったら、いっしょに住みたい。夫のご両親も面倒を見る気持ちもあるが、どちらの親の面倒を見るかは状態によると思う。

- 晩婚化、少子化について

特に、コメントはないですが、本人達の問題ではなく、社会全体の問題のほうが大きいように思います。

- 性交渉経験

ノーコメントですが・・・(首を縦に振ってくれたので、あります)。

- 「できちゃった婚」についてどう思いますか。

ご両親はおどろくでしょうが、本人たちにとってはもう事実。前向きに考えるほうがベターだと思います。

- その他ご意見

友人の多くは、キャリアウーマンを目指していますが、私は少し違います。

男の人(夫)と子どもをサポートするプロフェッショナルになってみたいと思います。どうやってキャリアをつめばよいのかわかりませんが。

(8)対象者 H

- 年齢 21 歳
- 性別 男
- 職業 学生(法文学部)
- 恋人 いない
- 結婚希望時期
30 歳くらいまでに。
- 結婚したい理由
結婚はまだ考えたことはない。
もしするとしたら、子どもがほしいときでしょうか。
- 結婚の条件
お互い理解がすすめば、自然に結ばれる。
難しいことはなく、かわいいか、お金持ちか、その時々瞬間できっかけがあり、あとは赤い糸で結ばれているかいないか。
(結構古いことをおっしゃいますね)
映画研究会ですから。
- こどもの希望数
彼女の希望にあわせる。
- 子どもの希望時期。
同様に彼女の希望にあわせる。
- 結婚後の仕事
これも彼女の意見を尊重する。
しかし、気持ちの問題として仕事優先よりは子ども優先で考えてほしい。
- 結婚後のライフスタイル
二人で自然とかたまってくると思うが、我を通せば、亀裂も入るし、我も通さなければ不幸が続く。
離れていてもどこか、共通したものをもっていたい。

- 晩婚化、少子化について

そうなってしまうているわけで、今の世の中それが一番自然な選択でしょう。

無理に子どもを産んでも大変になることはわかっていますし、結婚したくても結婚できるわけでもありません。

自然にまかせましょう。

- 性交渉経験

親には言えませんが、あります。

- 「できちゃった婚」についてどう思いますか。

うらやましいです。

周りの目もあると思いますが、本人達は結婚式さえ乗り切れば、はやくゴールインできたわけですから、よしとすべきでしょう。

問題は、その後の生活維持だと思いますが。

- その他ご意見

この間見た映画「冷静と情熱のあいだ」のような恋をしたい。

(9)対象者Ⅰ

- 年齢 20 歳
- 性別 男
- 職業 学生(専門学校)
- 恋人 いる
- 結婚希望時期
25 歳くらいまでに。
- 結婚したい理由
独立して、はやく家庭を築きたい。
自分をサポートしてほしい。
- 結婚の条件
自分の仕事を手伝ってくれる働き者女房。
実家を継いで、菓子職人(和菓子)になるつもりなので、そのことを理解してくれる人。
- こどもの希望数
最大 5 人くらい。
- 子どもの希望時期。
彼女の体力と相談。
- 結婚後の仕事
二人で菓子職人を目指したい。
サラリーマン生活や彼女のお職業へのかけもちは考えられない。考えたくない。
- 結婚後のライフスタイル
当面は修行。
これから数十年は修行のつもり。
二人で同じ目的をもってやっていくことだけです。
まだ自身はありませんが、伝統を守りながら自分の菓子のスタイルをと思っています。その結果の生活スタイルということでしょうか。

- 晩婚化、少子化について

何かうちこもうとするものがあれば、当然結婚もせず、子どもをつくるひまもないでしょう。

でも、みんながみんなそうではないでしょうから、難しい話です。

- 性交渉経験

ありません。

(そんなことばれたら、おやじからはっ倒されます)

- 「できちゃった婚」についてどう思いますか。

あきまへん。

けじめは必要でしょう。

- その他ご意見

普通の若者のサンプルにはならないと思いますが、すみません。

(10)対象者 J

- 年齢 24 歳
- 性別 女
- 職業 会社員(銀行員)
- 恋人 いる
- 結婚希望時期
そろそろ。
- 結婚したい理由
彼氏といっしょに生活したい。
社内の目もきつく感じる。
両親の見合いのすすめが多いので。
- 結婚の条件
自分が納得できる(信じられる)人。
自分を好きでいてくれる人。
とにかくやさしい人。
- こどもの希望数
2 人くらい。
- 子どもの希望時期。
30 歳頃までには 2 人とも産みたい。
- 結婚後の仕事
専業主婦に徹したい。
彼氏の仕事(外資系営業マン)が大変なので、家のことはすべて私がやりたいと思う。
子育てが最大の関心事でもあり、重要な仕事だと思っている。
でも、彼氏にも家事や育児は喜んでやってもらいたいです。
彼氏ができなければ、銀行に勤め続けるつもりだった。
- 結婚後のライフスタイル
専業主婦だが、自分の趣味や友人との交友は続けたい。
パソコンもあるので、何かできると思う。
一定期間は家族だけの生活をしたいと思っている。
できれば、彼の仕事が海外勤務となれば、いっしょについて

いきたい。そういう生活もしてみたい。

いずれ、ご両親との同居も検討しなければならないので。

- 晩婚化、少子化について

残念ながら、私のまわりもそうだと思います。

でも、そんなに沈んだ現象でもないように思います。晩婚でもすてきな男性にめぐりあえているカップルを見るとうらやましいですね。同世代や同会社内であせることもないなという感じでしょうか。

少子化はいろいろと自分たちの老後の問題もあり、経済社会が大変になるわけですね。イコール銀行も大変になるわけで、難しい問題ですね。

自分だけががんばってもどうにもならないですから。

もっとこれからの社会が魅力的ならもっと産んでもよいですが。

- 性交渉経験

答えられません。

- 「できちゃった婚」についてどう思いますか。

事実としては、よく聞く話。

好きな人との間にできちゃったら、もう両親にごめんなさいしかないですね。

中高生は困りますけど。

- その他ご意見

職場によって、結婚に関する意見が違いますか。

(まだサンプルが少ないので、なとも言えません)

第4章 少子化時代の結婚観から見た新たなライフスタイル

これまで少子化を前提にした結婚観がどのようなになるのか、さまざまな観点から見てきた。結婚観の変化が全て少子化の影響だといいきれるほど、問題は単純ではないが、本章では今後どのような恋愛観、結婚観、またそれを取り巻くライフスタイルが考えられるのか、前章までの調査データを基に近未来型のシナリオとして描いてみた。

4-1 独身の恋愛ライフスタイル

4-1-1 恋愛という結婚の形態

(1) 究極の恋愛、見合い恋愛

恋愛結婚へのこだわりは「見合い恋愛」という新しい結婚形態を創出してきた。「見合い恋愛」とは、相手を紹介されつきあいをはじめて恋愛の末に結婚する形態である。結婚相手を紹介する社会サービスも「見合い恋愛」の一つであろう。ツヴァイとかキューピッドなどのクラブに入会すると、パーティなどが催され知りあうチャンスが与えられ、あるいは直接希望にあった相手がクラブから紹介される。

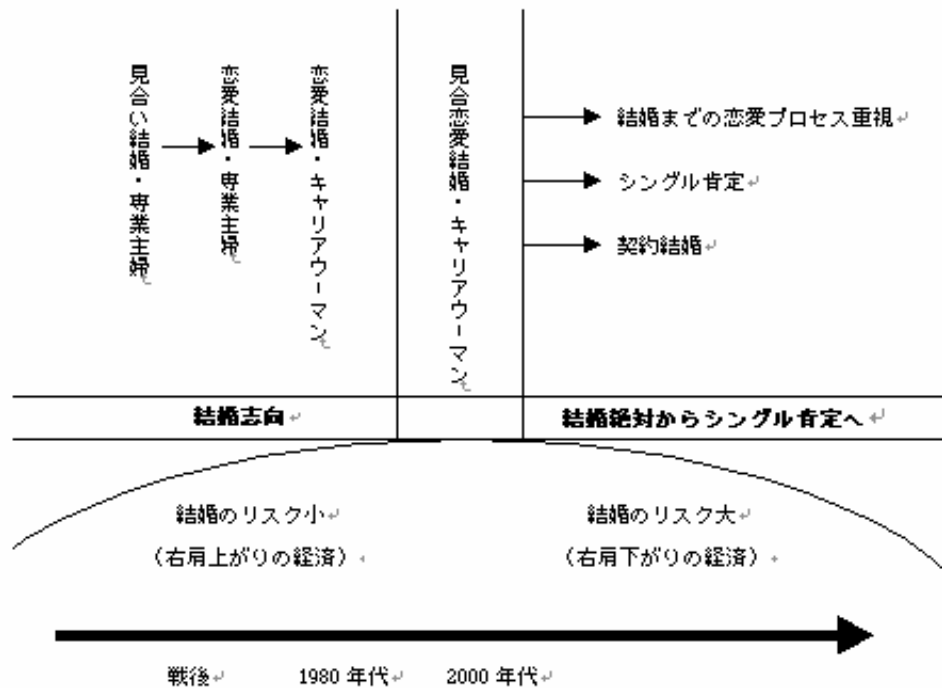
きっかけは紹介でもよいが、十分な恋愛結婚というレッテルが必要だと考えている。見合い恋愛の背景には、恋愛の場から仕事の場が変わった職場では相手を見つけられない、また結婚と恋愛は別物であるという意識がみられるからである。圧倒的に恋愛結婚が増加する中、恋愛できないものはコンプレックスさえ感じるという。

(2) 恋愛のプロセス重視へ

恋愛結婚のレッテルだけでは幸せになれない。キャリア志向では、見合い、恋愛によらず結婚してただの専業主婦になってしまえば目的は達成できない。安定した職業に従事し、夫と対等の関係でなければ幸せではないと考える。

しかし、これでもどうも満足できない。もっと仕事と結婚生活（結婚という状態）をうまくバランスをとることが大切だと思いはじめている。恋愛という状態と結婚という状態を両立させ、結果としての恋愛結婚ではなく、「プロセスとしての恋愛状態」を楽しむことが大切であると考えられるようになる。

そのために独身者は今まで以上に恋愛を重視し、恋愛技術を磨くことになるだろう。そうしたライフスタイルが予想される。



（図 4-1 結婚志向の変化と今後の傾向）

（３）契約結婚

結婚するにはリスクを伴う時代である。経済動向によってはいつ失業になるかわからない。リスクのある結婚より、自由度の高い恋愛をしているという「今」の状態が大切だと考える男女も増えてくるだろう。したがって、恋愛感情が無くなったときには離婚するとか、経済状態が変われば離婚するという条件で結婚する契約結婚は増えるだろう。

4-1-2 独身のライフスタイル

リスク分析のできる女性（男性）は容易に結婚しない。シングルを維持しつつ、老後を設計し、財産を築き、仲間を作り、異性と遊び、楽しく生活する。こうしたシングル生活を肯定し、人生設計ができる人間が増えてくるだろう。

(1) プロセスとしての恋愛

恋愛結婚のプロセスを重視するということは、恋愛を楽しむことである。そのためには恋愛相手を豊富にもつ必要がある。めぐりあうチャンスが多くなければならない。ワーカーホリックで、仕事の疲れが貯まったといって寝休日を決め込んだり、家の中で過ごすだけではめぐり合うチャンスはすくない。余暇としての自由な時間が必要である。一人であるいは女性同士、男性同士で街歩きを楽しむ。独身と分かれば、男性も女性も声を気軽にかける。

コンサートホール、映画館、カフェ、ゲームセンター、アスレチッククラブへ行く。こうした街を楽しむライフスタイルが独身のライフスタイルである。街には彼らを受け入れるサービスがより増えてくるだろう。

(2) インターネットの恋愛ゲーム

恋愛相手は街の中で見つけるだけでなく、インターネットも大いに活用されているだろう。顔写真付き匿名 BBS(Bulletin Board System)が流行る。音楽や映画、スポーツなどの特定の話題をテーマにした BBS でおしゃべりを楽しむ中、気に入った相手を見つけて、電子メールで会う約束をする。BBS がパーティ感覚で行われている。もっとおしゃれ感覚で知性と教養を楽しんでいる。けして、出会い系サイトのような下品なものではない。

(3) シングルマザー・ファザー

結婚へはリスクが大きく踏み切れない。シングルでいたいと考えている。しかし、自分の子孫はほしいとも考える。また、子供にベットの的な要素を求める面もある。寂しさを紛らわせたい。

こうした人たちは、一人で子供を育てようと思う。しかし、実際には大変な育児は外部化する。早朝から深夜まで預かってくれるところが多数でき、経済的負担は夫婦のダブルインカムよりも当然大きくなる。高収入なシングルには可能である。だからシングルマザー・ファザーの生活は独身生活とは大きく変わらない。

育児のほか、さらに教育全般が家庭から外部化されることが一般化すれば、片親の子供だから教育されていないといったレッテルを貼られることも少なくなる。

4-2 夫婦のライフスタイル

4-2-1 一緒に時間を楽しむ

それぞれの自由な時間を求め、認め合う夫婦も増えてくるだろう。恋愛状態の結婚をしているからといって、四六時中夫（妻）や子供から拘束されることはない。誰からも束縛されない時間は確保し、趣味や自分だけの時間に充てる。だからこそ一層「一緒に時間」を楽しむ意義も強まってくるだろう。

（１）ケの外食とハレの内食

休みの日は一緒に食事をする。食材選びから夫婦で楽しむ。一緒にキッチンに入り、一緒につくり、食卓をきれいに飾り、おしゃれな会話を楽しむ。普段の生活では殆ど家事負担のない安価な外食で済ませる。その分、休日の食事は贅沢になる。ハレの食事は内食であり、ケの食事は外食である。一昔前の逆になろうか。

（２） 家庭に子供のいない子持ち家族－長期託児所

共働きが一般化するにつれ保育所、託児所の社会的需要は高まる。朝、自宅の最寄り駅近くにある託児所に預けた後、近くで朝食をとる。深夜近くになっても預けていられるので、残業や会社帰りの同僚との飲食に付き合える。ときには夫婦でコンサートや演劇、映画を楽しみ、それから子供を迎えに行くことができる。こうして、女性も四六時中の育児から開放され、しかも子供の顔は毎日見て生活ができる。

また、よりハードな仕事をしている家庭では一週間子供を預ける。月曜日に子供を迎えに来てもらい、週末に送り届けてもらう。さらにこうした長期間子供を預ける仕組みは、幼稚園、小学校、中学校でも広まり、寄宿制が珍しくなくなる。家庭での教育に代わり、集団生活で教育していく。この寄宿制は社会性を身に付ける教育として受け入れられ、高度な教育システムに発展する。

（３） 家庭内別居生活

約束して一緒に時間を過ごす頻度が週末婚、月末婚よりももっと長くなると、数ヶ月に１度、年に数度ということにもなる。サラリーマン型社会が崩れて、それぞれがフリーで仕事をすればさらにすれ違いの生活が多くなる。

こうした夫婦はあえて、家庭内では別居と割り切り、却って一緒に過ごせる時間を大事にする。それは一年に1度しかないかもしれないし、国内や海外旅行を計画できる期間かもしれない。夫婦で楽しむ時間は二人にとって大きなイベントになる。今後、個人の才能に依存した情報社会ではこうした夫婦は増えていくだろう。

(4) 週末婚・月末婚

育児から開放されると、夫婦は同棲の生活あるいは同居生活と化する。毎日

表4-1 生活の拠点別ライフスタイルの概観

生活の拠点 —— ——	都心サイド固定型	マルチハビテーション型 (家庭内別居を含む)			田舎サイド固定型
		別居		同居	
		家庭内 都心 個別実家		家庭内 ホテル 田舎・別荘 旅行	
ライフスタイルのタイプ	ボランティア夫婦/ SOHO・起業家夫婦/ ベンチャー夫婦/ 個別ベンチャー夫婦/ 夫婦/	週末婚/月末婚/年一婚（家庭内別居）/ 週末別荘結婚生活/田舎暮らし結婚生活/ ボランティア夫婦/SOHO・起業家夫婦/ ベンチャー夫婦/個別ベンチャー夫婦/ SOHOべったり夫婦/すてきな専業主婦/ 子育てパラサイト/不動産パラサイト			子育て中心結婚生活/農業夫婦/ ボランティア夫婦/ SOHOべったり夫婦/ すてきな専業主婦/ 子育てパラサイト/ 不動産パラサイト
結婚生活の形態	通常同居	週末婚			通常同居
		月末婚			
		年一婚			
主な職業	サラリーマン SOHO 起業家 ベンチャー ボランティア	サラリーマン SOHO 起業家 ベンチャー ボランティア			サラリーマン SOHO 農業 ボランティア
夫婦の働き方	共働き				
	片働き（すてきな専業主婦）				

帰宅はするが家での束縛がない。朝食は外食で当然一緒に食べない。夕食も別々に済ませてくるので帰宅の時間もそれぞれ自由。就寝の時間も自由である。約束をして、二人で何かを一緒にするのは、週末の2日だけである。しかもその中で数時間のみ。その時間で一緒に買い物へ出かけたり、食事をしたり、スポーツや音楽・演劇・絵画・映画鑑賞をしたりする（週末婚）。

さらに週末もそれぞれ別々に自由に生活し、約束して一緒にするのは、月1回、月末という結婚生活スタイルもあろう（月末婚）。

（５） 週末別荘・田舎暮らし結婚生活（週末別荘・田舎婚）

夫婦が個別の住居で暮らし（あるいは借りて）、平日はそれぞれの住居から職場に向かう。平日は全くの独身生活である。この2つの住まいは二人が独身時代に購入したもので、個別の財産である。

週末は、田舎の家やリゾートの山荘にきて一緒に過ごす。彼らは金曜日に待ち合わせ、子供のいる場合は週末に帰宅する子供をピックアップし、車で向かう。時にはそれぞれ個別に車や電車で行く場合もある。久しぶりの再会で家族らしさが戻ってくる。目的地は自然の広がるリゾート地のほか、その近辺の農村など。週末の交通渋滞に巻き込まれず便利な近郊も人気がある。

別荘では夫婦で買い物、料理、趣味などで楽しんだり、別荘仲間、田舎暮らし仲間と交流する。これが新しい人脈づくりに役立ち、フリーな彼らには良い営業活動にもなる。

この派生型として、

- a 都心の住宅は1ヶ所にあり、普段は家庭内別居をしているケース
- b 週末を都内のホテルで過ごすケース（週末ホテル婚）
- c 週末を旅行で過ごすケース（週末旅行婚）

など多様である。

（６） 複数夫婦共同生活

子育てを外部化（毎日型、週末型、月末型）することにより、三組、四組等（複数）の夫婦の共同生活が可能になるだろう。コーポラティブハウスのように1つの家に一緒に住むのである。寝室や書斎、キッチン、リビングルームはそれぞれ夫婦単位で個別にあり、そのほかに、共同のリビングルームがある。ここに集まり、余暇時間を複数の夫婦で共有する。

すでに大規模マンションなどこうした共用施設があり、コミュニティを形成しているが、ここでのイメージは仲の良い複数の夫婦だけで生活する形態である。現役引退後、あるいは、配偶者と死別したときのリスクヘッジにもなっている。高齢者のグループホームは普及しつつあるが、それを若いうちから始めようというものである。

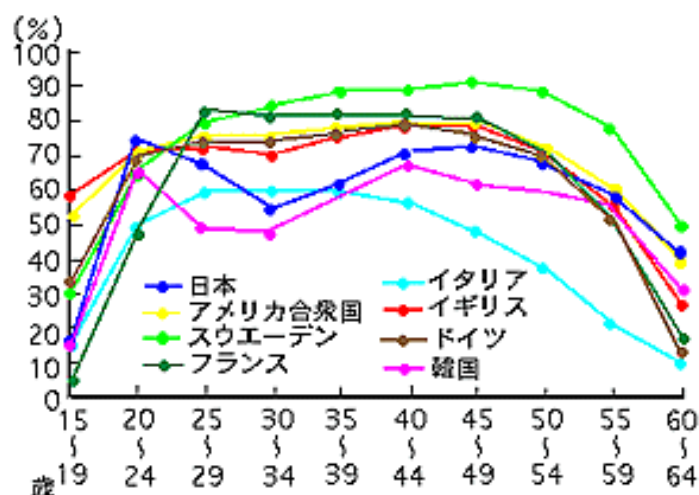
我が国の人口の減少、所得の減少、人口移動の停滞、職業選択の幅の拡大などが、コミュニティの強化・共同生活を促進していくと考えられる。そうしたなかで、共同生活を選択する夫婦も現れるだろう。

4-2-2 楽しむ生活から専心する生活へ

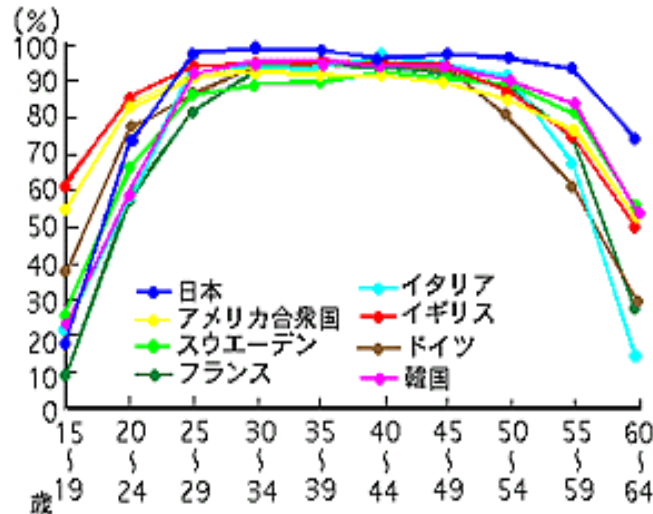
(1) 子育て中心結婚生活

学校の荒廃が叫ばれ、子供を安心して学校に任せられなくなっている現代、子育てがすべての中心であり、家庭教育が大切だと思える人も一方で増えてくるだろう。子供が産まれてから、小学校の低学年に上がるまでの10年間は、親が自ら子供の教育に当たるべきであると考えている。社会への参加や経済的な満足だけが人生の目的ではなく、10年間程度はすべてを犠牲にしても、子育てに専念し、その後で再び社会で働けば良いと考えている女性達である。

a 年齢別労働力率の国際比較（女性）



b 年齢別労働力率の国際比較（男性）



注：

- (1)アメリカ合衆国、スウェーデンの区分のうち、「15～19歳」の欄は、「16～19歳」として取り扱っている。
- (2)イタリアの「15～19歳」の欄は、「14～19歳」として取り扱っている。
- (3)イギリスは1993年、イタリアは1994年、その他の国は1995年の数値である。

資料出所：ILO「Year Book of Labour Statistics」(1994,1995,1996年)

出典：<http://www.city.nagoya.jp/josei/qa/qa7.html> より

(2) 農業夫婦

子供を育てるには農村が最適だと考える夫婦もいる。子供は野山に入って、手足を使って全身で学習するものであり、机の上だけでは育たない。地域のコミュニティの中で教育することが大切で、時には近所の年長者から叱られるぐらいでよいと考えている。職業の一つとして農業を選択し、さらに子供の教育環境として農村に一家で移住する。

(3) ボランティア夫婦

労働により収入を得ることが社会との関わりと考える人が多い一方、ボランティアを通じて社会との関わり保持しようとする夫婦も増えるだろう。労働時間の短縮や、毎日決まった時間に拘束されない人々も増える傾向にあるから、自由になった時間は、例えば地元の住民活動に参加する。子育てに重心を起さな

がら地域に役立つ仕事ができる。

日本の人口移動は1970年代以降、停滞の傾向にあり、生まれ育った地域で結婚し子供を出産するというケースが多くなっている。新しい故郷観や地域観が地域に愛着をもたせている。ボランティア夫婦はそうした夫婦のライフスタイルである。

また、実力のある人は、地域のリーダーとして囑望され、地域の各種団体のリーダーとして、また市町村議会や都道府県議会議員として進んでいくことも想像できる。そうしたライフスタイルやライフステージを考えている人も増えるであろう。

(4) SOHO・起業家の夫婦

終身雇用制の終焉がみえたサラリーマンをやめて、会社を興し起業家として仕事を始める人も多くなるであろう。起業するには資本金を準備しなければならない。夫(妻)も出資者になるから夫(妻)の理解と協力が必要である。結婚に際しては、起業を認めるような相手と結婚しなければ実現は難しい。

(5) ベンチャー夫婦

結婚はベンチャラスなことをするためのスタートだ考える夫婦は、二人で一緒に起業する。お互いベンチャラスなことがしたい。力をあわせるために結婚する。起業を約束して夫婦になるのである。将来どんな仕事がしたいのか、どんな役割分担で仕事をするかなど、夢を描きながら、将来のビジネスと結婚生活を重ねている。まさにビジネスパートナーである。

たとえば、新しいスタイルのコーヒーショップを経営したい、ゲームソフトを開発したい、着メロの音楽配信サイトを経営したいという具合に夫婦で始められる仕事が成立するか否かは別にしてアイデアは数多く考えられる。

結婚生活は共同で夫婦の財産を管理し、ダブルインカムのようにポケットは別にしないで一本にする。運命共同体なのである。

サラリーマン時代は資本金を蓄え準備しチャンスを窺い、起業のプランを二人で練っているのである。休みのない結婚生活である。

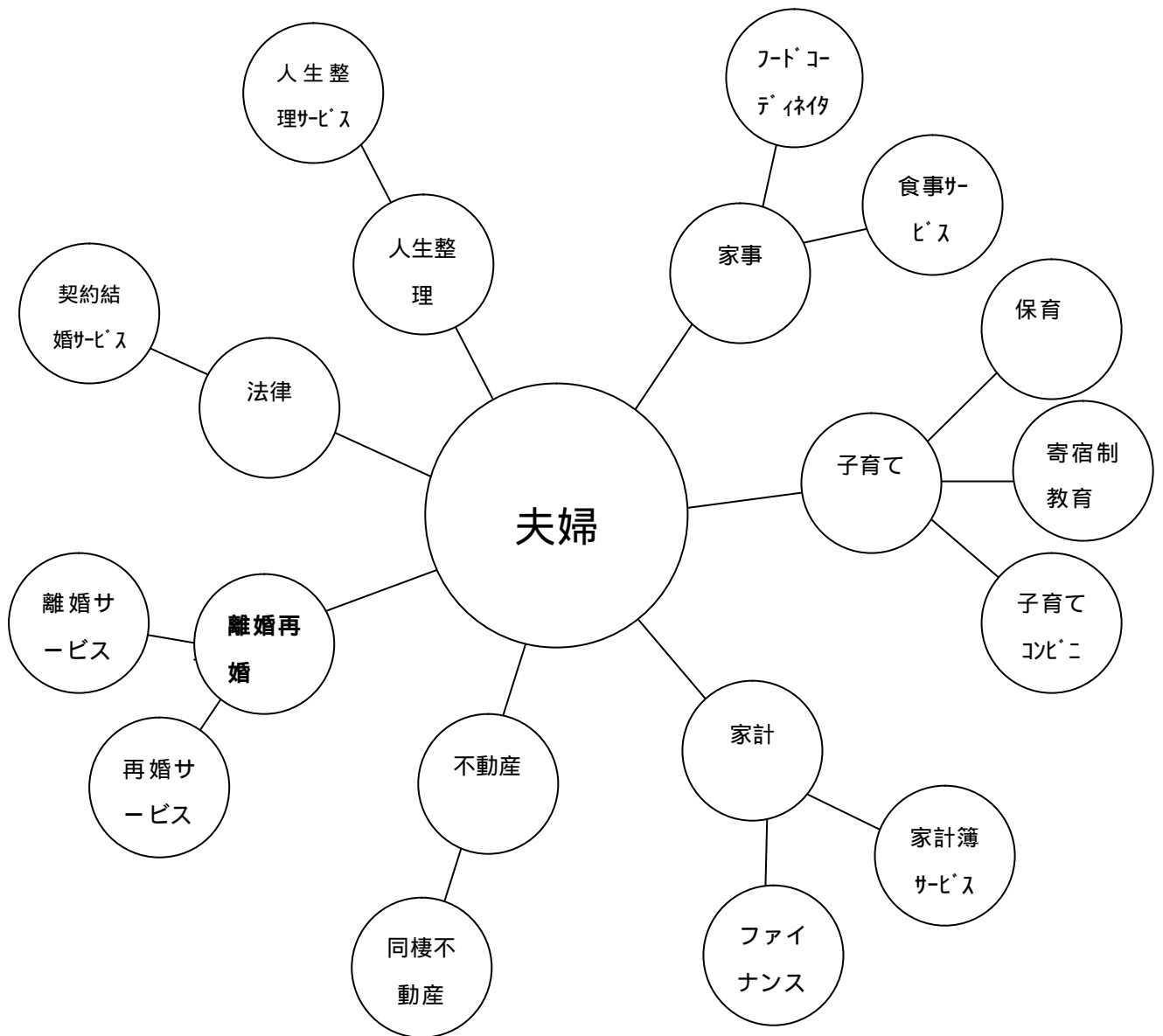


図 4-2 夫婦を中心にしたネオ結婚観に伴う新しいサービス産業

(6) ベンチャー個別志向夫婦

夫婦でベンチャーを志向しても、共同のビジネスではなく、それぞれが個別のビジネスプランをもって、その実現を目指している夫婦もあるだろう。結婚に際しても、夫婦のビジネスプランの実現を約束するが、あくまでも別個のビジネスであり、起業するのも個別の会社である。それぞれが社長で夫婦の間で

はよきビジネスアドバイザーとして接する。

したがって、サラリーマン時代の財産はそれぞれ自分の起業する会社へ投資され、相互に投資しあうことはあっても一方的に資金を融通することはあまりしない。財産は個別に管理されているので、家計にも必要な費用だけを、折半型や収入比例型で家計に入れる。

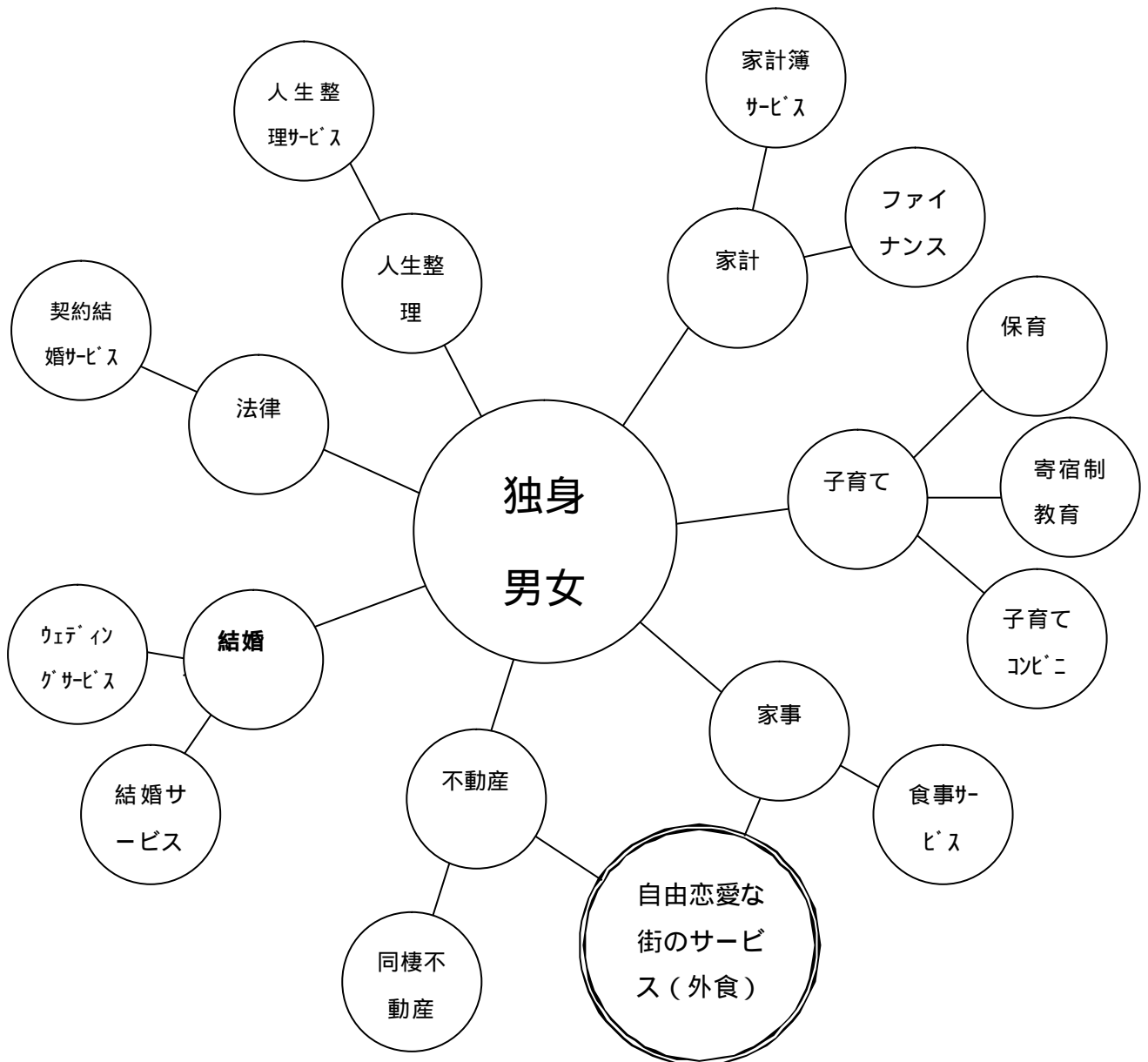


図 4 ? 3 独身男女を中心にしたネオ結婚観に伴う新しいサービス産業

(7) SOHO ベったり夫婦

四六時中一緒にいたい夫婦なら自宅で SOHO をするというライフスタイルもあるだろう。恋愛時代の「いつも一緒にいたい」が引き続き、一日中一緒にいたいという夫婦である。そのために、お互いサラリーマンをやめて、新しいビジネスを自宅で始める。こうしたライフスタイルを約束して結婚することもあるだろう。

このタイプの派生には、これを期に都会だけでなく、田舎暮らしや 1JU ターンするというケースもある。

4-2-3 ゆとりある生活願望

(1) すてきな専業主婦/ハイソ主婦

結婚しても自分は働かず、仲間とのおしゃべりや習い事、稽古事をして優雅に生活したいという女性のライフスタイルである。できれば、上流階級の夫を見つける、あるいは上流でなくても経済力のある医者や弁護士、青年実業家などと結婚し、ブランド物を着て、高価なアクセサリをまとい、自分専用的高级外車を運転し、毎日、コンサートや演劇などに出かける。そうしたライフスタイルを目指す結婚である。当然夫もそうした優雅でいつまでも美しい妻であって欲しいと思っている。

(2) 子育てパラサイト

育児は大切な夫婦の仕事であって、子供を預けるのではなく、自分の手で育てたいと思っている夫婦は多い。しかし、一方で共に働きたいと思う。そこで、子供を自分の親に預け育ててもらうのである。他人に育ててもらうより親の方が安心である。そのために親と近居して朝晩子供を預け迎えに行く。親の許す範囲で1週間預けっぱなしということもできる。(近居とは、たとえばスーパの冷めない距離ぐらい離れて住むこと) また、近居でなく同居するケースもあるだろう。こうした親に子育てを任せるライフスタイルが子育てパラサイトである。

(3) 不動産パラサイト

独身のパラサイトシングルと同様に、親の家に同居して住居費の節約するライフスタイルである。ただし、節約の目的は複数あって、バブル期に見られた単に地価の高騰によって本人たちの力では取得できなくなったからという理由ではなく、

- a 将来の起業のために資金を貯めている
- b 田舎暮らしを目標として、それまで資金を貯めている
- c 週末婚で週末はリゾートの山荘で二人で暮らしているが、平日は一人暮らしであるから独身時代の親元の部屋で十分と考えている
- d a から c に子育てパラサイトをあわせるケース

など依存の仕方はいろいろある。

第5章 少子化時代のネオ結婚観に伴う新しいサービス産業

本章では、少子化時代の結婚によってこれまでになかった社会サービスが求められる点に注目し、新たなビジネスの可能性について考察をおこなった。

5-1 自由恋愛な街のサービス

街が自由恋愛市場になるには、大人が遊べる街でなければならない。別の言い方をすれば大人が街で時間を消費できないといけない。たとえば、ファーストフードの店よりは個性あるカフェやレストランなど。ゆったり時間を過ごしオーナーや客とコミュニケーションができるとこが多くなれば街も大人のものになる。今後、大人の感覚に訴えるエンターティメント施設が求められよう。

5-2 ウェディングビジネス

披露宴も様変わりしてくるだろう。晩婚化が進行するために、新郎新婦の両親や親族はもはや老人の域に達している。一方、若い仲間は日頃のパーティ感覚で披露宴を持ちたいと願い、披露宴のこれまでのような社会的な意味合いは無くなっていく。だから新婚旅行から帰ってきた後の、親戚周りのための準備や方法、手土産のコーディネートなどを伝授する新種のサービスが求められてもくる。

現在のウェディングビジネスは必ずしもこうした二極化したニーズに十分応えていない。

5-3 子育てをめぐるサービス

(1) 長期の育児サービス（育児のアウトソーシング）

育児の外部化も進んでいる。実際におむつや離乳食は市販のものを使うのが一般的になった。綿のおむつを母親が作り、毎日洗濯して使うというのは少なくなっている。また、零歳児から保育園にあずけることもできるし、子供と接している時間も少なくなっている。

今後は1週間や1ヶ月、あるいは数ヶ月預けっぱなし育児サービスが始まるかもしれない。週末などに子供を送ってくれるし、週始めには迎えに来てくれ

る。このサービスは、長期託児だから、毎日の送迎が不要である。残業など仕事の都合で迎えに行けなくなることもない。また、逆に子供の迎えを理由に仕事ができなくなることもない。都市の24時間化で、勤務時間が多様化しているがそうした仕事についている人にも安心して子供を産むことができる環境がうまれる。

普段は、インターネットテレビ電話で子供の顔が見られる。遅く帰っても寝顔をライブで見られるし、仕事の合間にも会話ができる。短期的な託児ではなく育児も含めた長期的な社会サービスが求められている。仕事に生きがいを感じる夫婦なら、応分の出費も辞さないだろう。

(2) 子育てコンビニ

子育てをする専業主婦やパートタイマー向けに、子供を一時的に預かる保育サービスである。普段は子供と一緒にいられるから、ワーキングマザー向けの育児サービスを利用する必要はないが、買い物に出かけるとか、稽古事をするとか、あるいは、友達とお茶を飲むなど、テンポラリーに子供を預かってもらいたいと思うことはいつでもある。そうした需要に対して、コンビニエンスストアのように、近所にあって24時間いつでも預かってくれるサービスである。料金が課題だが、気軽に短時間でも利用できる点は利用価値が高い。

5-4 家事サービス

子供を安心して長期間預けられれば、普段の生活は夫婦の同居生活である。また家事は平等に分担することが夫婦のルールだから、お互い面倒だというものはアウトソーシングされる。具体的には以下のサービスが考えられる。

(1) 食事サービス

大量仕入れ、計画仕入れで安い外食サービスを利用することで、作る時間も省け、キッチンの汚れ、掃除、ゴミ処理も不用になる。夫婦そろっての場合もあり、別々に仕事に合わせてという場合もあるが、普段は外食が多くなる。また、半調理品を買って帰ることもあろう。家で食事を作るのは特別な日に限られる。ハレの日は家で、普段のケの日は外食ということになる。

（２）健康フードコーディネーター

毎日の献立や食材の購入は、家事のなかでも大きな負担である。子育てのアウトソーシングに加え、この健康フードコーディネーターサービスを利用できるのは、所得の高い夫婦である。当然健康にも気を配っており、単なる食材購入の代行ではなく、健康に配慮して夫婦の好みや日々の仕事の変化に対応したきめ細かなサービスをしてくれる。

５－５ 財産・相続をめぐるサービス

（１）家計ファイナンスサービス

女性の経済力が増し、家計を相互に負担する夫婦が増えている。専業主婦で無職であれば、家計は夫の収入のみであるが、共働きであると、いくつかのパターンがある。

a ワンポケット型

お互いの収入をそのまま家計に入れてしまうタイプ。お互いの小遣いはそこから出す。

b 家計の維持費を折半して負担する型

必要な食費、教育費、光熱費、通信費などを折半し、それに住宅費（住宅ローンを持ち分割合で）を加算した額（家計負担金）をそれぞれ負担する。それぞれ残りは個人の小遣いとなり、洋服や趣味、貯蓄などに回す。

c 収入比例負担型

家計にかかる費用（家計負担金）を、それぞれの年収に応じて負担する。個人の残りについてはそれぞれの小遣いとなる。

現在、共働き夫婦はいずれかの型で家計を維持している。今後契約結婚型になれば、両者の負担金の割合、財産の持ち分などシビアな計算が必要になる。また、その上に、各種の保険なども加えてその計算はかなり複雑である。

万一、離婚に至った場合、その後の生活を念頭に今から資金計画を練っておく必要もある。老後の設計も同様である。

従来のように、死ぬまで一緒に暮らし、ある程度の財産を築いておけば、二人で暮らしていけるだろうという単純な人生設計では間に合わない。さまざまなケースが想定され、個々に対応したマネープランが求められる。こうした二

ーズに対応した家計ファイナンスサービスは重要である。

（２）家計サービス

前章の家計ファイナンスサービスの項でも見たように、両者から家計負担金を出す場合、家計の現状を常に把握しておき、家計の総額がはっきりしていないといけない。今も多くのダブルポケットの夫婦が家計負担金を両者で出し合っているが、現状は大まかになっている。もっと正確に運営していきたいと考えるだろう。家計の損益計算書と貸借対照表がなければ、家計負担金も払えないし、安心して離婚もできない。家計の税理士が必要になってくる。

（３）同棲不動産の斡旋サービス

結婚に至るまでには、同棲をして相手を十分に知る必要があるとして、同棲が一般化してくるだろう。現在日本では同棲生活は社会的に認められた生活行為ではないために、賃貸住宅を借りることができないケースが多い。一般的には一方が賃貸契約を結んだ後で同棲を始める。賃貸契約上はルール違反であるが、現在同棲相手に貸す賃貸人は少ないからしかたがない。

こうしたルール違反の状況を放置せずに、同棲を結婚までのプロセスと前向きでかつ身元もはっきりしている２人に積極的に物件を賃貸する賃貸人も多いはずである。そうした両者を斡旋する同棲不動産の斡旋サービスが今後増えると考えられる。

５－６ 法律に関するサービス

（１）家族法律相談ビジネス

「子は鎺」という言葉があるが、シングル派が肯定され、独身でいることやシングルマザー・ファザーが社会的に一般的になれば、いつでも離婚できる。結婚したら一生を夫唱婦随で送るという結婚生活はもはやない。離婚が前提である。つまり離婚の条件が結婚する時点で明確になっている。いわば二人の間で結婚契約の条件が明確化され、契約が交わされる。結婚は立派な契約行為であると考えられるようになるだろう。

こうした契約行為を担保するには、契約書など明文化することも必要である

が、第3者の証明や保証、あるいはトラブルがあった際の裁定なども重要になってくる。契約条件に反するのか反しないのか、違約金や賠償金はいくらかなどを判定する仕事である。結婚契約に関わる法律相談がビジネスになるだろう。

(2) 人生の整理サービス

子供を夫婦の人生から離す考え方が今後広まるだろう。

たとえば、

- a 育児は外部のサービスに任せる
- b 小学校以上は寄宿制の学校に入れる
- c 子供が18歳になったら、親元から独立させる
- d 老後は子供に頼らない。自分の財産を処分して老人ホームに入所したり、介護サービスを受ける

など考えている。家族の中から子供が切り離される。その結果、子供に財産を相続させることもなく、老後や死後の面倒もみてもらわない。

夫婦においても同様で、相手から面倒をみてもらおうと思わない。自分の築いた財産は死ぬまでにそれぞれの意志で個別に処分する。処分された財産が妻や夫に贈与されることもあるが、自分の財産は自分の意志で処分したいと考えている。

しかし、死後は自分では何もできないから、遺言に従って妻や夫、子供が処理するのが一般的であった。これからは第3者を選び、死後の処理をしてもらうような場合がでてくるだろう。そうしたサービスも現れる。

(3) 再婚情報提供サービス

結婚の契約化が進行し、離婚も多くなっており、50代、60代で再婚相手を探している人が増える。こうした第2次第3次結婚者（いわゆるバツイチ、バツ二）も、第1次結婚者（初婚）と同様に、街に出て結婚相手を見つければよいのであるが、まだ50代、60代は少なく、かつ第1次結婚者に比べ、仕事も忙しく、また再婚に向けたエネルギーも弱い。

このサービスは、年齢の高い層を対象に再婚希望者を会員に募り、再婚相手の情報を提供するサービスである。こうした再婚をコーディネートするサービスは第1次結婚者以上に高い付加価値が期待できる。

第6章 座談会 ― 結婚観の今後の展望

日 時 2002年3月5日 16:30～

出席者 長谷川文雄 東北芸術工科大学副学長

犬田 充 東海大学 名誉教授

小山田裕彦 東北芸術工科大学総合研究センター研究員、
日本エム・アイ・シー株式会社 経営戦略室 サブマネージャー

松村 茂 東北芸術工科大学情報デザイン学科助教授

6-1 はじめに

（長谷川） それではさっそく、「少子化時代の結婚観に関する座談」ということですが、今のライフスタイルの研究の中でいろいろあるのですけれども、つい最近の旧厚生省の発表などを見ると、思ったよりも少子化の傾向が激しいというようなことが出てきて、これはいろいろなところに影響が出てきています。我々大学人にとっても、先細って受験生が減ってくるという問題もありますし、一方では、子どもの数が少なくなってきたので、おじいちゃん、おばあちゃん、あるいは親が、大変子どもを大事に育てるということで、ギフト関係や、教育では手厚く、小さいときからいろいろな習い事をさせる等々、いろいろな傾向が出てきています。それから、日本全体からすると、将来、日本の活力は大丈夫なのだろうかなど、いろいろな少子化にまつわる問題があって、一昨年、少子化に関する研究（「少子化に伴う家族のライフスタイル」1999年6月）をしてきたわけです。

今日はその中で結婚との関係で考えてみたい。子どもの数が少なくなると、いずれ適齢期になれば結婚するのですけれども、いろいろな傾向が出てくるのではないかなと思います。一例として、結婚の年齢差というのが比較的限られていたのですけれども、欧米で見られますように、必ずしも年齢の問題ではなくなっています。つい最近でしたか、マイク真木が20歳ぐらいの年齢差がある人と再婚しました。そういったことも、1つの今後の問題になるのかもしれない。

そういった意味で、特に、松村先生と、それから小山田さんには、研究にも直接加わっていただいているわけですが、今日は研究成果も踏まえてお話をいただきたいと思います。同時にまた、ライフスタイルの研究では、犬田先生は大変なご専門家でいらっしゃるの、貴重なお話を伺えるものと思っています。

今日は少子化という傾向の中で、その結婚観、単なる傾向だけではなくて、実際にどういうビヘイビアをしているか、あるいはこれからどうなっていくのかなど、今日は忌憚のない議論をさせていただきたいと思います。こちらで少し危ない話も持ってきたのですが、あとで協議させていただきます（笑）。これはラジオ放送していませんから大丈夫です。

今日は 6 つぐらいの簡単なお話ということで、紙を用意してきたのですが、こんなことが議論のきっかけになればと思っています。

6 - 2 最近の結婚観をどうみるか。

（長谷川） では犬田先生、ラジオというか新聞で人生相談をずっとされていたとお伺いしましたが、最近の結婚観というのは、先生の目からご覧になってどうお感じになっていきますか。

（犬田） いきなり古い話になりますが、これは枕だと思ってください。「人生案内」という、読売新聞のコラムを数年書いていたときに出てきた話です。今日のテーマと関係があるのは、こういうケースです。

男の方からの相談だったのですが、その人は一人っ子で、彼女というのも一人っ子なのです。一人っ子と一人っ子の恋愛、結婚という問題なのです。これはまさに少子化時代の問題の 1 つです。結婚すると片方の家名が絶えるというわけです。特に、女性の方の家が反対している。男の方にお嫁さんが来るというのが普通なわけです。そうすると、女性の方の方が後継ぎがいなくなってしまうので困るといって親が反対している。どうしたらいいのだろうかというご相談なのです。



僕はこの問題について、かなりいい加減な回答をしました。とにかく確率的に決めましょう。男の方にいくか女の方にいくか、何回かじゃんけんをして決める。それからもう1つ、結婚したら、一生懸命励んでたくさん子どもをつくる。それで家名の絶えた方に子どもを戻してやる。これは犬や猫じゃないですから、本当はそんなことをしてはいけないのですが、もう少し家名というのは大切にしないではいけないのしょうけれど、そんな回答をしたわけです。

ただ、この回答には、あとで考えるとまちがいがありました。つまり、80年代は少子化時代にもう入っていたわけですから、結婚して子どもが2人以上産まれるかどうかは保障の限りではないのです。ですから2人産まれれば1人ずつ配給して家名がつながりますけれども、つながらないこともありうるわけです。それで、そこでもくじ引きをするということにすると、どんどんくじ引きになってしまう。家族の構成というのが確率論的になるというのもこれまた変な状況ですが、こういうことが現実にあられるのは80年代の初めくらいからだと思います。

今、合計特殊出生率が1.35くらいになっていますが、これは10家族のうち、6ないし7家族は一人っ子家族だという未来を暗示しています。10ないし20年後の一人っ子同士の恋愛、結婚というのは、かなりの確率、全体の4割ぐらいになります。今の銀行の利子率ぐらいであればあまり対応しなくてもいいのしょうけれど、これほどになるとやはり制度的に対応しておく必要があるというような感じがします。

今までの家族制度というのは、法律的にも再検討しておかないと、結婚難ということが変なところから出てくるといった感じがします。

統計数理研究所が長い間研究している「国民性調査」のなかに、実の子どもがいないときに、「他人の子どもを養子にするか」という質問があります。「他人の子どもをもらってまで家名をつながなくてもよろしい」「意味がない」という答えが、1953年には16%でした。やはり「継がせる」というのが圧倒的だったわけです。それがだんだんと変わってきてまして、1983年には51%と半数を超え、1988年にはなりまして、52%が「継がせない」「意味がない」という答えになってきたのです。ですから、今はもう他人の子どもをもらってまで家名をつなぐということはなくなってきてしまっているのです。

このように、家族制度というのは、意識のうえでもかなり崩れてはきているのです。

男女別姓というのが今問題になっていますけれども、この男女別姓は急にはなかなか難しいと思いますが、こういう「継がせる」「継がせない」は、法律で決まっているわけではありませんけれども、そっちの方はかなり変わってきて

いると思います。家族制度は、法律的にどんどん変えていく必要があるし、実際に必要が出てきているのではないかという感じがします。

（長谷川） ありがとうございます。では松村さん、犬田先生が今家族制度という視点からお話をされて、最近の別姓の問題にも触れられましたが、少しまた切り口を変えていただいて結構ですが、最近の結婚観についてお話をお願いします。

（松村） 戦後から結婚観の変遷といいますか、戦前までは、見合い結婚が主流で、戦後になってだんだん恋愛結婚というものに移ってきたわけですけど、その中で、男性もそうでしょうが、特に女性の望む結婚というのが、女性のウーマンリブのような話や社会進出などの話の中で、見合い結婚から恋愛結婚に移っていきました。要するに、「見合いでは嫌だ」ということです。自分で選びたい、選択する権利があるのだということです。一つの論点として、結婚相手は自ら選択するものであるということだと思うのです。

もう1つ別の見方をすると、自分はそれだけ魅力があって、男性を惹きつけるだけの魅力がある、能力があるのだということです。ですから、恋愛結婚したいというのは、「私は魅力的である」ということを言っているわけです。「見合い結婚です」というと、「自分には魅力がないから結婚相手が見つかりませんでした。世話してもらって見つけました。」ということになってしまい、どんどん見合い結婚から恋愛結婚に移ってきたと思うのです。

恋愛結婚をするためには、結婚相手を見つけなければなりませんが、見合いで結婚することが一般的であった日本社会で結婚相手を見つけることは容易ではなかったわけです。結婚相手を見つける恋愛市場が未成熟であったと言っていいと思います。

そこで、現実には職場が恋愛市場となって他にはあまりない状況だったと思います。したがって、女性は、よい短大や女子大を出て、一流企業に就職して、いい相手を見つけることになります。彼女達は、専業主婦になって田園都市線に戸建ての住宅を求め、専業主婦で優雅な暮らしをする。こうした結婚生活までのレールが恋愛結婚の意味となりましたから、みんなが恋愛結婚を望んだわけです。

しかし、よく考えてみると、恋愛というレッテルをずっと追いかけて、今までできたのだと思います。恋愛結婚というレッテルを手に入れば幸せになれると思っていましたが、どうもそうでない。結婚後の生活は旦那の帰りは毎晩遅い。子供も学習塾で忙しい。家でひとり家事に追われている主婦の姿に気がつ

いたわけですよ。

今はレッテルを求めるだけではなくて、何かそのプロセスが、もう少し言ってしまうと、恋愛イコール結婚だったものを切り離して、恋愛を楽しむ、あるいは恋愛という結婚までのプロセスを楽しむことを望むようになってきていると思います。

最近の女性の晩婚化は、女性の経済力が高まり、結婚しなくても生活できるようになったためと言われています。つまり、結婚するという結果だけが人生の目的でなくなったということです。結果よりも、良い相手をじっくり探し、吟味し、時にはロマンティックなデートを楽しみたい、あるいは付き合った彼（彼女）の数を自慢気に話したい、と思うようになりました。これらはみな恋愛結婚までのプロセスを重視するようになってきている現れでしょう。

今、ツヴァイやキューピッドなど会員制の結婚情報サービスがはやっていますが、あれは基本的には見合いですから、そういう意味では、職場でないところに恋愛市場をどうやって作るのか、恋愛のプロセスをどう楽しめるようにするかということが、これからキーになっていくと思います。

たぶん、今後、都市の中にそうしたものがだんだん出てくるのではないかと考えています。いままで、合コンなどで相手を見つけていましたが、そうではなくて、もう少しバーやカフェやレストランなどで、自由に声をかけられるような単純なのだけでも、人間と人間をつなぐという本来の街の仕組みがもう少し意識されるようになるように思いますし、そうしていかなければならないと思います。そういう都市型の恋愛市場がどんどんできてこないといけないですし、結果的にできるのかなという感じがしています。

（長谷川） 今、大学で若い世代が学んでいると思いますが、彼らを見て何か最近感じることはありますか。

（松村） 直接話したことはあまりないですけども、ただ何人かの学生と、結果的にこういう結婚の話になったときに、彼らは、男性もそうですけれど、特に、女性の方が結婚したい、子どももほしいと言います。女性に産まれた以上、子どもを産みたいと、みんな言っています。それは、職場で働いて子育てをすることがすごく大変だということを認識していないからなのかもしれません、理想としては、みんな子どもがほしいと言っています。ですから、そのギャップ、本質的には子どもが育てられない環境の方に問題があるのかなという気がします。

（長谷川） 少子化の理由については、いろいろな調査があるけれども、1つは晩婚化が進んでいるということがあります。もう1つは、結婚しても子どもを持ちたがらない人が増えてきているという話ですけれども、次の予備軍は、結婚して子どもを持ちたいという気持ちは、一応あるわけですね。

（松村） 非常に今、新しい専業主婦というのが出ています。例えばすてきな専業主婦、ステ専と言っていますが、20代後半から30代前半の主婦に流行っています。30代後半から40代前半のキャリアウーマン志向と違って、そんなに無理して働かなくてもいい。むしろ趣味や習い事、友達との遊びなどに自分の時間を使うという志向です。彼女達は、子育てのために、親やベビーシッターなど上手に利用して時間をうまく使っています。

またスローライフという、ワーカーホリックではなくて、時間に追われない、自分らしいライフスタイルが注目されていますから、今後は必ずしも今のキャリア型でないライフスタイルになっていくようにも思います。うちの学生は、サラリーマンとして働くのではなく、家で子育てをしながらSOHOで働きたいと言っています。

（長谷川） 小山田さん、どうですか。ヒアリング調査や周りの若い世代をみて、どんなことを思われていますか。

（小山田） 少子化や晩婚化が進んでいるのは確かなのだけれども、単純に、結婚をしたくないと思っている人が増えているわけでもなさそうですね。「結婚したい願望」というのは、特に女性には、ほぼといっていいほどあるのではないかなと思います。九十%が結婚したいと思っているというデータもありました。

また、小学校から職場に勤めている方までの年齢別に、「結婚に関してどう思っているか」という質問では、「結婚したい願望」が一番ピークにくるのが、短大生です。圧倒的に結婚に関しての意識と願望が高いという結果です。4大卒がガクンと落ちるのですが、そういう傾向は確かに感じられますよね。結婚はしたいと思っているのだけれども、結婚できない理由もあるのだろうなという気がします。

それから、何件かヒアリングをしているうちに感じましたのは、今、松村先生が言われた「恋愛」という言葉についてです。私が思う恋愛という概念と、今の20代の人たちの言っている恋愛というのは、かなり定義が違ってくるように思います。彼らの「結婚したい」と言っている中でいう恋愛、恋をするという中身

は、どちらかというと「一緒にいてほっとする」「楽しい」などを指しています。今までの結婚というのは、「生計を立てる」など、実生活系というか何かをかたちにするようなものでした。「家を継ぐ」ということもあるかもしれませんが。それから「子どもをつくる」。戦時中は「産めよ増やせよ」というようなこともありましたが、今は、実生活系ではなくて、どちらかというと、言葉は少し当てはまりませんが、癒し系というか、一緒にいて心地よい関係という結婚観が非常にあるのではないかと思います。

かといって、結婚ということをあまり真剣に考えていないかということ、そうでもないです。例えば、質問をいろいろ聞いている中で、自分たちのお墓についての話題がでました。あたりまえですが、結婚というめでたいスタートとは反対側に、最終の果てには、二人の死があります。その死を迎えるときに、どういうことを気にするかです。これまでの一般的な結婚生活では、子どもを数人つくって核家族を形成し、また、おじいちゃんおばあちゃんのいる大家族もいて、近所づき合いもあった。そういう中で死を迎えるときに、自分はどんな準備をしなければいけないかということのをそれなりに考えていたわけですが、彼らの感覚はちょっと違います。去年の「ターミネーション」(「高齢化社会におけるターミネーションに関する研究」2001年5月)のお話に少し興味が重なるなと思ったのですが、二人で入るお墓の場所、また宇宙葬や、海が好きだったら海になど、そういうことを考えていることにびっくりしました。「若いのにそんなことを2人で話すの?」という個人的にはおどろきがありました。

ですから、結婚を考えるときに、私もそうでしたけれども、ある年齢になれば、親のことや家のことを考えて、変ないい方をすればバランスを取るという言葉かもしれませんが、ある時期にいろいろ考えた上で決断をして結婚をするわけです。しかし、彼らは常に何か心地よい相手や生活を求めて、職もやめない、遊びもやめない、子どももほしいけれども、すべてを捨てるわけではないという生活を求めて、究極はお墓のことまで考えている。明るく考えれば、そのあたりに少し未来はあるかなという感じもするし、それが何か歯止めがきいていないという感じもします。私がヒアリングした相手は、若い人たちが中心でしたが、今後既婚者にも聞いてみたいですね。その中には子どもをつくりたいのだけれどもつくれないという人たちも多いです。そういう人たちは、結婚観の中で子どもの比重が大変大きいですよ。子どもに託す、もしくは子どもがいることを前提とした自分たち2人の未来を強くイメージしているように見えます。若い人たちの結婚、恋愛、出産の概念とは非常に違って、そこはもう少し整理してみたい課題だなということがありました。

(犬田) 『論争・少子化日本』(川本敏編、中公新書ラクレ)という本の中で一つ、非常におもしろかったのは、岩澤美帆さんの『結婚しない恋人たち』という章です。若い人にとっては結婚している・していないという二分法よりは、親密な相手がいる・いないという方が非常に重要だということです。結婚するかどうかということは別の次元で、こちらの方が重要な軸になってきているということです。ここが古い世代と新しい世代の明確な違いなのかなと思います。

親密な相手がいる・いないということと、それから現実に同居しているかどうかということのクロスをとると、4 パターンが出てくるわけです。その中で、まだ結婚していない「非婚」、それから「非同居型」の数がかなり増えてきているそうです。ここでセックスの関係があるカップルについては、つよい制限条件が日本では付きます。婚外子というのに、非常に日本はきついのです。婚外子というのは、日本では今大体1%ぐらいだそうです。ですから、この婚外子を産まないように恋愛しなければいけないし、親密な関係を維持しなくてはいけない。これが若い人にとっては、かなり大変なことです。

テクノロジーがありますから、きちんとやればそれは成り立つわけですが、なかなかこれは面倒くさいものです。これが非婚・非同居の時期を長びかせ、これが子どもを少なくしているのではないかということがあります。これは非常におもしろいと思うのです。

こうして、どうしても結婚する時期が遅れるわけです。それで、初婚年齢は、東京では、男性は30歳で女性は27.9歳、ほぼ28歳です。30歳と28歳で結婚するというのが、東京では一番多いわけです。全国で見ると、男性が28.7歳、ほぼ29歳、それから女性が26.7歳ですからほぼ27歳、28歳と27歳のカップルというのが非常に多いということになります。これは、昔と比べてかなり遅れています。これが1つは子どもを産む時期、時間というのを減らしてしまう。出産は大体30半ばまでですから、数年しかないということになるわけです。それでなかなか子どもが産まれないということで、合計特殊出生率が1.34や1.35ということになってしまう。これが一つの少子化の理由ではないでしょうか。

それから、「できちゃった婚」というのが、90年代では結婚している人の大体25%ぐらいになるそうです。カップルの約25%ができちゃった婚であるということです。昔どれぐらいだったかというのは、なかなかデータがないのですが、やはり25%というのは高い。

話が飛びますけれども、少子化を阻止しよう、子どもを増やそうということになると、婚外子を認めたり、あるいは「できちゃった婚」を推奨するわけではないですが、許容するということがないとだめだということです。

それからもう1つ、以前ある研究プロジェクトで、いろいろなヒアリングを

したことがあります。人口論についての議論では、こういうことがありました。今は、結婚するのが遅いということと、それからもう1つは、昔は結婚するとすぐに子どもが産まれるわけです。「3年子無きは去れ」といわれて、大体1~2年でできないと離婚されてしまうというのが昔はあったのですけれども、今はそんなことは全然ない。かなり長い、3~4年ほどの、かなり長い間、夫婦だけのセックスを楽しむ期間というのがあるというわけです。つまり結婚が遅れて、そのあとにセックスを楽しむ時期がかなり長くありますから、そうするともう子どもを産んでいる暇がないのです（笑）。それで必然的に少子化になってしまう。



一般的に言われているのは、結婚することの経済的なメリットがあまりないということで子どもを産まない。それもあると思うのですが、あと1つは、男がなかなか女性の仕事を助けない、家事を助けない。女性の方が家事を全部背負わなければいけないから、子どもを持つというのは非常に大変だという理由です。これは、男女共同参画をキーワードにした議論で、政府の公式的な意見になっているわけです。それからもう1つ有名なのは、パラサイトシングルの子だという意見で、要するに、男も女も親のところでぬくぬくと生活しているという人が増えた。ですから、なかなか結婚しないし、したがって子どもを産まない。婚外子もつくりませんから、そういうことで全体的に子どもが減っている。どうもこのパラサイトシングル論というのは、話としては非常におもしろいけれど、データの的にはなかなか立証困難なようです。

それから、この男女共同参画論というのは、政策的なレベルではおもしろいのですが、これもどれほど実態を説明できるか、少し心もとないです。

ただ、この3つの議論、つまりメリット論、男女共同参画論、それにパラサイト論の3つは、それぞれ一部は説明していると思うのですが、それからさらにその深層にあるのは、先程言った、セックスを楽しむ期間の存在と延長という、これがかなり大きいのではないかと思います。それから、岩澤美帆さんの言っている親密な関係論です。それが結婚を遅らせているのだと思います。これらがあって、総体として結婚観も、恋愛観も、それから生活スタイルも違ってきてしまって、それが全体的に少子化をもたらしたということで、少子化というのはかなり根の深い問題なわけです。

それから、社会学者の富永健一さんの「家族の失敗」論という議論があります。ただ、彼のは全然別のレベルの議論で、国家の失敗、市場の失敗、それらのアナロジーでの「家族の失敗」論ということで、主に福祉問題を彼は扱っているのですが、家族というのがうまく機能しなくなっているということを彼は指摘しています。

それから、先程、松村さんが言われていたのは、この家族の失敗を、市場の方でカバーしてしまおう、市場価値をそれぞれ男にも女にも付けて、それで結婚のチャンスを増やそうということで、つまり家族の中に市場が多分に今入ってきたわけです。しかし家族という社会集団と市場というのはかなり性質が違いますから、それでなかなかうまくいかない。

6-3 若い世代の結婚後のライフスタイルは

（長谷川） 今は結婚したあと、若い世代で共働きが一般的になってきています。そうすると、松村さん、どうでしょう、若い世代というか、その結婚したあとのライフスタイル、結婚形態論というものが先程ありましたが、犬田先生もおっしゃったように、一般論で、若い人が結婚したという状態で考えていった場合に、どういうライフスタイルへの願望があるのか。小山田さんの説明などでも、「墓場まで」などという議論もありましたが、だいぶそれも変わってきています。僕らやもっと上の世代だと、男性と女性では「だんなさんを立てる」というような考え方が、価値観としてあります。やはり何となく、男性の方、お父さんの方が優位に立っている。

今のこの世代というのは、結婚したあと、どういう結婚のライフスタイルを理想としているのですかね。何か感じることはありますか。

（松村） まず結婚イコール子育てというような、子どもを持つという議論と、それから結婚して子どもを持たないという議論で、かなり違ってくると思うのです。

少し違う話からしたいと思います。まず子育てということが、すごく女性にとって大変ですし、彼らも結婚後のライフスタイルでも描ききれなくて、子どもはほしいのだけれども家事をする、育児をするということのイメージがつかれない。

（長谷川） やってみなければ、わからない（笑）

（松村） やってみて大変だということになって、はじめてよくわかるのだと思います。結婚前にイメージできないがために、子どもをつくらない、結婚しないという面もあると思います。しかし、もっと進めて、結局育児という仕事を家の中に持ち込まないという話があるのではないかなと思います。育児そのものをアウトソーシングしていくような考え方です。

子どもはほしいけれども、家に帰ってきたときには、育児をしたいとは思わない。家に帰れば子供の顔を見たいし、家庭には安らぎを求めたい。これが男性の発想ではないですか。しかし、それはたぶん女性もあるのではないかなと思うのです。今の日本社会では、子育ては男性の仕事ではなくて、女性の仕事であるという意識が強い。だから、女性は、「子供はほしいのだけれども、育てるのは女性でしょう」というのがある。女性も、実は、子どもの顔を見て、男性と同じような家族の安らぎや、家族愛のようなものを求めているのだと思います。ですから、子育てを男性と女性との協働作業にする方向もありますが、女性は家事から育児を分離するのではないかと考えられます。育児はもう誰も家庭ではしないのです。

つまり、育児というものを家庭から外へ出すということです。保育園に預けたり、ベビーシッターに預けるとするのは、今のところ自分ができないから、消極的に仕方なしに預けていますけれども、そうではなくて積極的に、それはお願いするものであって、勤めから帰ってきたときに、ベビーシッターなり保育園が家に子どもを送ってくれる、あるいは迎えに行く。そして男性も女性も、子どもと一緒に夜の時間を過ごし家族というものを味わって、また朝預けてしまう。そういう育児のアウトソーシングがこれからのライフスタイルを大きく決めていくような気がします。

育児のアウトソーシングはさらに進んで、週末にだけ家に帰ってくるという週に1回のスタイルもあるかもしれません。言ってみれば寄宿制で、小学校が

らでなく、幼稚園からでもなく、0歳児から寄宿舎に預けてしまう、寄宿教育の低年齢化がどんどん進むかもしれません。

結婚と育児を切り離してしまえば、育児が大変だから結婚しないとか、子供を作らないというような話がなくなります。もう少し気楽に結婚できるようになると思いますし、このような家事と育児を分けてしまうライフスタイルが広がっていくのではないかと思います。もっと細かい話はたくさんあると思うのですが、ライフスタイルを決める重要な点だと思います。

（犬田） 松村さんが今おっしゃったようなライフスタイルは、団塊世代のものとあとの世代から始まっている。つまり、女性が社会進出しているということとからみ合っているのではないかと思います。そういう世代の人にとっては、子どもはつまりマイナスの資産、不良資産なのです（笑）。僕の世代だと、まだ子どもというのは、子宝なのです。子宝という言葉が、死語でなかったのです。それが、今の若い人にとっては、特に、女性が職業を持つようになったら、子どもは一期間ですけれども不良資産なのです。それがまた大学を出てしまうと、資産に突然変わってくるのです。

それからもう1つは、今一人っ子や少子の状態ですから、結婚するときに親から受け継ぐ資産というのは、かなりあるのです。我々の世代だと4人、5人子どもがいますから、大体長男に資産はいくので、下の人には資産はこない。親が死んでも遺産相続というのはあまり下の方は主張しないし、ほとんど資産はこないわけです。しかし、今は1人か2人ですから、まだ具体的に資産、金のかたちで自分の懐には入っていない人も、いずれ親が死んだら全部その資産が入りますから、かなり金持ちの状態になります。

これはマーケティング的には、非常におもしろいことだと思うのです。特に、90年代、92～93年の段階は、親から引き継ぐ資産の額というのがかなりあるということを、大学生でも知っていました。僕のゼミの学生にも、地方の化粧品のお店を継ぐ息子がいて、一人っ子なのです。資産は全部自分のところへ入ると言っていました。

（長谷川） まさに実践しているわけですね（笑）。

（犬田） そういうことをもう意識しているのです。なるほど、言われてみるとそうだなと、感心したのですけれど。

ただ、今の若い人というのは、特に90年代の株と土地の値上がりを若いころに経験した世代というのは、かなり勘定高くそういうものを見ているのではな

いでしょうか。ですから、デフレの今の時代だと、また別の経験を若い連中はしているのでしょうけれど、そういうインフレ時代に育った連中の心性、心根というのは、ずっとあとまで引っぱります。まだあと10年ぐらいはそういう人たちがいますから、インフレ、デフレ市民の相克のようなことがあると思います。

基本的に子どもというのは、一時期不良資産であって、また再び資産になるという解釈ができる、今はそういう時代なのではないでしょうか。

（長谷川） 子どもを持ちたいけれども、子育てが大変だ。ある意味では不良資産だということですね。最近、社会問題としても、親がパチンコ屋で遊びほうけていて、子どもを車の中へ入れておいたら亡くなったとか、昔はそういうことはなかったと思うのですが、社会問題として、産んでおきながら、ちゃんと責任を持って育てないという親も増えてきています。そうした傾向も呼応しているのかもしれませんが。

（犬田） 不良資産ですから、気にしない。

（小山田） 今、子どものことに関して、デンマークのデータがあります。先程のお話では、婚外子が1%と少なかったですね。デンマークは46.8%。半分は婚外子だということで、これはすごいです。

（犬田） それで人口が増えてきたのですね。

（長谷川） そうなんですよ。

（小山田） デンマークでは、まず18歳から19歳で親の元を完全に離れる社会的仕組みの中で育ちます。すると、その前から、自分の人生設計をする教育を受ける。結局、今、パラサイトシングルが多いということもありましたけれども、向こうはやはりそれなりに、部屋を出たり、家を出て、独立するわけです。その中で、きちっと男性も女性もものを考える。

ここで違いを感じるのは結婚と育児は別ということです。自分の人生、自分と子どもという関係で物事を考えている。恋人の、2人の中に産まれた子どもという概念ではなくて、最初から自分と自分の子どもという概念なので、その相手がだれであろうとかまわない。日本の文化とは少し違うところがあります。女性の社会進出は、デンマークも日本も同じように伸びています。比率的には

大体同じぐらい伸びていると思いますけれども、出生率はデンマークは伸びています。それは先程おっしゃった婚外子を認める社会の違いという感じはしました。

（犬田） そちらでは、プラスの資産なのですね。

（小山田） そうかもしれません。プラスの資産なのですね。確かに北欧三国というのは、よく「ゆりかごから墓場まで」というように、社会福祉がしっかりしていますし、その中で自分の子どもや、自分の一生の生活設計が、何か日本よりはきちんとできているのかなという感じは受けました。

（長谷川） デンマークも一時下がったのだけれども、今いったような政策を取って、先進国の中で上がりだしてきた国の1つなわけですね。

（小山田） 半分近く婚外子というのは、やはりすごい数字です。日本文化では、ちょっと信じられないです。

（長谷川） これもまた信じられない数字だなと思います。

小山田先生、今後の傾向として変わってくるのでしょうか。戦前は嫡子とはやはり何となく違う目で見られていましたよね。

（小山田） そうですね。日本はなかなかこのところが変わらないですね。

（長谷川） 当分変わりそうにないですか。

（小山田） 戦後50年たっても、婚外子に対する偏見というのはまだまだ非常に強いと思います。難しい問題だと思います。

（長谷川） 法律的に、例えば、遺産があったときなど、権利としては弱くなるのですか。少し調べてみないとわからないのですが。

「僕の自分の子ども」とどこかに書いておけば、半分の権利になるわけですか。デンマークなどは、そのあたりはきっと同じなのでしょうね。

（小山田） それぞれの関係をどの程度認知しているかという問題がありますよね。いずれきちっとしなければならない問題です。

（犬田） 権利平等にまずしないと、婚外子是不会出ないですね。

（小山田） そうですね。

（犬田） 婚外子には、かなり天才がいますよ。レオナルド・ダ・ビンチは婚外子です。

それからマルクスも婚外子を残しているのです。不倫をして家族外に一人子どもを残しているのですね。有名な人で、結構そういう人もいるのではないですかね。

（小山田） 不倫を勧めるときには、いい題材ですね（笑）。

（犬田） 有名人で、結婚していないのだけれども子孫がいるという人がいるのです。ですから、そういうのはみんな婚外子のところでその人のDNAがつながっているのですね。

（長谷川） 日本でも、蓮如が何かはそうですね。

（犬田） ああ、そうですか。

（長谷川） やはり8~9人くらい奥さんを変えています。ですから婚外子とは少し違うかもしれないけれども、同時に2人いたのかもしれないけれど、五木寛之の本に書いてあります。

小山田さんがいろいろ調査されて、たまたまそういう話も出たのだけれど、結婚後のライフスタイルというのは、先程も少し触れられましたが、どんなふうに彼らは思っているのでしょうか。友達の関係でありたいとか。

（小山田） そうですね、こちらのハイレイフ研究所で出版された「^{とちだち}共立夫婦」（2001年9月 日科技連出版社）は、まさにあのとおり、あそこに書かれていることが確かに現実化しているなという印象は強く感じました。

ライフスタイルでいうと、とにかく2人とも、どちらかが家にいるということがあまりない人たちかなと思います。どちらも固定の仕事に就くというよりは、何か自分の感覚に合った、それはアルバイトでもいいし、ボランティアでもいいし、サラリーマン化して働くのもいいのですけれども、ある何か自分の

感覚に合うもので、お互い何か社会に出ていくということはまず捨てたくないと思っている。

その中で、「子どもがほしい組」と「ほしくない組」がいて、ほしい組は、「女性だけ子育てというのは嫌よ。あなたも手伝ってね」と言える。また一方では2人の時間が非常にほしい、先程のセックスの時間が長くなっているというのはまさにそうかもしれませんが、今は結婚しなくても平気でセックスをしています。それはべつに悪いことではなくて、一つのライフスタイルとっていいのか、彼らは恋人というより気の合う友達とべつにセックスをしてはいけないという概念はない。それもコミュニケーションの一つだし、それはお互い精神的に心地よい行為だし、24時間化していてそのことによる生活時間の問題も全く関係ない。家に帰らなくてもあまり問題ではない。そのカップルの家があまり干渉しないというのもあるかもしれません。生活、家と食事は何とか家族で一緒にやれていて、それ以外のことは自分が働いたお金も自分の時間も全部自分のもの。そうした環境の中で気のあう部分はお互いカップルであることを続けたい。でも、ずっとこのままでは嫌だというわけです。2人で独立したいとも思っているけれども、結婚してライフスタイルが変わるよりは、何かその心地よいことは維持し続けたい。この人たちは、何かそのあたりの欲求がすごく強いのだなと思います。あきらめたくないのです。今までは、どちらかが何かをあきらめていたような気がするのです。特に女性はそうだったかもしれませんが、がまんが美德というところもあったかもしれませんが、今は譲らない。



でも、そのことが非常にいいコミュニケーション、いい関係になっている。お互い何でも「嫌だよ」や、「これ、あんたがやってよ」と平気で言うその関係性を、恋人や、あるいは結婚していても維持したい。あまり縛られたくないということかもしれませんが、ストレートな感情表現も強い人たちだなという感じがします。

6 - 4 多様化する結婚形態

（長谷川） 先程、墓場までという話もあったのですが、逆にいうと嫌だったらいつでもまたバラバラになったりできる。それについてはどうですか。

（小山田） そうですね。今回ヒアリングしたカップルは、たまたま関係が続いている方でしょうけれども、話の端々には、いつどうなってもいいというような、あまり気が合わないのだったらべつに縛られたくないわという感じも受けました。結婚という概念もそういうことになっているのかなと思います。法律的に結婚してしまうと、家のことや人の目を気にして離婚しないというのが強かったかもしれませんが、今はべつに別れた相手と変な気まずい関係にあるわけでもなく、単なるお友達になってしまえるところもある。二度と会いたくないというケースも多いでしょうけれども、以外と緩い感じの離婚関係も存在しているように思えました。

（犬田） そういう軽い関係だと、家族がもたない、社会がもたないと言う人がいます。ところが、文化人類学の原ひろ子さんは、長年エスキモーの研究をしている方ですが、エスキモーは、我々の目からいうと自由に結婚したり離婚したりしているらしいのです。たとえば、相手のしぐさが気に入らないというだけで、ポツと出ていってしまいうらしいです。それでどんどん入れ替わっているのです。

彼女によると、あそこは自然が非常に厳しくて、年中変わりますから、物事が一定であるというような考えがあまりないらしい。状況というのは年中変わるのだ、変化することがあたりまえなのだというふうに考えているから、人の気持ちもうつろいやすく、人間がだれとだれと一緒にいるというのも、そんなにいつまでも一緒にいなければいけないという、そういう考え方がないと言うのです。それから相手に対して批判がましいことをいうということが非常に嫌われる社会らしい。そんなことがいろいろ重なって、非常に自由に行き来する社会になっている。そういう意味で、これは一つのモデルになるのかな、我々のがんじがらめの社会の一部を、もっとエスキモー化する必要があるというように僕は思ったことがあるのです。

（長谷川） そういう意味では、今の先生のお話というのは、一種の結婚形態だと思うのですが、若い次の世代は、だんだん年齢差が短くなってきています。

例えば、大学のときの友達同士で、先輩後輩というのも若干あるけれども、わりと同年齢になってきていますね。今までは5歳や、ある種の差というのがあったのだけれども、それが一方では縮まってきている。

逆の意味で先程少し言ったように、これは珍しいがゆえに、報道されたりして目につくのかもしれないけれども、年齢差が離れていく現象も同時に広がっているというのでしょうか。

（小山田）　ここ5年ぐらいの間、私の友人で結婚したカップルはみんな干支がひとまわり以上離れています。4組はかみさんの方が若い。1組はかみさんの方が上で逆のパターンですけど。

（犬田）　戦前の家制度では、そういういろいろな格差を生み出すファクターを家の中に持ち込むことによって、封建的秩序をつくっていた。ですから、家門や家柄でも、ある程度は格差があった方がいいわけです。どの家とどの家は結婚できるけれど、これはできないなどということがあった。門地・家門というか、何かそういうものが格差をつくり出して、その格差の上に秩序をつくっていた。ですから、かつての夫婦の年齢差というのもそれです。大体10歳ぐらい違うのがいい。ですから、決定的に女性は弱いわけです。妻には社会的経験もついていないし、それから10歳も違っていれば当然夫に従わざるをえない。そういう格差を固定することによって秩序をつくっていたのです。

ところが、今の社会というのは、そんなものは通用しませんから、もっと別のことでそれなりの秩序をつくらなければいけない。ですから先程も松村さんが言っていたように、要するにもてるとかもてないとか、親密に感じられる、感じられないということで結婚を維持して、ある種の、昔とは違う秩序をつくっていくという必要性ができてきたのでしょうか。

（松村）　昔は大家族というか、いわゆる今でいう3世代のようなものがあつた。姑、だんな、嫁という、この構図を維持するためには年齢差が必要だったし。

（犬田）　そうですね。むかしは男尊女卑も必要だったわけですね。

（松村）　今はもうそれが全部崩壊していますから（笑）。血縁関係や、配偶者関係というのは、家族をすごく縛っていますけれども、そういうものが今何もなくなくなってしまったので、家族というものはあまり求めなくなって、どちらか

という同居関係しか求めていないそうです。同居関係というのは、別の言葉で言うと、家庭ということです。要するに、家庭というのは同居、一緒に生活しているところですから、家族というのは何か崩れつつあって、家庭の関係だけが何か新しい形を模索している、そういうときではないかなと思います。

(犬田) 天皇家がいま困っているのはそれでしょう。男尊女卑ですから、あそこの社会は(笑)ですから、男が産まれないのは大変なことであるわけです。

(小山田) 家族と家庭というものには大きな社会性がひそんでいますね。

(松村) 家族がみんな家庭に移っているような。

(小山田) この間、オーストラリアに行ったときもそうでしたけれども、社会人の男と女と一緒にアパートに住むのだけれども、決して恋人同士でもなく、単に居住空間をシェアする相手がいるのです。テレビでみても、そういうのが非常に多いなと思いました。

(松村) そのために、年齢も近づいてくるのですよね。

(小山田) そうですね。

(長谷川) 国際結婚などというのも、どうなのでしょう。そういうのはあまり珍しくなくなっているのでしょうか。

(事務局) たまたま先日の「朝日新聞」で、全国では22組に1組ですが、都区部では10組に1組、大阪では12組に1組。次に多いのは山形県で、14組に1組ですから、すごいです。

(犬田) この国際結婚というのは戦前もそうですけれども、ハイステータスの連中が国際結婚すると同時に、いまは労働者階層にも多いのです。

(事務局) 妻が外国人で、夫が日本人が約8割です。

(犬田) ああ、そうですね。

（事務局） 相手としては中国人が一番多くて、次はフィリピン、韓国の順です。

（犬田） 日本でも、ハイスタータスな外交官というのは結構外国人と結婚しているのですよね。社会の一番上の層と一番下の層で国際結婚が多い。これはおそらく国際的にそうなっているのではないのでしょうか。

（長谷川） 日本のみならずということですね。

（犬田） 大体ヨーロッパでは、王というのは王室同士が結婚するので、今のイギリスも、ギリシャから来ている。少し前ではドイツの人がイギリス王室に入ってくるわけです。ロシアの皇帝のところでも、ずいぶんドイツの女の人がきています。そういう国際社会をつくっているのです。

国際結婚というのは、今後おもしろいテーマですね。

（長谷川） そうですね。日本だって戦争のときに満州の問題がありましたが、そういう上層部のようなところや、それから農村部の問題などがありますね。

（小山田） 国際結婚に関しては、ＪＡや、農村のホームページには大変多く登場してきます。ほとんどそうだといいいいほど、それに関連した記事があります。それだけ深刻なのですね。ライオンズクラブなどの会合の記録や、特にＪＡさんの会合の記録には必ず結婚問題が出てきて、真剣に論議しているのです。議事録もあるわけですがけれども、本当に真剣です。

みんなで軍団を組んで向こうに行ってみたり、いろいろ交流の機会をつくって見合いをやっているのです。

（松村） 漁業というのは、あまり問題にならないのですかね。

（小山田） 確かに、漁業組合ではあまりそういう話題を聞いたことがないですね。

（松村） 農村は離れられないからね。漁業は離れたりできる。漁業は遠洋漁業でつかまえておく（笑）。

（長谷川） 土地に縛られているという感じがしますね。

6 - 5 社会的規範はどうなるのか

（長谷川） 次に社会規範について議論してみましょう。2人が生活する以上結婚という形態をとるか、そうではないかということだけでも、やはり先程の犬田先生の話で出たエスキモーのようなものもあるかもしれないけれども、結婚した以上は、ほかの友達とはなるべくつき合わないとか非常に排他的で、2人の世界に浸っていくことを非常に重視していく。そのかわりいわゆる今の言葉で言うと、浮気や不倫になったときにはもう破局になるのか、意外とそういうのも認め合うようなかたちになっているのか。そのあたりの社会規範は、どのようになっているのでしょうか。

（犬田） 1つは、子どもを資産と考えるかどうかです。資産として子どもを持つということになると、やはり排他的にしないと、いろいろな問題が出てきてしまう。しかし、子どもを持たないという主義にしてみると、かなり自由になるわけです。

つまり、サルトルはそうだったのです。ボーボワールとの間は契約結婚だし、子どもをつくらなかった。サルトルは、年中浮気をしていたらしいです（笑）。かなりじいさんになるまで、若い女の子を招き入れてはボーボワールを年中怒らせていたらしい。サルトルは、非常に用心深い人なのか、現なまで大体 100万円をいつもポケットに入れていたというのです。それで女の子にポンポンお小遣いをやる。サルトルというのは、不道德的な男だったのです（笑）。子どもを持たないとなると、そういう意味での自由性が出てきますよね。

（松村） よく女性の男性化と言います。やはり僕は、女性が子どもに対して我々と同じような感覚を持っていて、「育児なんてやってられないや」というようなことを女性も思っているとすると、浮気やなんだかんだというもの、昔は男性の話だったのですけれど、今まで表に出てこなかっただけで、女性にもそういう願望が当然あるわけです。ですから、そういう意味では自由にそういうことができるような社会になるのではないかなという気がします。

少なくとも最近では、食事ぐらいするのは何でもないです。結婚していない別の男性とホテルで2人で食事をして構わないというのは一般的です。特に問題はない。なぜ問題なくなってきたのかというと、女性もそういうことを望んでいる。今までは家庭にしかいなかったから、そういう環境がなかったわけですが、社会進出してきたので、女性もそういうことが自由にできるよう

になった。そういうことをお互いにできるようになれば、それはもう認め合うということになるのだと思うのです。

ですから、それは普通になってくるのではないかなという気がします。どこまでいくのかというのはいろいろあるのですけれども、普通にお互いにそういうことができるようになるという感じはします。

（長谷川） インターネットができたし、いわゆる最近出会いメールなどが、社会問題になっています。ということは、いくらメールや何かを規制したところで、そういうのが起きてくるということは、やはり社会的にニーズがあるというか、ある種マーケティングがあるからこのようになるわけです。そういうことを、今の世代はどう思っているのでしょうか。今松村さんが言ったように、結婚しているけれども、何か少しアバンチュールな関係を持ちたいという気持ちなのか。そのあたり出会い系サイトに代表されるものに対する若い人の認識は。

（小山田） 意外と20代の人たちというのは、ネット系には逆にあまり興味を持っていないというか、そういうことよりも身近な人と親密な関係でいればいいというようなところがある。インターネットでだれか見つけてこようと思って、やっているようには思えない。

（長谷川） どういう世代が使っているのですか。若い世代とは関係ないのですか。

（小山田） 例えばうちの会社でいうと30代以降の人々という感じがします。

（長谷川） 30代以降ですか。

（小山田） あとは、結婚しているけれど家にいる奥さん方ではないでしょうか。女性の過激なコミック誌がはやったころ、あれが結構売れたということは、松村先生がおっしゃるとおり、何か女性もやりたかった現象が、あの購買力に非常に表れたかなと。

（長谷川） 男性が読んでいるだけではない。

（小山田） 男性がポルノ誌を買っているというのは何となくはわかるけれど

も、女性の方というのは、あまりそういうものを買っている風景も見なかったですね。主婦層を中心に2年ぐらい前からでしたか、女性のコミック誌が売れ出した。内容は、非常に男性誌も真っ青になるぐらい過激なものですけれど、ああいうものがものすごく売れたという現象があって、そのあと出会い系メールがはまりました。

データがないので、はっきり言えませんが、結局、その年齢というのは、若い人というよりは、雰囲気でいうと30代から40代ぐらいの人ではないでしょうか。酒屋で飲んでいて話題にしている世代というのは、大体それぐらいの人たちですね。20代の人というのは、あまりそういうのには興味を持たないで、ただ笑っているだけという感じです。

（長谷川） こういうのは、一種の社会の成熟度のようなものと関係があります。アメリカの前の大統領が何かしたときには大変な社会問題になって、大統領を辞めなければならないぐらいの問題になりました。しかし欧州では寛大なところというか、そういうのは、やはり社会の成熟度に関係があります。日本はどうもその中間ぐらいのところにあるような気がするのです。日本もそういう意味では、これからは成熟した社会になってくるといわれるわけなのですから。

（犬田） 最近セックスレスといわれています。これは、NHKの調査なのですけれども、「セックスをするのは、結婚式まではだめだ」というのは、73年で58%でした。それが98年の調査だと26%なのです。ですから3割はだめだと言うけれど、7割はいいと言っているわけです。結婚式まで許さないというのは、73年においては半分ぐらいだったのですね。今ではもう考えられない。

ところが、セックスレス夫婦というのは、これは朝日新聞の調査なのですが、年数回と、それからこの1年セックスしていないというのを足し合わせると28%です。この3割という結果は高いと見なくてははいけません。ですから、このように全体的に何かセックスレスになってきているということはあります。セックスをある種のコミュニケーションの一形態と考えると、ほかにいろいろなコミュニケーションはありますから、セックスだけでという必要はなくなってきたしまっているということなのではないでしょうか。

（長谷川） 先程の社会規範として考えてみた場合、これからは、ある種の寛容さというようなものが出てくるのでしょうか。

(犬田) おそらくそうだろうと思います。ですから、異性間のセックスレス化などということで、かなり変わってくるのではないのでしょうか。そのみを目的として、女の子とつき合うというのは、やはりかなりダサい話になってきています。そういう延長上で出てくるのではないのでしょうか。

(長谷川) ということは、そのフィードバックが次の世代にもかかっていくわけですから、若いときは若さゆえのエネルギーもあるかもしれませんが、年とともに目が肥えてきているというか厳しくなっている気がしますね。結婚にも影響がでてきますよね。

(犬田) そのようになったのはいつごろかという、これもあまりはっきりしないのですが、田中康夫は初期の小説で、近々自分の恋人と結婚することになるのだけれども、その以前の恋人から誘われたときに、食事だけしてセックスはしないでいかにうまく別れられるかという。その心の動きを女の方から書いているのです。田中康夫の若いころの短編は、なかなかうまいですね。(講談社・戦後短篇小説再発見・漂流する家族、所収)

(長谷川) ああそうですか。知事にしておくのはもったいない(笑)。

今、フランスなどで聞くと、「なぜ結婚するの」と言います。先程の遺産相続の問題や、離婚したあとに問題が出てくると。犬田先生が先程言われた非常にうまい4つの類型、結婚しているかしていないか、一緒に住んでいるか住んでいないかという類型があります。従来の概念からすると、結婚して一緒に住んでいるというのが、圧倒的に支配的な価値観だったわけです。それが徐々に崩れてきているわけですね。そうなってきたときに、社会というのは現象に追従して、法律は変わってくるのですけれども、そうなってくると、法律が制定されるということは、裏を返せば社会的なノルムというか規範が変わっているから法律がそれを詰めていくということです。

(犬田) それからマーケットが変わってきますね。消費マーケットが変わってくる。

そういう清らかな不倫というものを受け入れる、例えば食事の場所など、そのあたりがまだないのですよね。東京なんかでもあまりないですよね。

(長谷川) ましてや地方都市へ行くともっとないです。地方都市で一緒にいると、すごく目について、あっという間に噂が広がりますから。

（松村） たちまちばれてしまう。

（犬田） 隠れ家的な、べつに隠れているわけではないのだけれども、そういう場所がかなり必要になってくるのではないのでしょうか。

（長谷川） 特に、地方都市に行くと、飲み屋さんに行くと男性だけの社会だし、若い世代だったら不自然ではないけれども、やはりある男性と女性が夜飲みに行ったり、女性が夜飲みに行ったら、変な目で見がちです。

（松村） やはり、何か町全体がそういう中で恋愛空間になってくる。そうになっていく必要がありますよね。

（犬田） まちの構造を変えていかないといけない。そういう装置にしていく研究が必要ですね（笑）。

（松村） そういう機能を持っていかないといけないし、やはり日本人は、農村社会で育ってきて、たぶんついこの間まで農民だったと思うので、都市を使いきれていない。そういう文化は全然育っていないのです。

（犬田） もうだいぶ前ですけども、ある有名な女性学者が、女が飲みに行く場所がないと言っていました。ああいう有名な人だと、非常に肩身が狭いでしょうね。東京でも。

（松村） ヨーロッパなどに行けば、女性 2 人でワイン 1 本ボトルを空けているなんていうのは普通の絵だし、日本でもだいぶそういうものが見えてきましたけれど、そういうものがだんだん日本の社会の中に出てくることによって、先程いった恋愛市場というようなものが出てくる。

今、日本のまちは、全部子どものデートコースでしかないのだけれども、そうした先生がおっしゃったような、結婚したあとも、何か恋愛ではないですけど一緒に食事ができるような、そういう装置が必要なのだと思います。

（長谷川） 一方では、モータリゼーションということになると、山形など地方都市に行くとホテルがたくさん建っていてということにすぐになってしまう。それに先程いった文化を共有して、音楽を聴くなどは全くなって、すぐ極端に

なって、大人の男女が楽しめる文化的な空間が非常に欠落している。都市全体に文化的装置がないから、たぶん一緒に配偶者以外の人と歩いていると、何かおかしいのではないかなという状況になってしまいます。

（松村） 先程先生がセックスレスと言われましたが、セックスレスとは少し問題が違いますが、アルコールの飲み方が急にソフトになったのに関連しているのかなという気がします。昔は酒を飲むといったら、ただ飲むという感じだったけれども、今は食事のときにワインを1杯、2杯というような飲み方になる。昔みたいに居酒屋で一気に飲みなど、とにかく酒を飲むのがメインだということではない。コミュニケーションが多様化していると言われましたが、そういうところと何か非常に関係があるのかなという感じがします。居酒屋の機能が単機能から多機能に変化しているのだと思います。たぶんそういう果てに、都市の中の恋愛機能のような装置が埋め込まれていくのでしょうか。これはまさに途上にある現れだという感じもします。

（犬田） そのために、あたらしい言葉を発明しなければいけないのではないのでしょうか。今はいきなりわいせつな言葉になってしまっていますよね。セックスの意味を少し含んだようなものがが必要です。たとえば、フラート（flirt）するという言葉があります。服装なんかでもフラートする服がある。こびているわけではないのだけれども、少しセクシーに見せる服です。

（長谷川） それはマーケティングになるかもしれない。

（犬田） ええ、フラート（flirt）するというのは、そういう世界です。軽く女の子に声をかけたり、そういう世界。それである程度以上深入りしないという、そんな約束を最初から含んでいるような、そういう言葉や場所など、そういうものができるとおもしろいですね。

6-6 どのような問題が起きてくるのか

（長谷川） お時間もだいぶ経ったのですけれど、あと2つどうしても議論したい問題があります。

少子化時代に関連して2つの基本認識があろうかと思います。1つは、確実に子どもの数が少なくなってきた、それがいずれいわゆる結婚の適齢期に入って

いったときの問題という意味と、2つ目は今この時点で結婚することによって子どもを持つ・持たないという、選択の問題です。つまり将来結婚適齢期になったときどうなるかという問題と、今結婚したカップルあるいは結婚していなくてもいいのですが、そういうカップルが子どもを持たなくなっている、いわゆる少子化という現場の現象があるわけです。

その2つのことが当然入れ子になって議論してきているわけなのですが、いずれにしてもそれは、全く独立した問題ではありません。今の世代が子どもをつくらなくなるから結果として少子化になる。これは間違いのないわけです。という理由があるうと、少子化になっていくと思うのです。結婚というのが法律的に一緒になるという意味の問題だけではなくて、離れていてもときどき、セックスも含めて会うなど法的束縛を受けない結びつきもあるわけです。男性と女性は何らかのかたちで精神的なつながり、あるいは肉体的なつながりなどがいろいろあるかと思います。これは推測の域を出てないのですが、今後こうした現象は増えていくのではないだろうか。

例えば「マスオさん現象」のようなものがあります。今までは結婚したら大体女性が男性のところに行くか、あるいは別な家を持つということだったのだけれども、場合によっては、娘さんが一人娘だとすると、昔だと「お婿さん」というような言葉で、何となく少し肩身が狭かったけれど、今は「マスオさん現象」という言葉が定着して堂々としていられる。それから、先程のパラサイト。一方では、いわゆる結婚イコール同居という形態はとらないけれども、親のもとにしながら適度にエンジョイしている。そういうパラサイト的なものも出てきています。

一人っ子、一人娘、長男、長女が結婚することになると家督の問題が出てきて、そこで夫婦別姓の問題、同姓の問題など、今までなかった問題が顕在化してきているわけなのです。さらにもう少しレンジを拡げていった場合、国際結婚が増えてくるわけですが、何か他にも新たな問題が顕在化しないでしょうか。

しかし、どんな問題でも、いきなり10年後に新しい問題が飛び出してくるというのではなくて、今その兆候は出ているのではないかと思います。いきなり小山田さんに振るわけではないけれど、問題には大変な問題といい意味での問題というのがあります。小山田さんがヒアリングをしてきて、これからどうも1つの社会現象になってくるのではないかと気づかれた点がありますか。

(小山田) 一つは、先程も少し話がありましたけれども、お墓です。これの面倒を見る人がいなくなるわけです。今あるお墓の面倒見もいなくなる。する

と、新しいビジネスとして何らか出てくるだろうと思います。もう今自分の家のお墓がある家系の人、自分のお墓というよりは親だったり、おじいちゃん、おばあちゃんを含めて、そこのお墓の土地の問題、それからその維持の問題というのは、非常に大きくなっていくのだろうなと思います。

私は故郷が鹿児島ですけれども、東京へ出てきていて、弟は京都にいる。そうすると実家の墓参りなどというのは、年に1回しか行かないわけです。私は出張のついでに行っても、自分の妻や子どもは、なかなか行く機会は少ない。その住職さんなどともコミュニケーション不足になります。お祭りやお墓参りなどは、そのコミュニティの維持をするために、精神構造的にも必要なものだと思うのですけれども、それがみんな都心部に行ったり、少子化になることによって、その形態が変わる。すると、神社や仏教にしても何か変化していかなざるをえなくて、そこに問題とビジネスがあるのかなということが一つです。

（長谷川） なるほど。問題があるということは、裏を返せばそういうことですね。

（小山田） 問題は自治体側です。自治体というのは非常に少子化に対して危機を感じているわけです。去年、奈良県が、成人式に「結婚のすすめ」というガイドブックを配りましたが、千葉県もそうですし、静岡も何かそういうことをし始めたということは、よほど危機感を感じているのだろうと思います。「結婚のすすめ」なんか自治体がすることかと思っていましたけれども、そこまでしなければ結婚しないし、子どもをつくらないと思っている。言っていることは、結婚のすすめイコール子どものすすめなわけです。

その概念が変だなと思ったのは、そのデンマークの記事を見たときで、自治体は結婚しないと子どもを産んではいけないと思っているのです。法律の問題として、そのあたりの問題が非常に出てきています。ですから、自治体の税金が入ってこない、学校教育をどうするのかといったいろいろな問題が出てきます。しかし、どこかでは今の現実をきちんと見据えて、法律を変えたり、「結婚のすすめ」ではなくて、別なすすめを何かしなければいけないのではないかな。国の問題としても、制度的な問題が一つあるなと思います。

それからもう一つは、若者というよりは、今の60代以上くらいの、親の困惑です。自分の子どもは数人いる。でもその子どもたちはその子ども(孫)をつくらない。そのことに対して非常に悩んでいる。おじいちゃん、おばあちゃんたちが、自分の家をだれに継ぐのか、この墓はだれが面倒を見てくれるのだろう

か、土地や山や田んぼの問題を心配しています。

これは、結婚や子どもということと、非常に大きく関係していて、孫が帰ってこない、孫に対してどう接したらいいのか、あるいは孫がいないわけです。

近年は、やはり自分の親族も自分の親もそうでしたけれども、がんで病院に入ってしまうことがあったときに、相談する相手や、看病をお願いする相手(子どもや孫)が少なくなっています。また少人数に非常に負担をかけてしまうというように考えがちです。子どもが一人しかいないといったときに、「あなたにすべてを頼むのは非常に負担だよね」と思いがちで、自ら、「申し訳ないから」ということでケア施設に入っていくってしまう。子どもが頼んだわけではなくて、自ら行ってしまうという現象があって、そこに非常に地域の問題、親の問題が発生してきそうだなと思います。

(長谷川) いわゆる空間の問題ですね。

(小山田) はい。

(長谷川) そういう意味だと、今も触れていた家族との問題になるのですが、結局 2 人が結婚した場合に、今までの概念からいくと、親や親戚づき合いなど、いろいろなつながりの中で考えなければいけないわけです。そういうつながりを全部払拭したいというのが、今の若い人たちなのです。2 人の仲がよければ、あまりそういうものに関係を持ちたくないねというかたちです。

親戚づき合いまで一緒にさせるのは嫌だねというようなことですね。

(松村) 基本的に、そういうものは全部取っ払っていかようとしています。今までの結婚というのは家や社会や、そういう単位があって結婚したところがありますが、そういうものも全部なくなっていますから、結婚は全部個人の問題として帰結してしまっていて、個人で処理しなければいけないということになってしまっています。それを望んでいる部分もあるし、社会がそういうことになっていくという部分もある。

親の面倒にしても、今年金という制度があるわけですから、親の問題と自分は基本的にはもう切れています。親も子供の世話になるとは考えていません。親の面倒と結婚とは関係はないと思います。ですから、昔は結婚するなら、長男とではなく次男というような話もありましたが、今は兄弟が少なくなってみな長男ということもあるのですが、結婚するなら次男と、ということも少なくなっています。

結婚するのは相手の男性とであって、家でも、舅・姑でもない。結婚の関係は相手との間に 1 つだけあるのみという意識です。家全体と結婚するというような意識ではありません。これは見合い結婚から恋愛結婚への移行の中で同時に移ってきている意識ですが、最近は結婚の相手とのわずか 1 つの関係も弱くなっていて、しょせん他人であるという意識で、離婚もしやすくなっていますし、友達感覚、ルームメイト感覚とも言ってもいいような関係になっています。

そういう意味でより希薄で、結婚したり離婚したりすることが容易であるような関係を望んでいるのだと思います。こうした希薄な結婚関係を肯定し推し進めていくためには、先程も言ったように、育児を家事から切り離さないといけません。育児を家から外へ出すという話が必ずそこにあるのではないかと思います。それは婚外子なのかもしれませんし、嫡出子の場合もあるかもしれないけれども、どちらにしても育児を外へ出すという話が必ずくるのではないかなと思います。

その次に問題なのは相続だと思います。相続をどのように処理するのか、相続の問題がきちんとされないから子どもをつくらないというのも、多いのではないかなと思います。今、一代で大企業を築いたような社長さんが、自分の子どもには継がさないというのが多くなりました。それはやはり、そういう面でも子供との関係を切ろうとしていると考えられます。

義理の親との関係を切っていくのと同様に、子供との関係も、育児もそうですが、遺産の相続という点でも切っていく。たぶんそういうものが世の中の主流になっていくのではないかと思います。葬式も、遺骨をどこか海に流してくれという例は多くなりました。これもいろいろな意味で関係を切ろうとしています。

結果的には、見てみると、相続というのは、結局ちゃらにするような方向に行くのではないかと思います。財産の一切を寄付するなどして子供には残さない。そうすることによって、何か安心して子どもが産める。相続という概念が続くかぎり、子どもをつくりたくないという人がいるのではないのかなという気がするのです。

育児もアウトソーシングなど家の外へ出す。相続の関係もない。そういうことになって初めて子どもをつくれる。そういう相続の問題があると思います。

それからもう 1 つは、小さな話なのですが、晩婚化について最近思うのは、40 歳ぐらいで結婚する人が多いわけですが、40 歳で結婚すると親は 70 歳です。親が兄弟の末っ子なんかですと、おじ、おばはもう 80 歳ぐらいです。披露宴なんてやってられないわけです（笑）。出て来られません。披露宴ができないわけです。結局、親族が集まって結婚をオーソライズする仕組みがもうないわけ

です。ですから、そういう意味でも、今の結婚は血縁的にも切れかかっているといえます。

（犬田） 社会的承認なんて必要なくなる。できなくなっているから。

（松村） しかも、終身雇用のサラリーマンでもなくなっていますから、職場のオーソライズも必要でなくて、上司を呼ぶという概念もだんだんなくなってきています。ですから、披露宴そのものがもうなくなります。

（犬田） 極端な地味婚というような。

（松村） そういうかたちになってしまう。

（長谷川） 最近結婚式に呼ばれて行くと、今、お仲人さんを立てない人が多いです。

（小山田） 昔のような結婚式は、もうほとんどないですね。

（長谷川） 友達か何かが集まって、いわゆるパーティー形式ですよ。

（犬田） 僕のお師匠さんの1人は、60過ぎてから結婚したのです。実際には、ある女の人とずっと一緒にいたので、べつにどうってこともないのだけれど、だれも承認するというか結婚式はしなかったのです。ただ、そうかといって子どもをつくりませんから、遺産をどうこうするということでもないのです。

少し次元が違いますけれども、新庄選手の「記録より記憶」という話は、おもしろいと思いました。我々の社会には、記憶を共有するシステムというのは、あまりないのです。記録はあるのです。いろいろなかたちで記録を残すということはある。戦後社会というのは大体記録の社会です。パフォーマンスを高くするわけですよ。ですからあいつはこんなことをやったなというパフォーマンスが高い方がいいのです。

しかし、だんだんこの社会が成熟すると、記憶を共有したり、記憶を継承するなど、そういう仕組みというのが、だんだん必要になるのではないかと思います。

（小山田） それも何かありそうですね。

（犬田） 自分史や、それからいろいろなホームページをつくって披露している。それがその人のお墓になっていくわけです。

（長谷川） すべてそれに集約される。

（小山田） 若い人たちが言っているのは、その言葉のような気がします。言っていることというのは、記憶の共有のような。彼らはそう言わないにしても、すべての行動が、共有したい何かを欲しているのかなと思います。

（犬田） 社会的にそれを保障してやらないと、安心できないわけです。そういうものが必要なのではないでしょうか。

記憶する、何か記憶を継承する、それを保存するという、そういう社会メカニズムをつくっておくと、これもまた 1 つのマーケットになるのではないのでしょうか。

（長谷川） そうですね。僕もそんな気がしています。

今度、容易にビデオの編集や、DVD に焼きつけるなど作り易くなってきました。

（小山田） うちのおじいちゃんは国語の先生だったのですが、最後に似たようなことをおっしゃって、君たちはそれぞれの記憶を残しなさいと言って亡くなりました。そのあとで親族、教え子、みんなで感想文を書いた本を一冊にしたのです。自分史ではなくて、それぞれの記憶を集めた本を作ったことがあるのです。みんなそういうことには協力してくれました。何か記憶があるわけです。本当に昔からの人もいれば、最近の人もいます。それはいい意味で、地域のコミュニティーの結束が、より固まったり、そういう話題で、また新たなエネルギーが出るというようなことはあるなという気はします。

（犬田） そうですね。ですから、昔は神話というのが、いろいろあったのだけれども、今はそういうのはなかなかできない。神話のかたちで記憶を残していくわけです。そういう機能というのが、この社会にもう少しあった方がいいと思います。

（長谷川） そうですね。

6-7 マーケティングにどのような影響が起きてくるのか

(長谷川) 今、犬田先生から記憶を共有していくような機能を、マーケティングに取り入れていくというお話がありました。

最後に、今日の議論というか、今までのご議論を踏まえたかたちで、何か社会サービスとして新しいマーケットがあるのではないかと思いますのですが。

最近思うのは、本屋さんで見ると、女性誌のところには、いつでもブライダルの本があります。結婚式というのは1つの通過儀礼のようなものですが、それをより華やかにしたいという傾向はあるのではと思うのです。

(松村) やりたいのですよね。

(犬田) 社会には、1つの統合を維持するためにいろいろな儀式がある。その儀式が少し古くなってどうにもならないから、それを脱ぎ捨てたいのだけれども、なかなかそれはうまくいかないということでしょう。儀式をあらたに体系的につくっていくということも、これから重要です。

(松村) ですから披露宴に代わるというか、何か新しい結婚式というのがあるのではないのでしょうか。例えば、今、葬式がどんどん変わってきているように、披露宴もだいが変わるのではないかなと思います。ただ、どういうかたちになるのかはわからない。今は、友達を招いて、華やかにやったり、レストランでやるというものがはやっています。何かもう少し違うものが求められているのだけれども、だれも答えをいっていない。そんな感じがするのですけれど。

(犬田) 天皇家を維持できたのは、1つには、儀式を非常に神秘化してしまって、何かうかがい知れないというイメージを付けるのに成功したからです。あれで細々と、いまだに続いているのですよね(笑)。

(長谷川) それがオープンになってしまったら。

(犬田) オープンにしたら大したことないですよ。

天皇家というのは、稲の豊作を祈ることによって食糧を確保するという、そういう機能をはたしていたらしいです。稲にまつわるいろいろな儀式をつくって、それを天皇家が独占することによってそこそこつながってきた。

昔、4世紀ぐらいに凶作になったときに、お前がもたもたしているから米がち

やんとできなかったといって、責任を問われて殺されたり、あるいは殺される前に逃げだしたりした天皇がいた。そういう記録があるそうです。稲の儀式というのは非常に天皇家にとって重要だった。

（松村） それは天皇家という、ある種コミュニティーがあって、その中でオーソライズするというか、儀式がある。

（犬田） 一般的にいうと、天皇家はかつての生殖テクノロジーの主催者なのです。今の生命テクノロジーです。

（松村） 今までの話を聞くと、例えば先程言ったサラリーマン型であれば上司を招いてという披露宴がありましたが、これからはサラリーマン社会が崩れていくわけですから、もう上司を招く結婚式はありません。それから、親族というのももうなくなってしまふ。今までの役割を持つ結婚式はなくなります。

しかし、ウェディングドレスは着たい、結婚式もやりたいと思っています。またどこかで誰かにオーソライズされたいという気持ちがあるわけです。ではどういうコミュニティーで結婚式をやるようになるのか。それがこれからすごく大事なことだと思います。友達コミュニティーではなくて、例えば SOHO などをやっている人たちは、どういうコミュニティーで結婚式をやるのだろうか。

また、バーチャル結婚式みたいなものをするかもしれません。あるいは NPO などに参加をしている人が、NPO や SOHO などのコミュニティーでやることもあろうでしょう。あとは新しいコミュニティーみたいなもの。

（小山田） アップルの社長さんの原田さんが近々結婚するのですけれども、リングスターズとかいうご自分のバンドを持っておられまして、そこで出会った歌姫と結ばれることになったそうです。けっして会社の重役ばかりがあいさつする結婚式タイプではなく、今は社長職の方もフレンドリーなパーティで披露する時代なんだなという印象をうけました。またそれを勝手にアップルの好きな人たちがメールでやり取りをして、広めているのです。まさに時代風だなと思います。

（松村） ネットでライブ中継をするという話ですね。

（小山田） そうそう、きっと内輪ではライブ中継をするのですよ。

（松村） それはやはり情報社会のコミュニティーですね。

（（小山田） その方がいいという人もたぶんもっと出てくる。

今度たぶんスティーブン・ジョブズが来たときに、基調講演かパーティの中で、そのことについてジョークを言うのではないのでしょうか。

（犬田） 情報社会の儀式というのは、確かに何か挑戦的ですよ。

（小山田） そうですね。

（松村） 何かかたちがありそうですよね。

（犬田） ほしいし、ありそうですしね。

（長谷川） そうなると、先程の議論の中では、一緒になる2人については、2人に関係したものは共有したいけれど、それぞれに持っている親や親戚などの関係は、2人で共有できないからできるだけ離したい。でも2人で持っている友達はみんな呼んでくる。そのように内側に向いている感じがします。それぞれが持っている関係というのはできるだけ小さくして、2人が共通に持っているものは大事にしようというような流れになったと思います。

そうなってきたときに、関係を切らなければいけない部分がでてくるはず。これから結婚するときに、ある種の法律相談というか、やはり身ぎれいにして清算したいというニーズがあると思います。僕らは結婚したいけれど、実はこういう問題を持っているということがあり、弁護士までいくと、敷居が高くなるのだけれど、その中間ぐらいで問題解決をするシステムが求められているかもしれません。場合によっては病理的ないろいろな問題の相談に乗ってくれる。そうした何か新しいビジネスが考えられる。

（松村） だれも知らせてくれませんか、今は。

（小山田） 結婚情報サービス会社は、今まで結婚する瞬間をビジネスにしていたわけですが、今長谷川先生がおっしゃったように、結婚から先は全部、その後のライフスタイルそのものをコーディネートする、ビジネスを見つけないといけないということでしょう。すると、もうどこかで今くっついていきますけれど、結婚式と葬儀屋が一緒だということになる。全部面倒を見てあげ

ますよということです。すると、先程の法律相談なんかもそうだけれど、人が死ぬときはどこに相談していいかわからないけれど、葬儀屋に行けばどうやって届け出を出すといったことを全部教えてくれますよね。それと同じで、結婚のときもそうかもしれない。もっといえば、結婚前もそこかもしれない。少子化が進むと当然身近な相談相手が少なくなります。親も少なくなるし、親族もいなくなるわけです。すると何か相談する窓口ニーズが生まれます。

（長谷川） プライベートなこともあって。

（小山田） 特にプライベートなことが多くなるのではないですか。占いも廃業しませんから。

（長谷川） ちなみにネット上に、結婚に関するポータルサイトというのは、あるのですか。

（小山田） ありますよ。完全なるポータルサイトというわけではないのですが。

（長谷川） 何かいろいろ式場などが書いてあるのはあるけれども、今みたいにもっと立体的に、結婚に関することが記されたサイトはあるのでしょうか。

これはものすごいビジネスになると思うのだけれど。

同時にそこに離婚のことまで書いたら（笑）。

（小山田） 法律的手続きはこうなりますよということまで書いてある。それを今担っているのは、例えば、週刊誌の婦人系の雑誌です。

（長谷川） 一番すごいのは何だっけ、三大誌あるのですよね。

（小山田） 女性自身ですかね。

特集で、そういうことをきちんと法律的にも整理した表などを載せて、付録でついてきたりしているじゃないですか。なおかつ事例付で。この内容にあるようなことを恥ずかしくなく相談できる場所があるのかなと思います。

（長谷川） 会員制にした方がいいですね。

（小山田） 相手を見つけるということが問題ではなくて、今たぶん若い人たちも、相手を見つけたときに出るトラブルのことを占い師に聞いているように聞いています。「どういう人と出会えますか」「私はどうなんだ」ということではなくて、「今の彼との関係性のことが非常に気がかりだ」「それがどこまで続くのですか」「彼とどこへ遊びに行ったらいいですか。どうしてあげたらいいですか。」など、そういう質問が多いのだと聞きました。

占い師さんのもう少し総合的な窓口というようなことかもしれません。ただ、それは、手続きではだめなのです。若者が相談できるセンスを持っていないければいけなくて、そこが難しいのかもしれない。

結婚式もセンスよくまとめてくれる喫茶店など、結婚式場ではなくて、もっと別な結構センスのいいところでみんなやりたがる。そのマネージャーというのは、やはり若者の感覚をきちんとキャッチしています。相談に来たときに、ぱっと2人を見て、どのようにするかというのを瞬間的にどうも決めるようだけれども、そういうビジネスは、もっと結婚のとき以外にも、たぶんその人の能力は生かせることがあるのではないかなと思います。

（長谷川） 結婚コンサルタントというと、何か気軽に日本だけといいますが、本当は海外にもマリッジコンサルタントといわれているものがあるのです。そして、いろいろな今のような問題、法律的なことなどを有料で、もちろん親身になって相談に乗ってくれる。

（小山田） そうですね。それはあってもいいかもしれませんね。

（長谷川） 日本の場合、結婚式場で、引き出物は何にしたらいいとか、最近は新婚旅行まで提供している。居住なども相談に乗ってくれる。

（小山田） 「アフタヌーンティー」が雑貨屋からインテリアのコンサルタント業を展開しています。結婚する2人の部屋を全部コーディネートしてあげますというサービスがあるのです。そういうことだと思うのです。必要なのは、ああいうセンスだと思うのです。何か今の若者の持っているセンスとビジネスが一体化していて、どこかに琴線がないとだれも来ない。

（長谷川） いろいろ議論をしているうちに2時間近くなって、まだ話も尽きないと思うのですけれども、今日いろいろ議論していただいたことを、これからまとめたいと思います。大体大きく分けると、3つぐらいの議論があったかな

という感じがします。



1 つは、言葉としてこういうのがあるかどうか分かりませんが、「柔結婚」というのですか、柔らかい結婚です。今までの結婚というのは、非常にリジッドで、法律的にもかちとして、家の中に入る、親類づき合いをするなどとさまざまな制約があり、そのためにいろいろな社会的な儀式や通過儀礼的なことをやってきたわけです。次の世代、特に、少子化時代の次の世代というのは、柔らかい結婚観になっていく。それは、現象面で見れば、必ずしも結婚して同じところに住むとか、法律的に入籍しなければいけないというわけではなくなる。構造的な変化が起き始めていて、今その過渡期になっていくのではないかと思います。今の小学校、中学校の世代が結婚適齢期になる頃には、もっと柔らかい結婚になっていく。今までの結婚は、束縛するとか排他的にするという形態でしたが、これからはむしろそうではない。何が柔らかいかは、もっとこれから観測して議論すべきだけれども、いずれにしても 2 人ががんじがらめになって制約されるのはみんな嫌がっているといえるでしょう。

2 点目は、それとも呼応してきますが、2 人の共有するもの、関係しているものについては非常に大事にするけれど、それ以外については限りなく自由になりたい。そういうかたちでの結婚にシフトしていくでしょう。それがさらに延長していくと、犬田先生から最初にまとめていただいた、同居する・同居しない、結婚という形態を取るか・取らないかという 4 つの分類について、それぞれ 4 つの局面が出てくると思います。そのそれぞれについて議論が展開できま

す。

3番目の問題は、柔らかい結婚形態になっていったときに、社会システムが必ずしもそれに追いついていないということがあります。例えば、法的な結婚していない状況で子どもが産まれたという、いわゆる嫡外子というか、婚外子というか、そういう場合に対する社会的な認知や受け皿が、日本は必ずしも十分にされていません。デンマークで少子化に歯止めがかかってきたのは、りっぱな子どもとして、社会の子どもとして育てていこうという、受け皿が出てきていたからです。安心して子どもを産めるといって変ですけども、それが結果として少子化を克服できる一つの素材になっていると思います。仮に子どもを持つとすれば、結婚という形態でないと子どもが持ち難いというのが、今の日本のシステムになっているわけで、そこは考えなければいけないだろうと思います。

それから産まれた以上は、当然育てなければいけないわけで、子育てをどうしていくかは、これは大変大きな問題です。犬田先生の言葉を使えば、ある種の不良債権ということで、大変な重荷になってきた。子どもを育てることが楽しいというのは、ある種の幻想であって、それが1つは共働きや、女性の社会進出などによって子どもを安心して育てられるという担保が取れないために、子どもを持ちたくないというケースも増えています。「できちゃった結婚」などもあるのだけでも、そのあたりが、次の結婚観を考えるときの課題になると思います。産まれてきた子どもをどうしていくか。もちろんお金もかかるし、自分たちの生活も束縛されていく。その負担があまりにも重すぎると、「だったらあまり持ちたくないね」ということにも、社会現象としてはつながっていくと思います。

経済的な意味でお互いに独立して生活できれば、「わざわざ結婚する必要もないね」ということで、結婚の適齢期が晩婚化していく。もちろん性的な関係などは、もっと若いときからあるのでしょうけれども、結婚に至るには、かなり時間がかかって、晩婚化という傾向になっています。

最後にもし言うならば、結局は男性と女性が、これからの時代の中でどうしたら自分たちが幸せになれるかが中心になってきて、それにまつわる家族など社会的な関係はできるだけ払拭していく傾向にある。裏を返せば、どうしたら2人が幸せになれるかというところから結婚観をもう一度組み立て直していかなないと、おかしい問題が出てくることになるのかなと思います。ただ、社会の問題ですから、そう簡単に解ける問題ではありません。

もちろん、先程の地域の問題や、お墓の問題などもこの中に入ってくると思います。

何かあと、もしこれだけはぜひいっておきたいということがあれば、お願いいたします。

（犬田） サステナビリティという最近はやりの問題があります。地域社会のサステナビリティというのはかなり怪しいのです。それから国家のサステナビリティも幾分怪しいのだけれども、かなり安定している。しかし、家族のサステナビリティというのは、意外と考えていないのです。それをどうするか。つまり結婚という制度を安定化したり、それから安心して死んでいけるような、死の制度化。それも家族のサステナビリティの一部分だと思いますが、それをちゃんとやる。

ここでは、家族と地域社会のサステナビリティをどう構想していくか。しかも、これは関連しているのです。家族と地域社会は、お互いにサステナビリティの問題を共有しているのです。そういう家族のサステナビリティをいかに達成していくかという大きな問題が、今、1つあるのではないのでしょうか。

（松村） その6つの構造要素が、今はみんな個、個別になっているのですが、1つだけ個ではなくて世帯で考えようというような話がある。それが税金です。税金は今、個人で申告していますけれども、所得税は世帯で収支しましょうという話題があります。それにはいままでの逆の流れであって、そこをうまく利用すると、また家族や家庭という概念も変わるかなと思います。

（長谷川） それではお時間になりましたので、このへんで終わりにしたいと思います。本日はありがとうございました。